兵庫県文化財調査報告　第452冊

養父市

寺地古墳
寺地遺跡
寺地窯跡群

―通常砂防事業（砂）尾和田川に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

養父市

寺地古墳
寺地遺跡
寺地窯跡群

—通常砂防事業（砂）尾和田川に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

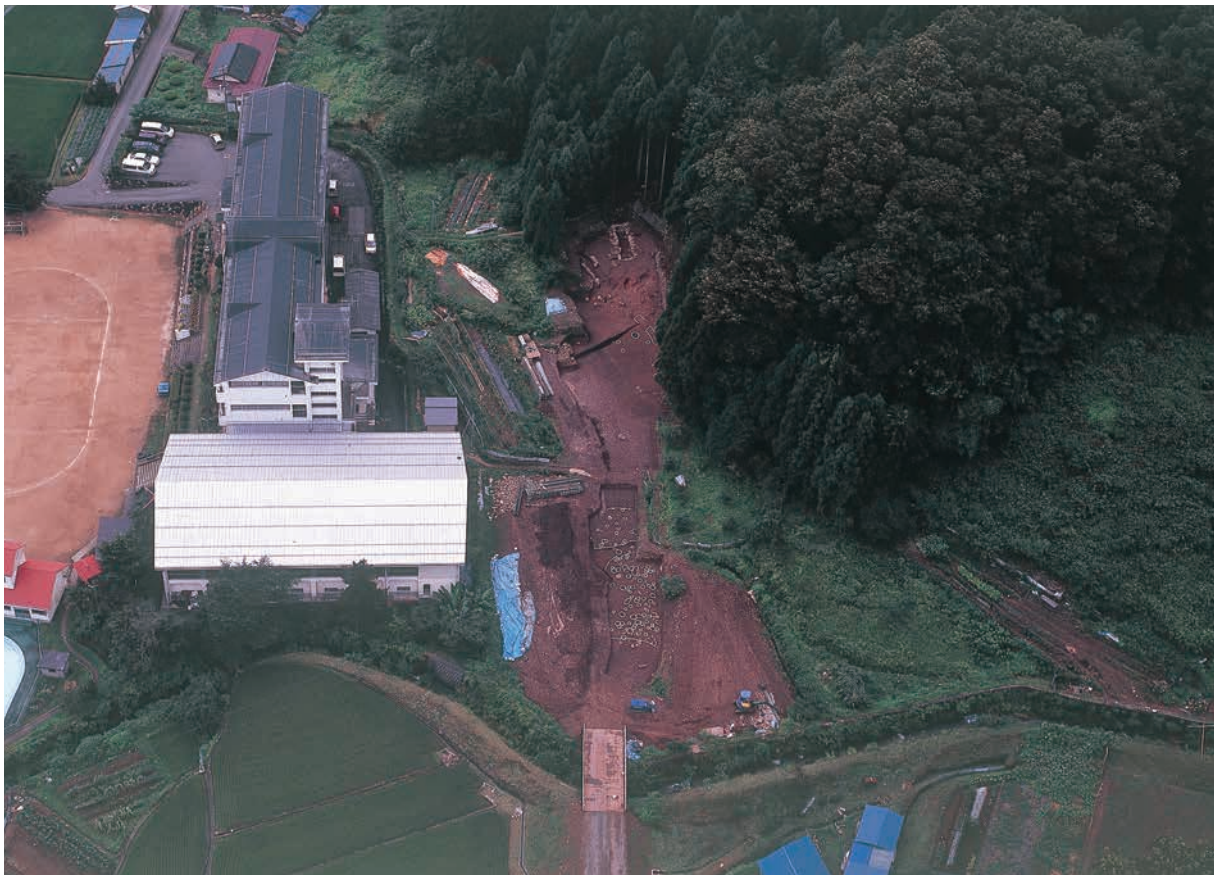
平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

調査区全景

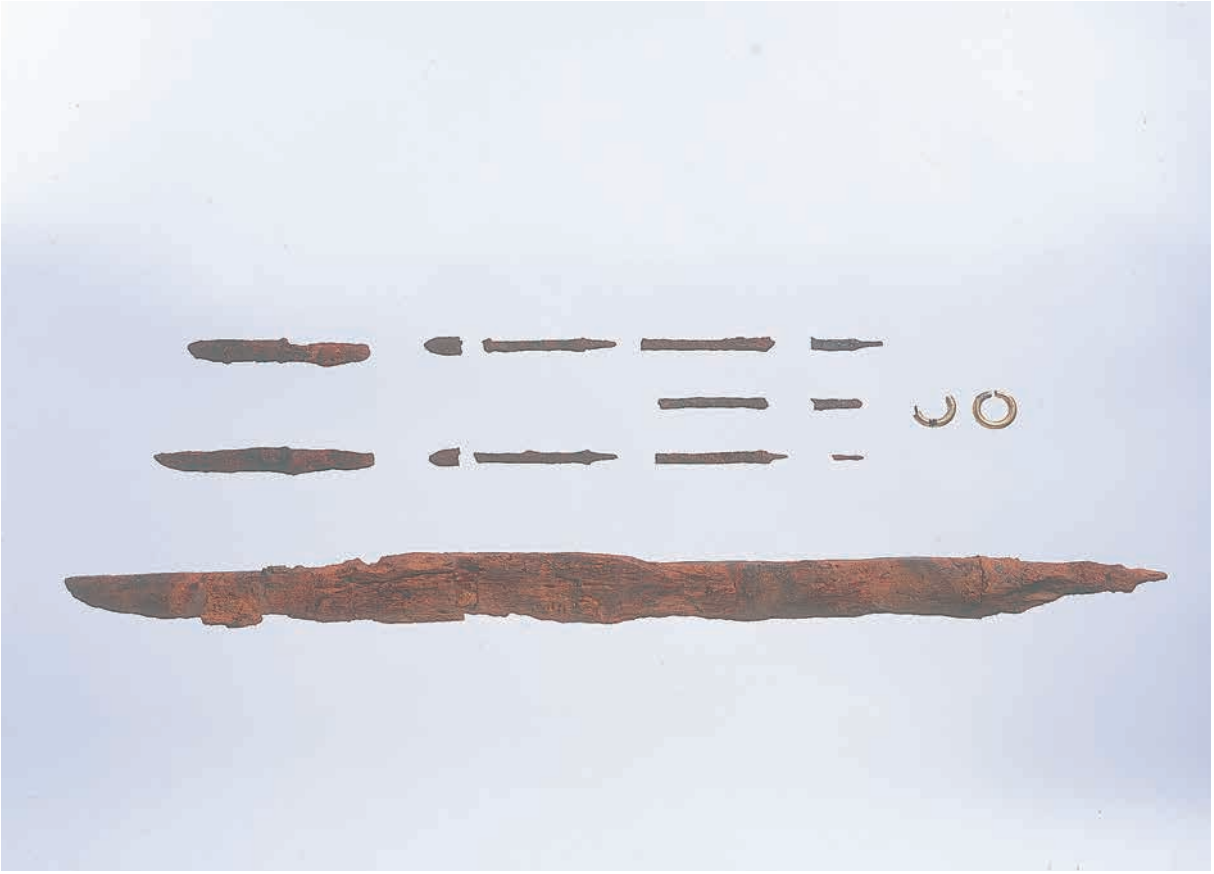
調査区遠景（南から）

調査区遠景（東から）



調査区近景（東から）

八木川中流域の景観（東から）



寺地古墳遺物

寺地古墳遺物

寺地古墳遺物

寺地古墳遺物

寺地遺跡出土遺物（土馬）

寺地窯跡群遺物

例　　言

1．本書は、兵庫県養父市大谷（旧養父郡関宮町大谷）に所在する、寺地古墳・寺地遺跡・寺地窯跡群の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、通常砂防事業 (砂) 尾和田川に伴い、兵庫県但馬県民局八鹿土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会が平成 15（平成 2003）年度に実施した。また整理業務は、兵庫県但馬県民局養父土木事務所の依頼に基づき、平成 23（2011）年度は兵庫県立考古博物館、平成 24（2012）年度は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（兵庫県立考古博物館内）において実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

試掘調査　　平成 14 年 7 月 16 日～平成 14 年 7 月 18 日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平成 15 年 2 月 18 日～平成 15 年 2 月 19 日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

本発掘調査　平成 15 年 5 月 14 日～平成 15 年 8 月 16 日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

工事請負：（株）安井工務店

（出土品整理作業）

平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

実施機関：兵庫県立考古博物館

平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4．遺跡の空中写真撮影ならびに図化作業は、（株）かんこうに委託して実施した。

5．本書に掲載した遺物写真は、（株）地域文化財研究所に委託して撮影した。

7．本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部、久保弘幸・鐵英記が担当した。

8．本調査において出土した遺物や作成した写真･図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

9．本発掘調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。

岡田章一・渡辺昇・岸本一宏・西口圭介・山田清朝（以上兵庫県立考古博物館）

凡例

1．本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用いている

2．本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北である

3．本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による

4．挿図中で用いた遺構の略称は次のとおりである。　　P：柱穴　　SK：土坑　SD：溝

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　発掘調査の概要 …… 5
第３節　整理事業の概要 …… 9

第３章　寺地古墳
第１節　墳丘と石室 …… 10
第２節　遺物の出土状況 …… 10
第３節　出土遺物 …… 17

第４章　寺地遺跡
第１節　調査区の微地形と堆積物 …… 23
第２節　遺構と遺物 …… 23
第３節　小結 …… 46

第５章　寺地窯跡群
第１節　遺構の立地 …… 47
第２節　遺構 …… 47
第３節　遺物 …… 51
第４節　小結 …… 56

第６章　結　語
第１節　寺地古墳 …… 57
第２節　寺地遺跡 …… 57
第３節　寺地窯跡群 …… 58

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　寺地遺跡と周辺の遺跡（1/35000）…… 3
第３図　確認調査時出土遺物 …… 6
第４図　調査区の位置 …… 7
第５図　調査区付近の地形断面 …… 8
第６図　墳丘平面図・断面図 …… 11
第７図　石室床面 …… 12
第８図　石室平面図・側面図 …… 13
第９図　遺物出土状況 …… 18
第10図　石室内出土遺物（第Ⅰ群） …… 19
第11図　石室内出土遺物（第Ⅱ群） …… 20
第12図　石室内出土金属製品 …… 21
第13図　１区地層断面図 …… 23
第14図　土師器甕の分類 …… 24
第15図　１区遺構平面図 …… 25
第16図　１区遺構断面図 …… 25
第17図　１区包含層出土の遺物（1） …… 27
第18図　１区包含層出土の遺物（2） …… 28
第19図　１区包含層出土の遺物（3） …… 29
第20図　１区包含層出土の遺物（4） …… 31
第21図　１区包含層出土の遺物（5） …… 32
第22図　１区包含層出土の遺物（6） …… 33
第23図　１区包含層出土の遺物（7） …… 33
第24図　１区包含層出土の遺物（8） …… 35
第25図　１区包含層出土の遺物（9） …… 36
第26図　１区包含層出土の遺物（10） …… 38
第27図　１区包含層出土の遺物（11） …… 40
第28図　２区土坑断面図 …… 41
第29図　２区平面図 …… 42
第30図　２区出土の遺物（1） …… 43
第31図　２区出土の遺物（2） …… 45
第32図　寺地窯跡群平面図 …… 47
第33図　１号窯跡検出状況 …… 48
第34図　１号窯跡断面図 …… 49
第35図　２号窯跡平面・断面図 …… 50
第36図　３号窯跡・土坑１ …… 51
第37図　寺地窯跡群における土師器の分類 … 52
第38図　寺地窯跡群出土土師器の径高比分布… 53
第39図　１・２号窯跡出土の遺物 …… 54
第40図　土坑１および窯跡下方斜面出土の遺物 …… 55
第41図　八木川中流～上流域の須恵器・土師器窯跡 …… 58

表 目 次

第１表　寺地遺跡ほか発掘調査一覧 …… 5
第２表　整理作業の工程 …… 9
第３表　２区柱穴内出土遺物 …… 44
第４表　掲載遺物一覧表 …… 61～74

巻頭図版目次

巻頭図版１　調査区全景
巻頭図版２上　調査区遠景（南から）
　　下　調査区遠景（東から）
巻頭図版３上　調査区近景（東から）
　　下　八木川中流域の景観（東から）
巻頭図版４上 寺地古墳出土遺物

下　寺地古墳出土遺物
巻頭図版５上　寺地古墳出土遺物
下　寺地古墳出土遺物
巻頭図版６上　寺地遺跡出土遺物（土馬）
下　寺地窯跡群出土遺物

図版目次

図版１上　古墳全景（南から）
中　石室全景（南から）
下　古墳全景（東から）
図版２上　石室床面全景（西から）
下　石室床面全景（東から）
図版３上　第２群土器出土状況（東から）
中　第２群土器出土状況（北から）
下　第１群土器出土状況（西から）
図版４上　鉄刀・耳環等出土状況（北から）
中　石室閉塞状況（東から）
下　石室閉塞状況（西から）
図版５上　石室閉塞状況:外側閉塞石除去（西から）
中　石室入口部：天井石除去後（西から）
下　石室入口部：天井石除去後（東から）
図版６上　石室入口部北側立石（南から）
中　石室入口部南側立石（北から）
下　石室基底石全景（南から）
図版７上　石室入口部南側（北から）
中　石室入口部北側（南から）
下　石室完掘状況（南から）
図版８　寺地古墳遺物（１）
図版９　寺地古墳遺物（２）
図版10　寺地古墳遺物（３）
図版11　寺地古墳遺物（４）
図版12　寺地古墳遺物（５）
図版13　寺地古墳遺物（６）
図版14上　調査区全景（東から）
中　１区斜面部の遺構（南東から）
下　１区南部の遺構（南から）
図版15上　１区溝１断面
中　１区土坑１断面
下　１区土坑１断面
図版16上　１区地層堆積状況（南東から）
中　１区地層堆積状況（東から）
下　１区包含層鉄器出土状況
図版17上　２区遺構検出状況（東から）
下　２区遺構検出状況（東から）
図版18　寺地遺跡遺物（１）
図版19　寺地遺跡遺物（２）
図版20　寺地遺跡遺物（３）
図版21　寺地遺跡遺物（４）
図版22　寺地遺跡遺物（５）
図版23　寺地遺跡遺物（６）
図版24　寺地遺跡遺物（７）
図版25　寺地遺跡遺物（８）
図版26　寺地遺跡遺物（９）
図版27　寺地遺跡遺物（10）
図版28　寺地遺跡遺物（11）
図版29　寺地遺跡遺物（12）
図版30　寺地遺跡遺物（13）
図版31　寺地遺跡遺物（14）
図版32　寺地遺跡遺物（15）
図版33　寺地遺跡遺物（16）
図版34　寺地遺跡遺物（17）
図版35　寺地遺跡遺物（18）
図版36　寺地遺跡遺物（19）
図版37　寺地遺跡遺物（20）
図版38　寺地遺跡遺物（21）
図版39　寺地遺跡遺物（22）
図版40　寺地遺跡遺物（23）
図版41　寺地遺跡遺物（24）
図版42　寺地遺跡遺物（25）

図版43　寺地遺跡遺物（26）
図版44　寺地遺跡遺物（27）
図版45　寺地遺跡遺物（28）
図版46　寺地遺跡遺物（29）
図版47　寺地遺跡遺物（30）
図版48上　寺地窯跡群全景（南東から）
中　1号窯跡検出状況（南から）
下　1号窯跡完掘状況（南から）
図版49上　1号窯跡焼成室内壁落下状況（南から）
中　1号窯跡焼成室（南から）
下　1号窯跡焚口部（南から）
図版50上　1号窯跡焼成室内堆積状況（西から）
中　1号窯跡前庭部堆積状況（西から）
下　1号窯跡焚口部堆積状況（西から）
図版51上　2号窯跡検出状況（南東から）
下　2号窯跡完掘状況（南東から）
図版52上　2号窯跡燃焼室遺物出土状況(南東から）
中　2号窯跡遺物出土状況（南東から）
下　2号窯跡遺物出土状況（北西から）
図版53上　2号窯跡全景（北西から）
中　2号窯跡窯体内堆積状況（南西から）
下　2号窯跡前庭部堆積状況（北西から）
図版54
上　2号窯跡前庭部堆積状況（北西から）
中　2号窯跡窯体断ち割り断面（南東から）
下　2号窯跡窯体断ち割り断面（南西から）
図版55
上　2号窯跡窯体断ち割り断面（南東から）
中　3号窯跡断面（南から）
下　3号窯跡炭・焼土面検出状況（南から）
図版56
上　3号器尼跡炭層堆積状況（南から）
下　3号窯跡断ち割り断面（南から）
図版57　寺地窯跡群遺物（1）
図版58　寺地窯跡群遺物（2）
図版59　寺地窯跡群遺物（3）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節．地理的環境

寺地古墳・寺地窯跡群・寺地遺跡は、兵庫県養父市大谷（旧養父郡関宮町大谷）に所在する。遺跡が所在する養父市は、兵庫県の北半を占める但馬地域の南部に位置し、北は豊岡市、東は朝来市、南は宍粟市、西は鳥取県若桜町にそれぞれ接している。また神戸市までは、直線距離で約100㎞を測る。

養父市は、市域の広い範囲を山林が占めており、平地の割合は小さい。円山川水系上流部にあたる八木川が、市域を東西に貫き、これに向かって多数の小河川が、急流となって山腹を流下し、各所に小規模な扇状地を形成している。旧来の集落は、このような扇状地ないしは八木川の段丘上に立地している。また市域の西部には、県下最高峰である氷ノ山（1,509m）をはじめとして、1,000m超の峰と高原が連なる山塊がある。

寺地遺跡ほかは八木川中流域の左岸に位置し、八木川に流下する尾和田川と寺地川が形成した扇状地上、および背後（北側）の山塊から延びる尾根の先端部に立地している。

第１図　遺跡の位置

第２節．歴史的環境

寺地遺跡が所在する八木川流域では、左右両岸の段丘上、尾根上などに多数の遺跡が知られている。以下ではそれを概観してみよう。

【後期旧石器時代】

本遺跡近隣では、八木西宮遺跡、大山田遺跡、西谷遺跡が、後期旧石器時代の遺跡として知られている。また、草り山遺跡からは、大型粗製の石器が出土している。

大山田遺跡は、大山田古墳発掘調査時に発見されたもので、「クロボク下の黄褐色土にくいこむように」サヌカイト製の横長剥片、メノウ製剥片、チャート製石核などが出土したとされる（山口卓也・大下明1988）。また八木西宮遺跡では、高松龍暉氏によって石刃状剥片が採集されたほか、発掘調査でも旧石器が出土している（高松・山口　1981/1985　山口・大下　前掲）。

西谷遺跡では、ナイフ形石器が出土しているという（兵庫県教育委員会　2011）。

草り山遺跡では、開墾にともなって大型・粗製の石器が「硬化した赤土層」から掘り出されている（高松・山口　1981）。大型の礫を分割して作成した石器であり、後期旧石器時代の石器とは趣を異にしているが、その所属年代は不明である。

【縄文時代】

八木川流域には、多数の縄文時代遺跡が知られており、1988年の時点で、その数は107か所に及ぶとされている（八鹿町教育委員会　1988）。上流部では、鉢伏高原の遺跡群、別宮家野遺跡、杉が沢遺跡群などの高原遺跡が著名であるが、八木川に臨む段丘上の遺跡としては、小路頃才ノ木遺跡（後期）、相地上向田遺跡、八木西宮遺跡（早期～前期）などがある。

八木西宮遺跡は、寺地遺跡の南東、八木川対岸の段丘上にある。1987年にトレンチによる発掘調査がおこなわれて、高山寺式、北白川下層Ⅰ式、同Ⅱb式など、早期～前期に属する土器が出土しているほか、局部磨製異形石器も出土している。

【弥生時代】

寺地遺跡が位置する八木川中流域、および上流域では、19か所の弥生時代遺跡が知られている（兵庫県教育委員会　2011前掲）が、発掘調査によって内容が明らかにされた遺跡は少ない。

そのうち八木西宮遺跡では、方形周溝墓1基が検出されている。弥生時代後期前半に属するもので、一辺が12m、４基の木棺を主体部としており、うち第２主体からは管玉・ガラス製丸玉が出土している。

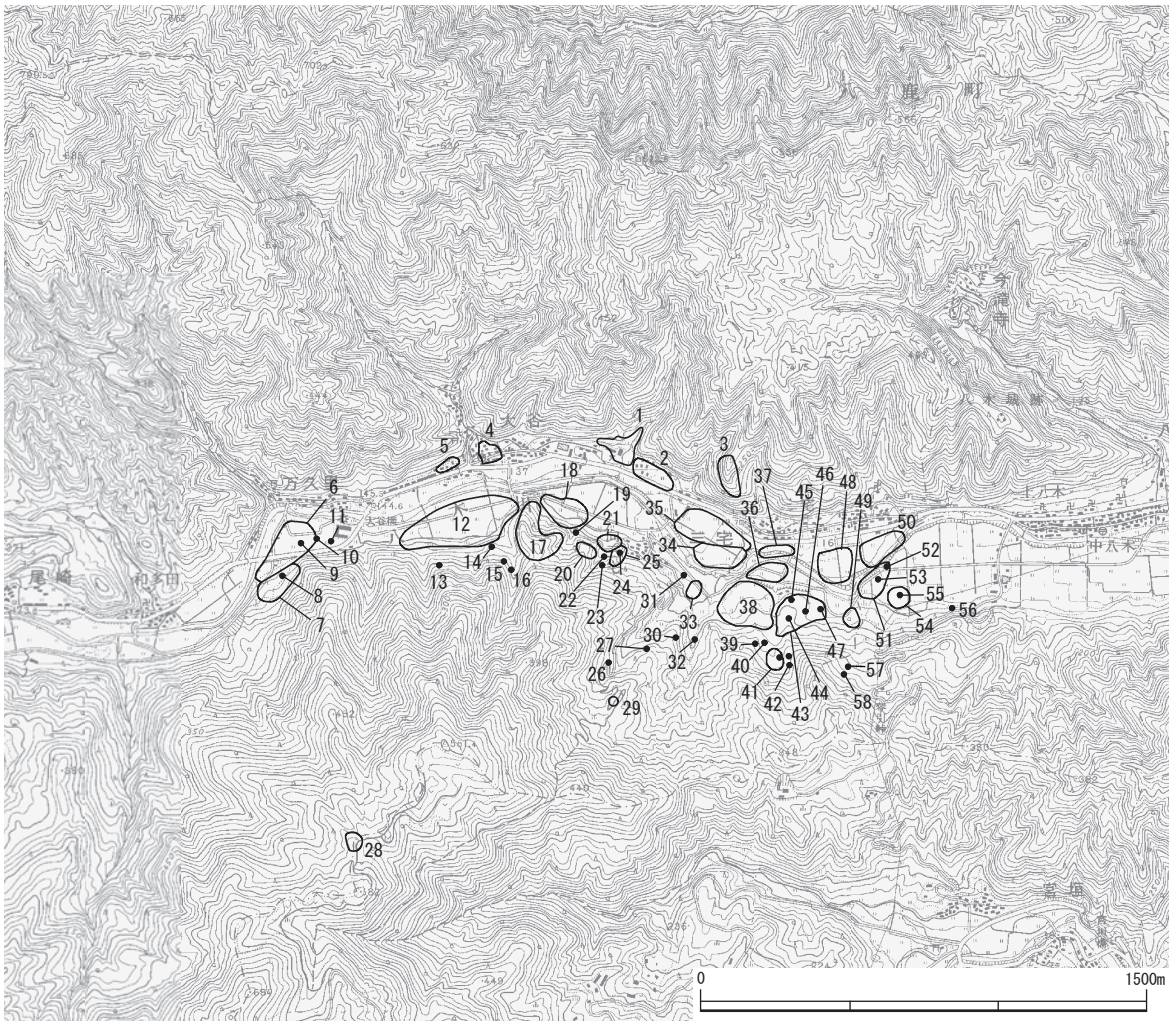
八木川下流域には、多数の弥生時代遺跡が知られており、前期にまで遡る（～中期）東家の上遺跡、中期の赤尾遺跡などが調査されている。東家の上遺跡では、丘陵斜面に掘りこまれた環濠の一部が確認されていることから、高地性集落と捉えることができるだろう。

中期末には、八木川右岸で米里遺跡の円形周溝墓が知られている。

【古墳時代】

八木川流域では、中流域～下流域に古墳が分布している。寺地古墳が位置する中流域では、古墳の分布は、上流側から順に、中瀬～吉井地区、関宮～相地地区、和多田～万久里～大谷地区、三宅～八木地区の４群に分けて捉えられるという（関宮町教育委員会　1992）。

八木川中流域の古墳は、５世紀前半以降のものが知られているようである。三宅タイコ山古墳・中瀬１号墳はともに木棺直葬墳で、前者は５世紀前半、後者は６世紀前半～中頃と推定されている。万久里



第２図　寺地遺跡と周辺の遺跡（兵庫県遺跡地図 1/35000 より作成）

1 寺地遺跡　2 耳堂遺跡　3 三宅蛇ヶ尾城跡　4 前田遺跡　5 西山遺跡　6 マシバ遺跡　7 万久里向山遺跡
8 マシバ１号墳　9 マシバ２号墳　10 マシバ３号墳　11 マシバ４号墳　12 大谷中野遺跡　13 妙見谷１号墳
14 まき谷１号墳　15 まき谷２号墳　16 まき谷３号墳　17 大谷山崎城跡　18 山崎遺跡　19 上和土１号墳
20 大谷向山城跡　21 和土遺跡　22 和土山２号墳　23 和土山１号墳　24 タイコ山古墳　25 和土城跡
26 西谷２号墳　27 西谷１号墳　28 熊ヶ平本谷遺跡　29 中尾窯跡　30 中山１号墳　31 和土古墳　32 姉ヶ谷古墳
33 西谷遺跡　34 トノガイ遺跡　35 滝ノ尻遺跡　36 前川向遺跡　37 中島遺跡　38 草り山遺跡　39 草り山２号墳
40 草り山１号墳　41 虎ヶ谷遺跡　42 虎ヶ谷１号墳～３号墳　43 早詰遺跡　44 早詰１号墳　45 早詰２号墳
46 早詰３号墳　47 早詰４号墳　48 二反田遺跡　49 瓦屋敷遺跡　50 大熊遺跡　51 八木西宮遺跡
52 八木西宮方形周溝墓　53 八木西宮古墳　54 大山田遺跡　55 大山田古墳　56 若宮古墳　57 若宮古墳
58 琴引１号墳

奥山１号墳は、竪穴式石室を主体部とする円墳であるが、規模などから６世紀前半と推定されている。寺地古墳の直近に位置する八木西宮古墳は６世紀中頃、万久里マシバ４号墳は７世紀前半と推定されている。後者は、直径27mを測る大型の円墳で、長さ10mに達する片袖の横穴式石室を主体部としていることから、当該時期の盟主墳的な位置づけがなされている。

寺地古墳は、こうした近隣の古墳（群）の動態の中で、６世紀後半に築造されたものであるが、副葬された須恵器に見られる技術的特徴、石室の構造など、注目すべき点が多い古墳である。

【飛鳥時代～奈良時代】

これらの古墳（群）の築造の末期には、八木川中流域に「ミヤケ」が設けられたと推定されている。

現在残る「三宅」の地名以外に、明確な考古学的根拠を挙げることは難しいが、大和と関わりのある何らかの施設・領域が存在した可能性を考慮することはできよう。三宅からおよそ700m西に位置する寺地遺跡で、奈良時代を中心とする遺構・遺物が検出され、土馬のような祭祀遺物が出土したことは、寺地遺跡の意義を考える上で重要であろう。

【中世】

寺地窯跡群は、12世紀代に営まれた土師器窯跡で、地域的な需要に対応した、小規模な生産をおこなっていたと考えられる。隣接地には同型式の窯跡は知られていないが、ほぼ同時期の須恵器窯として、相地スエガマ窯跡、木原窯跡群などがある（高松　1982）。これらは、中世須恵器生産が広域化し、東播磨系の須恵器生産技術が導入されることで成立したものと思われ、寺地窯跡群も同様の背景をもつものと推測される。

参考文献
兵庫県教育委員会　2004　『兵庫県遺跡分布地図』
日本旧石器学会　2010　『日本旧石器時代遺跡データベース』
高松龍暉・山口卓也　1981　「但馬地方における旧石器について」『兵庫考古』第13号　なお「　」内は山口卓也氏のご教示による。
高松龍暉　1982　「関宮町の窯跡」『考古学からみた関宮町』〈その４〉
高松龍暉・山口卓也　1985　「但馬地方における旧石器について（２）」『兵庫考古』第21号
山口卓也・大下　明　1988　「兵庫県養父郡八鹿町八木西宮・大山田遺跡の旧石器・縄文時代の石器について」『八木西宮遺跡・大山田遺跡』　八鹿町教育委員会
関宮町教育委員会　1992　『万久里マシバ古墳群』

第2章　調査の概要

第1節．調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県但馬県民局八鹿土木事務所が実施する、通常砂防事業（砂）尾和田川に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成13（2001）年度に、同事業所の事業計画に基づいて、対象地の分布調査を実施した。この分布調査では、遺構・遺物は見いだされなかったが、事業対象地が周知の遺跡（寺地遺跡）の範囲内であったため、平成14（2002）年度に、同事業所の依頼（但馬（八土）第112号　平成14年4月15日付および但馬（八土）第1620号　平成15年1月14日付）に基づいて事業対象地の確認調査を実施した。この確認調査で、遺構・遺物が存在することが明らかとなったため、当該範囲を対象として平成15（2003）年度に本発掘調査を実施した（但馬（八土）第1966号　平成15年3月28日付による）。

第１表　寺地古墳ほか発掘調査一覧

調査年度	調査番号	調査種別	調 査 期 間	担　当　者	調査面積（㎡）
2001	2001032	分布調査	2001/4/10	別府洋二・平田博幸・鈴木敬二・服部　寛・尾野幸雄	1,500
2002	2002053	確認調査	2002/7/16 ～ 2002/7/18	山田清朝	30
2002	2002225	確認調査	2003/2/18 ～ 2003/2/19	長濱誠司	29
2003	2003076 2003112	本発掘調査	2003/5/14 ～ 2003/8/26	久保弘幸・鐵　英記	635

第2節．発掘調査の概要

１　分布調査

分布調査は、上記事業地を対象として、地表面の観察により実施した。調査対象面積は、1,500㎡である。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構・遺物は見いだされなかったが、事業地が、周知の遺跡（寺地遺跡）の範囲であったため、確認調査を実施することとなった。

【調査の体制】

調査主体　兵庫県教育委員会

分布調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第１班　別府洋二・平田博幸・鈴木敬二・服部　寛・尾野幸雄

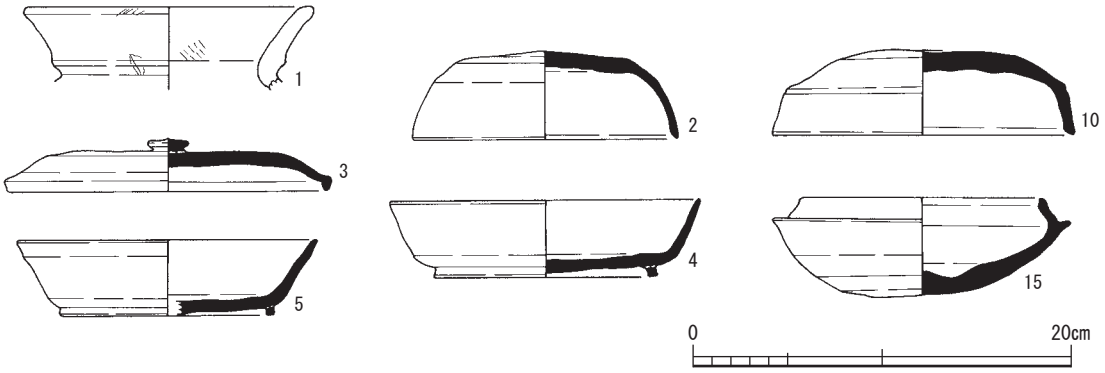
２　確認調査

確認調査は、二次にわたって実施した。その概要は以下のとおりである。

第１次確認調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、２m×２mのトレンチ６か所、２m×１mのトレンチ２か所の、合計８か所を設定して実施した（第４図No.１～No.８）。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】



第３図　確認調査時出土遺物

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第２班　　山田清朝

【調査の結果】

調査の結果、５か所のトレンチで遺構・遺物を確認した。図化可能な遺物は第３図に示したが、このうち10・15は寺地古墳から出土したことが明らかであるので、第Ⅲ章で再掲している。また各遺物の詳細については、巻末の第４表にしめした。

第２次確認調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、１ｍ×５ｍのトレンチ１か所、１ｍ×10ｍのトレンチ２か所、２ｍ×２ｍのトレンチ１か所の、合計４か所を設定して実施した。（第４図１Ｔ～４Ｔ）調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第１班　長濱誠治

確認調査の結果、いずれのトレンチからも遺構・遺物は検出されなかった。

以上、二次にわたる確認調査の結果、事業地の一部について本発掘調査が必要と判断された。

３　本発掘調査

【調査の体制】

平成15（2003）年度

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

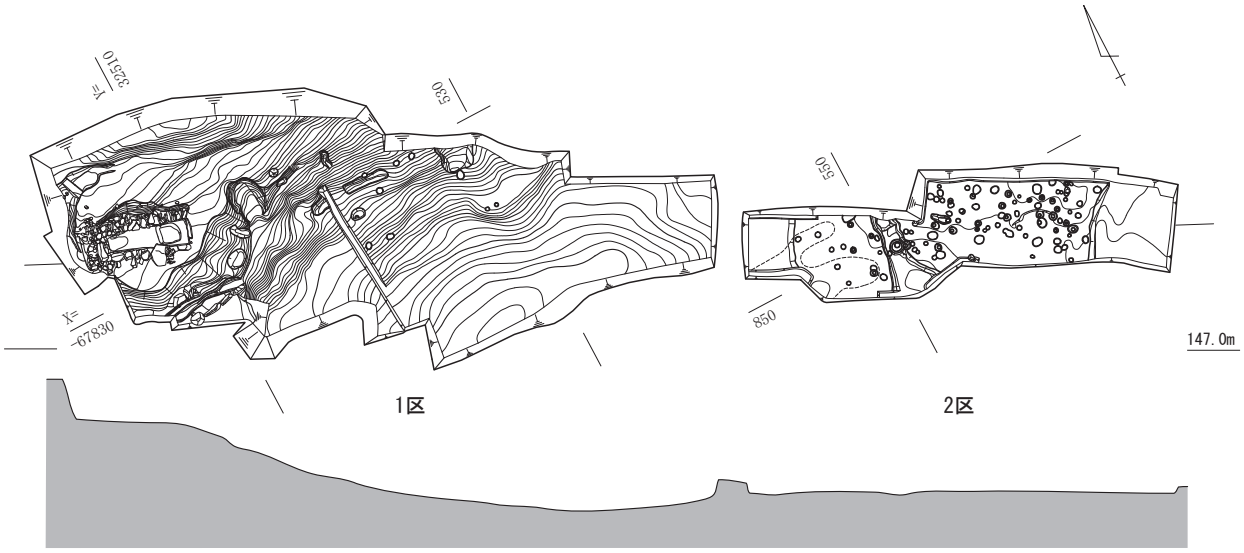
発掘調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第１班　久保弘幸・鐵　英記

【調査の概要】

今回の事業は、大谷集落側（南西）へ流下する尾和田川を、東に隣接する寺地川に合流させるため、新たな河道を掘削し、加えて砂防堰堤を設けるものである。事業予定地は、２本の急峻なやせ尾根と、これらに挟まれた谷部から尾和田川、寺地川に挟まれた扇状地上部にかけて延びており、総延長200m

第４図　調査区の位置



第５図　調査区付近の地形断面

0　10m

を測る。

今回の調査区は、北から延びる尾根の先端部（標高143m）にある、寺地古墳から続く山麓斜面部（Ⅰ区）と、その下方に続く平坦部（Ⅱ区）に分割されている。

Ⅰ区は、尾根部とこれに続く山麓斜面からなる。尾根の先端に築造された古墳の東側は、急な斜面となっており、斜面の肩部付近に窯跡３基が立地する。大部分が急斜面であるため、窯跡を除くと、遺構は、溝、土坑などがごく散漫に認められるにすぎない。斜面部には、大型の礫を含む堆積物が見られ、ここに古墳時代～中世の遺物が包含されているが、二次的な移動・堆積によるものが多いと思われる。

寺地古墳は、北からのびる尾根の先端部（標高約143m）に築造されている。古墳の東側は急な斜面となっており、斜面の肩部付近に窯跡３基が立地する。斜面部には、大型の礫を含む堆積物が見られ、ここに古墳時代～中世の遺物が包含されている。比高差7～8mの斜面下は、寺地川と尾和田川の形成した扇状地にあたる。南に向かって下がる緩やかな傾斜面となっており、寺地遺跡はこの緩斜面上に立地している。

Ⅱ区は、斜面裾から扇状地上にあたる。南に向かって下がる緩斜面で、その東西両端には埋没旧河道（谷部）が存在する。こうした状況から、寺地遺跡で構造物を作りうるのは、ごく狭い範囲に限られていたと推測される。

調査の結果、柱穴、土坑、溝等が検出された。遺構内からの出土遺物は多くなかったが、遺跡形成時の古土壌を含む遺物包含層には、古墳時代～奈良時代の遺物が高密度に包含されていた。特に柱穴は、かなりの密集を示すが、調査区の制約もあり、建物跡を復元することはできなかった。出土遺物は、古墳時代～中世にわたるもので、すべて同一の包含層より出土した。また、調査初期の過程で柱穴あるいは土坑としたものの中に、その後の断面調査によっては、最終的に遺構と判断したもののみを図示しているため、調査区全景写真で見られる遺構（白線で表示）よりも、遺構数は少なくなっている。

調査は、表土および人工的に改変された盛土部分を重機によって掘削し、以下を人力によって調査した。遺構面の図化は調査担当者がおこない、あわせて写真撮影も実施した。また、（株）かんこうに委託して、２回にわたり空中写真の撮影および図化を実施した。

なお、寺地窯跡群のうち、遺存状態が良好であった１号窯跡については、調査終了後、発泡ウレタンで強化したのち、遺構の切り取り保存をおこなった。

第３節．整理事業の概要

【整理事業の体制】

平成23年度

事業主体　兵庫県教育委員会

事業担当者　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

整理保存課　村上泰樹・篠宮正・深江英憲・岡本一秀・吉田昇

調査第１課　久保弘幸

平成24年度

事業主体　兵庫県教育委員会

事業担当者　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　村上賢治・篠宮正・深江英憲・岡本一秀

調査第2課　久保弘幸・鐵　英記

整理事業は、平成23（2011）年度には兵庫県立考古博物館、平成24（2012）年度には公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は久保・鐵の担当の下に、整理保存課がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理についても、すべて整理保存課（担当：岡本一秀）において実施した。また、本書に収録した遺物写真については、（株）地域文化財研究所に委託して撮影を実施した。

整理作業を担当した非常勤嘱託員は、下記のとおりである（順不同）。

平成23年度

（魚住分館　水洗い・ネーミング）

小林陽子・西口由紀

（接合・復元）

島村順子・荻野麻衣・小野潤子・荒木由美子・宮野正子・又江立子

（実測）

岡田美穂

（金属保存処理）

桂昭子・浜脇多規子

平成24年度

（トレース・レイアウト）

岡田美穂・栗山美奈

第２表　整理作業の工程

	水洗	ネーミング	接合・補強	実測・拓本	復元	写真撮影	写真整理	図面補正	トレース	レイアウト	分析鑑定	保存処理	報告書印刷
平成23年度												金属品	
平成24年度													

第３章　寺地古墳

第１節．墳丘と石室

１　墳丘（第６図）

後世の崖崩れや植林により旧地形は失われているが、丘陵斜面側の一部に周溝の痕跡が残る。

当初は東西10m以上、南北11mの楕円形の墳丘を持っていたものと推定される。墳丘は丘陵斜面を整形することで構築され、本来の地形を利用した部分と盛土で構築した部分がある。石室は平坦面を作って地山をあまり掘り込むことなく基底石を据え、盛土（４）で覆っている。

２　石室（第７・８図）

築造後の土石流により、石室が崩落・変形しているため、構造については不明確な部分があるが、いわゆる竪穴系横口式石室である。平面形は長方形で西側に開口する。奥壁から閉塞石内側まで5.3m、閉塞石で隠された部分を合わせると約６ｍを測る。石室幅は奥壁で1.6m、閉塞部で1.5mを測る。石室入口は長さ約１ｍときわめて短く、幅1.7mで外に開く形態である。

石室床面には奥壁前と閉塞部前を除いて、礫が敷き詰められている。礫は外側に扁平な大型の亜円礫を起き、内側を拳大の礫で充填している。床面は閉塞部で10㎝程度上がり、段差が生じている。天井石はほとんどが失われ、閉塞部に１石残存している。床面からの高さは約１ｍである。石室の天井が閉塞部と変わらないものであったとすれば、石室の高さは1.1m程度となり、側壁で最も残りが良い部分の高さと一致する。

選択された石材は規格性に乏しく、加工された形跡はない。奥壁は厚みのない石材を鏡石として用いる。石材の幅が石室幅に満たないため、南側を小型の石材で補填している。

北側壁は奥壁との接合点から中央にかけて最下段に大型の石材を横向きに用い、目地をおよそ揃えているが、中程に縦長の大型石材を据え、そこから入り口側までは大きさが不揃いの石材を用いている。

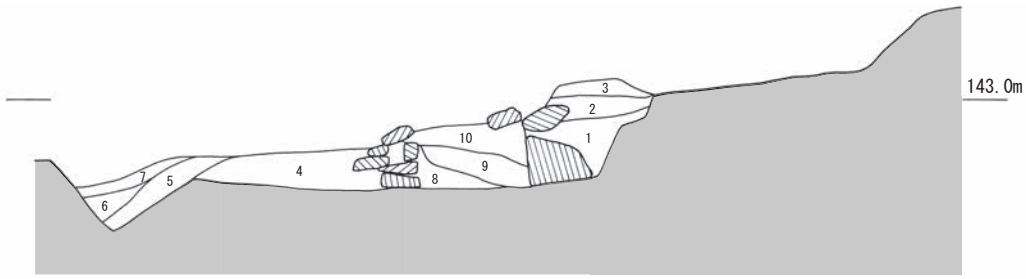
南側壁でも石材の企画性は乏しい。奥壁側から中央にかけては大型石材を縦位、横位を定めずに用い、間に小型の石材を用いている。閉塞部側については下位に小型石材を二段ほど積んだ上に大型石材を載せており、南北の側壁で構築方法に差がある。

閉塞部は左右の壁前面に基部を土で埋めた扁平な石材を設置し、両袖式石室の玄門部を思わせる構造を持つ。閉塞石としてブロック状の石材を石室内側の面をほぼ揃えて積み上げたのち、土で閉塞し、その上に扁平で小型の亜円礫を貼り石状に並べる。

第２節．遺物の出土状況（第９図）

出土遺物には耳環・鉄刀・刀子・鉄鏃・須恵器・土師器があり、大きく３カ所に固まって出土した。うち、土器は奥壁付近と開口部近くの礫床上の２カ所に分かれ、土器群に挟まれて石室のほぼ中央から金属製品が出土した。

奥壁付近からは須恵器杯身・杯蓋が各４個体、合計８個体が出土しており、これを第１群土器と呼称する。確認調査で出土した杯身・杯蓋各１個体についても、本来この群に属していたものと考え、埋葬時には少なくとも５組の蓋杯が置かれていた。基本的には蓋と身を組み合わせ、蓋の上に身を重ねた状



1. 7.5YR3/3 暗褐シルト 礫含む
2. 7.5YR3/3 暗褐シルト 地山ブロック(大)含む
3. 7.5YR3/3 暗褐シルト 地山ブロック(小)含む
4. 10YR4/4 褐色シルト混極細砂
5. 10YR3/3 暗褐色極細砂
6. 10YR4/4 褐 亜角礫・砂含む
7. 10YR3/3 暗褐色極細砂
8. 10YR4/4 褐色 地山ブロック(小)含む
9. 10YR4/4 褐色 地山ブロック礫含む
10. 10YR4/4 褐色 地山ブロック(小)含む

0 5m

第 6 図　墳丘平面図・断面図

態で出土しており、内容物を露出させた形で副葬されていたと考えられる。

石室中央からは鉄刀１点と刀子２点および鉄鏃７点以上が出土し、鉄刀と接して金銅装の耳環一組が出土している。鉄刀は石室側面にほぼ並行しておかれ、その鋒は奥壁側に向けられていた。刀子は鉄刀より奥壁側に置かれ、鉄鏃については鉄刀の南側に束ねて副葬されていた可能性がある。鏃身を残すものが２点しかないが、出土状況のわかる１点については先端を奥壁側に向けていた。

開口部寄りの礫床上からは出土したのは須恵器14点と土師器１点で、これを第２群土器と呼称する。

須恵器は杯身３点・杯蓋３点・有蓋高杯８点から構成され、土師器は直口壺である。

第２群土器は土石流により石室天井が落下し、一気に埋没したため転倒しているが、原位置をほぼ保っているものと考える。有蓋高杯は８点とも本来は床面に立てられていたと考えられ、脚部が焼け歪んだ１点（25）については脚裾部をその場で打ち欠いて直立させた可能性もある。有蓋高杯のうち６点（22・24～27・29）についてはその上に杯身・杯蓋が内面を見せた状態で置かれていた可能性が高い。つまり、杯身・杯蓋はすべて杯身として取り扱われ、有蓋高杯のうち６点は器台、２点は無蓋高杯に見立てて供献された可能性がある。

第７図　石室床面

遺体の位置については、鉄刀付近と考えられる。鉄釘類が出土していないため、遺体がどのように安置されていたかは不明だが、副葬品の位置、種類と数、後述する須恵器の時期を考え合わせれば、単葬で追葬は行われていないと考えられる。

ただし、当墳は築造後に土石流のため埋没・破壊されているため、その結果として追葬が行われなかった可能性も残されている。

第３節．出土遺物

土器類（第10図：6～15、第11図：16～30）

６～15が第１群土器にあたる。すべて須恵器で、杯蓋（６～10）と杯身（11～15）がある。杯蓋は口径13.6～15.9㎝、器高4.3～4.6㎝を測る。天井部外面の1/2から2/3に回転ヘラケズリを施し、内面はナデで仕上げて当て具の痕跡が認められない。口縁部と天井部の境界を凹線によって画する。天井部はかなり丸みを帯び、８のように天井部と口縁部の区別が不明確なものも含まれる。口縁端部は６・10のように端部内側の面がある程度明確なものと端部を丸く収めるものがある。

杯身は口径11.9～12.8㎝、器高4.5～5.3㎝を測る。口縁部は斜めに立ち上がり、短いものがほとんどをしめる。口縁端部内側には段を持たず、端部を丸く収める。底部外面は回転ヘラケズリを施し、内面はナデで仕上げて当て具の痕跡が認められない。

16から30が第2群土器である。須恵器14点と土師器１点からなる。須恵器には杯蓋（16～18）、杯身（19～21）および有蓋高杯（22～29）がある。土師器（30）は直口壷である。

杯蓋は口径13.5～14.6㎝、器高4.15～5.0㎝を測る。天井部と口縁部の境界がやや不明確になっているものの、天井部外面の2/3に回転ヘラケズリを施し、内面はナデで仕上げて当て具の痕跡は認められない。口縁端部は内側に面を作る。3点とも天井部にヘラ記号を持つ。

杯身は口径11.8～13.9㎝、器高4.7～4.8㎝を測る。底部外面は回転ヘラケズリを、内面はナデで仕上げて当て具の痕跡が認められない。

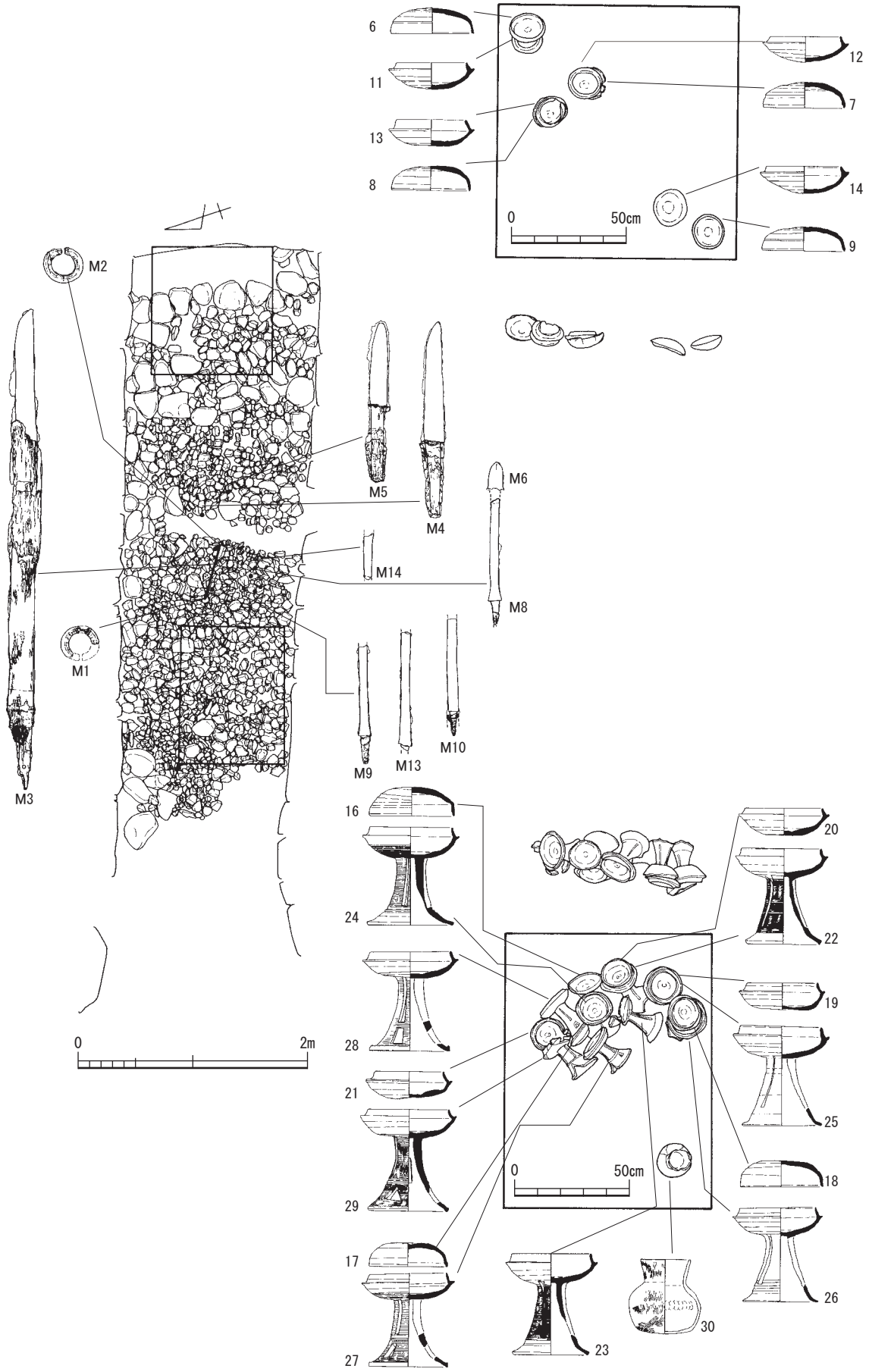
有蓋高杯は口径13.1～14.0㎝、器高16.4～17.9㎝を測る。すべてが長脚のものだが、透かしの入れ方で３類型に分かれる。22～26は縦に細長い長方形の一段透かしを三方向から穿ち、杯底部から脚部にかけてカキ目を施す。透かしが完全に貫通せず断面三角形の溝状になっている部分もある。22・23は上段が縦長の長方形、下段が三角形に近い台形の二段透かしを三方向から穿つ。上下で透かしの位置は揃っている。上段と下段の透かしの間に横線を２条巡らせ、区画している。29は上段が縦長の長方形、下段が三角形の透かしを三方向から穿つもので、透かしの位置が上下でずれる。カキ目と波状文を施し、凹線を２条巡らせて上下を区画する。

30は土師器の直口壺である。平底気味の底部とやや歪んだ球形の体部を持ち、口縁部は直線的に伸びる。口縁部から体部上半にかけてハケ目が残り、底部外面には粗いヘラミガキを施している。

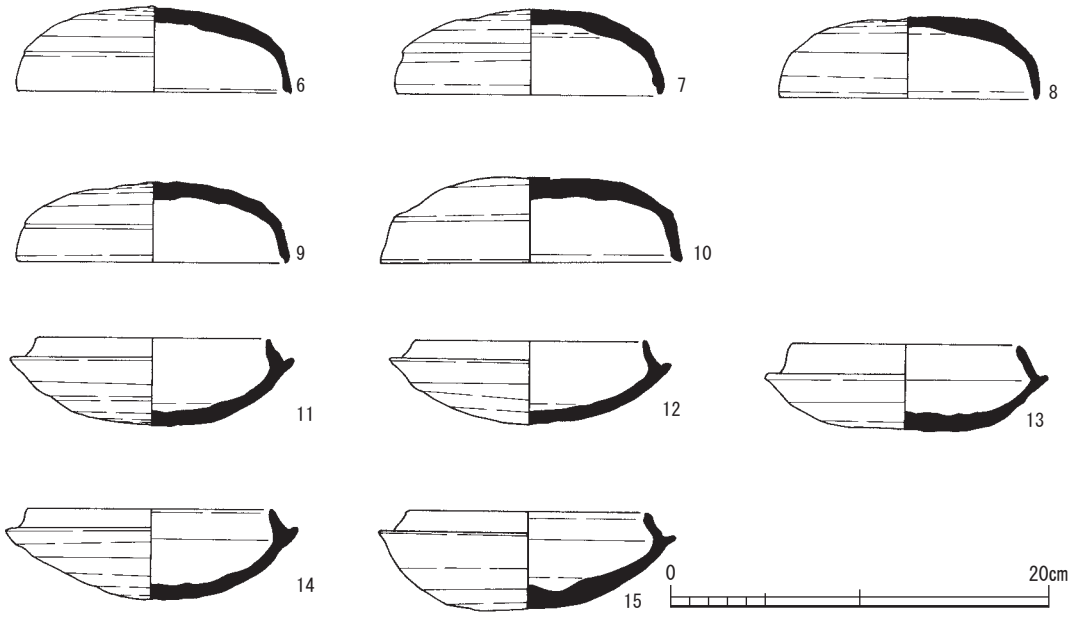
第１群の須恵器は杯蓋天井部および杯身底部外面のヘラケズリが明瞭に残ること、内面の仕上げナデも省略されていないことから、TK209型式までは下らずTK43型式のなかで収まるものと考える。

第２群の須恵器は有蓋高杯に長脚一段透かしのものが含まれ、長脚二段のものについても波状文に加え、長方形と三角形の組み合わせが認められるなど、TK10型式に近い要素もある。ただし、組み合わせられた蓋杯が一部に古い要素を残しつつも全体としては第１群の蓋杯と同型式のものと考えられ、高杯についても杯部の形態が蓋杯と共通することから、第１群土器と同様TK43型式と考える。

したがって、寺地古墳の築造時期については、６世紀後葉として大過ないものと考える。


6
11
13
8
12
7
14
9
0
50cm
M2
M1
M3
M5
M4
M6
M14
M8
M9
M13
M10
0
2m
16
24
28
21
29
17
27
20
22
19
25
18
26
23
30
0
50cm

第9図　遺物出土状況



第10図　石室内出土遺物（第Ⅰ群）

金属製品（第12図）

耳環（Ｍ１・Ｍ２）

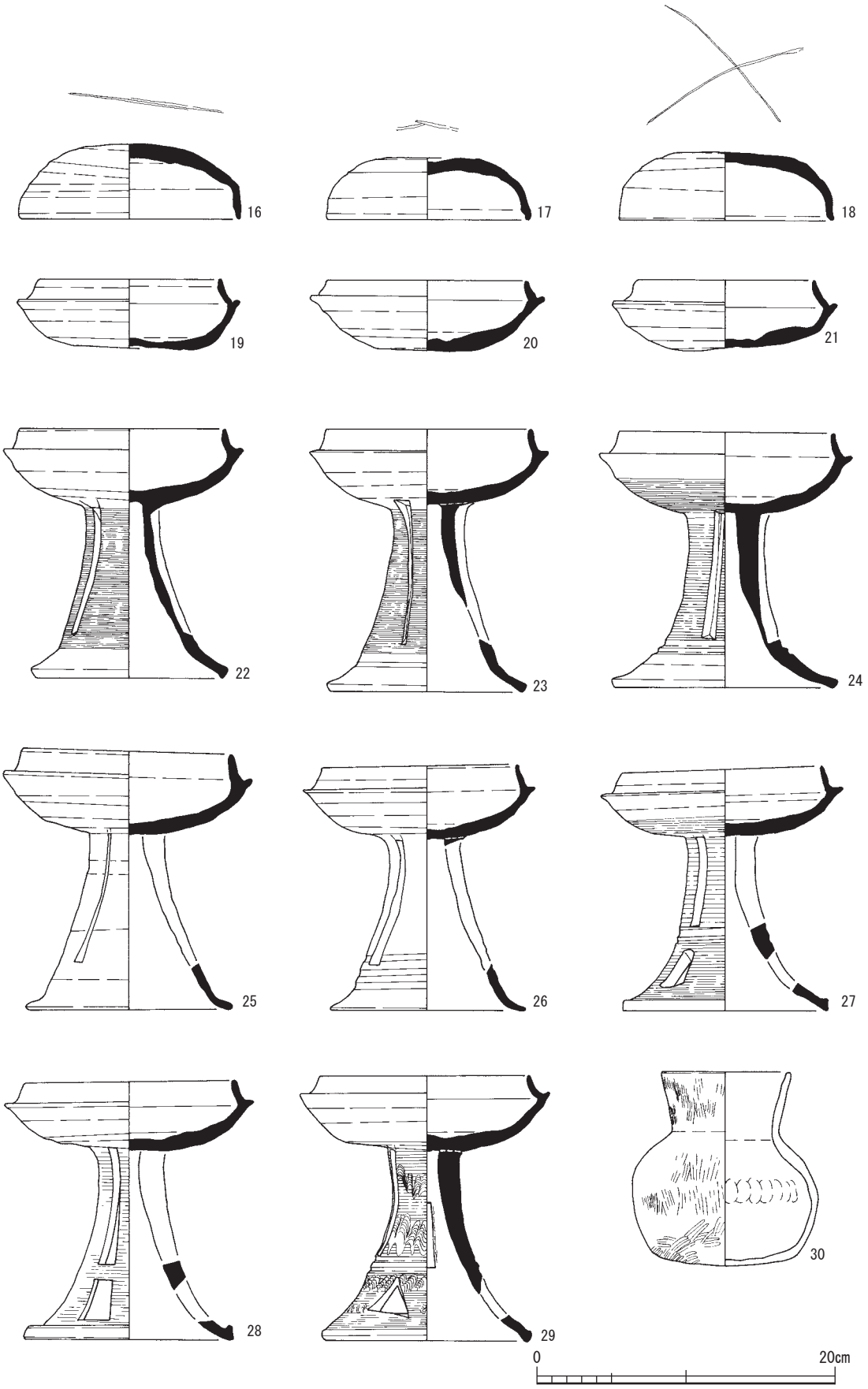
遺存状況に差が認められるがおおむね同じ大きさと考えられる。残存状況のよいＭ２は縦2.45㎝、横2.75㎝を測り、断面の直径は0.5～0.6㎝である。Ｍ１では芯が露出しており、Ｍ２では表面の金メッキの下に銀色を帯びた地金が観察される。蛍光X線分析の結果、主要な成分として銅、銀、金が検出されており、銅芯の上に銀板を巻き、表面に金が載せられている。スペクトル分析によると水銀らしき反応が認められるが、明確なものではないので金箔を巻いているのか、水銀アマルガム法により鍍金したのかは不明である。

鉄刀（Ｍ３）

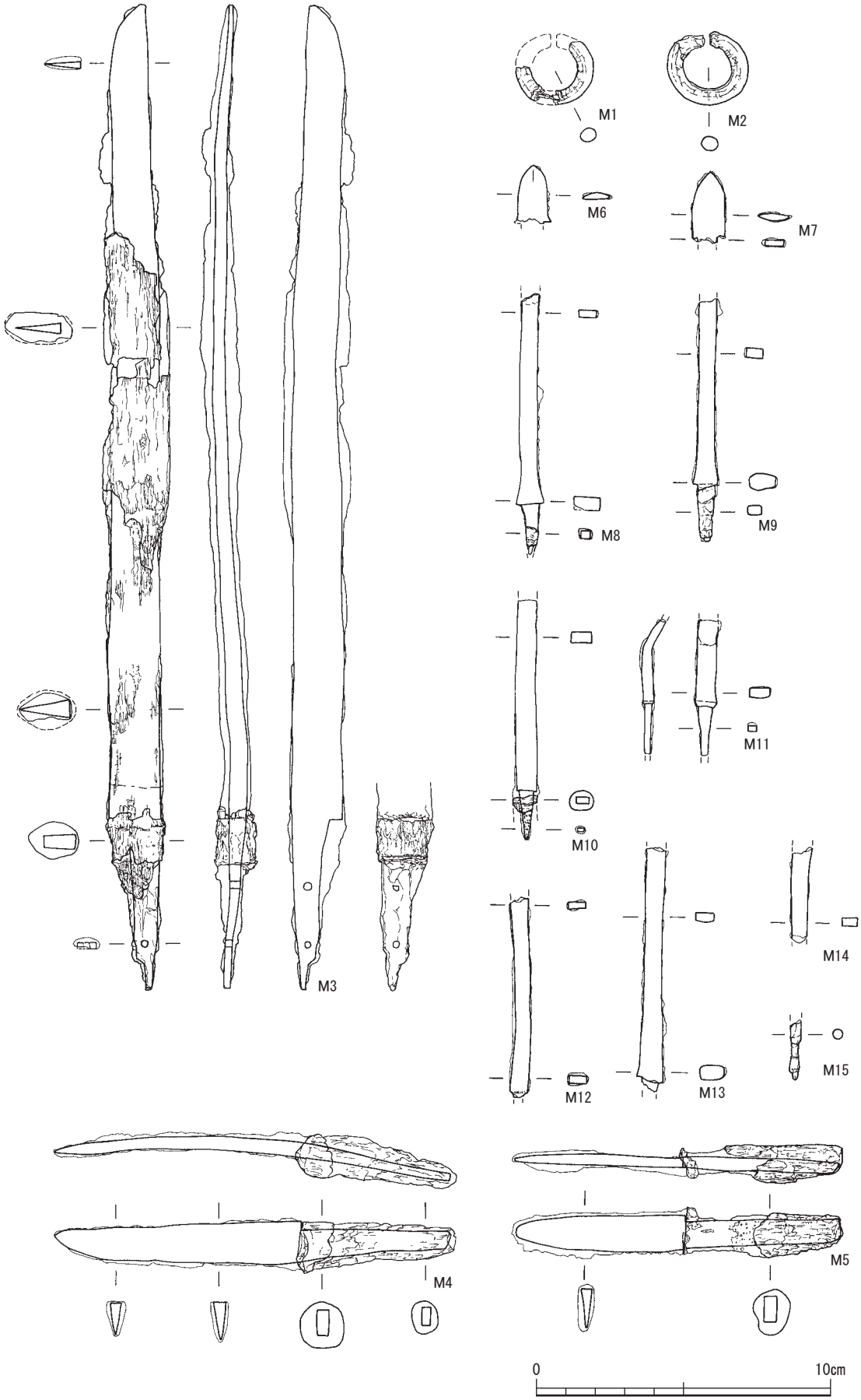
残存長約67㎝を測るふくら切先の直刀である。わずかに内反りする。残存する木質により不明瞭なところはあるが、なで関を持ち、茎には目釘穴が２カ所確認できる。刃部断面は楔形、茎部断面は台形を呈し、茎尻は隅を大きく抉る形態である。関と柄縁はほぼ一致する。柄の一部に責金具の痕跡が認められる。

刀子（Ｍ４・Ｍ５）

２点出土している。いずれも背側に関を持つが、Ｍ４は残存長約13㎝で木製の把が残っている。刃部と背部は平行で、刃部から切先にかけては曲線となっている。刃部断面は楔形、茎部断面は長方形を呈する。Ｍ５は残存長約11㎝で鹿角製の把が残っている。刃部と背部は平行だが、刃部から切先にかけてと背部から鋒にかけての双方が曲線となっている。刃部断面は楔形、茎部断面は長方形を呈する。



第11図　石室内出土遺物（第Ⅱ群）



第12図　石室内出土金属製品

鉄鏃（M６～M14）

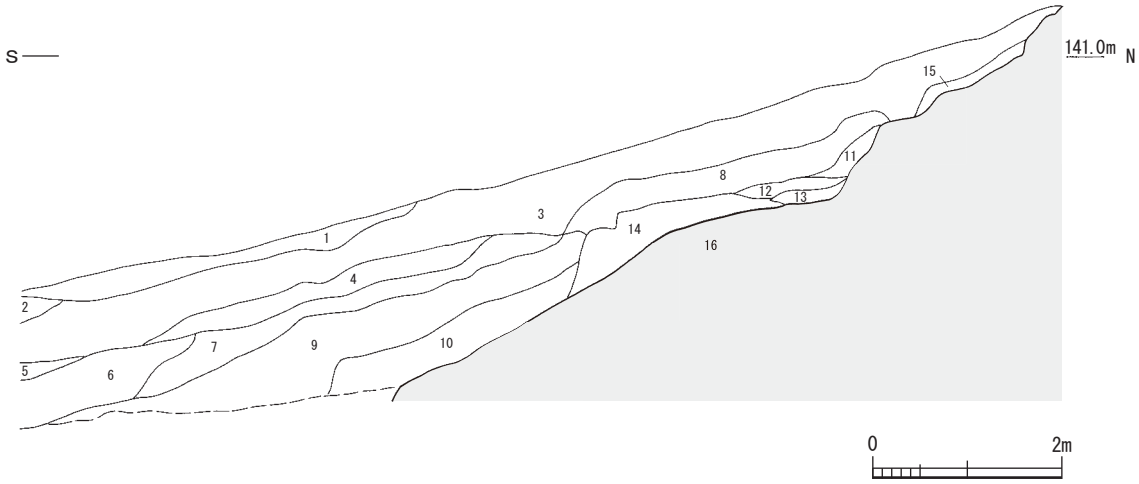
すべて長頸鏃である。鏃身の残っている２点（M６・M７）は鏃身関部にわずかながら逆刺が残っていることから腸抉柳葉式に分類されるものである。残りのものは頸部から茎部にかけての破片であり、頸部の関部付近がやや広がったのち茎部に至るもの（M８・M９・M13）と幅を変えずに延びて茎部に至るもの（M10～M12・M14）がある。

第４章　寺地遺跡

第１節．調査区の微地形と堆積物

寺地遺跡は、山麓斜面裾から扇状地上部の緩斜面上に立地する。遺構検出面は、背後の山塊から流下・堆積した、一部にボルダー級の亜角礫～亜円礫を含む、淘汰の悪いシルト質砂礫層の上面である。この上位に、数枚に分層される、やはり淘汰の悪い礫混じりシルト～砂が、厚さ30cm以上の堆積を見せており、これが寺地遺跡における遺物包含層である。遺物包含層中には、古墳時代～中世の遺物が混在した状況で包含されていることから、本層は古土壌層ではなく、二次的に流下・堆積したものと判断される。この上位に、現地表面をなすシルト質の土壌がある。ここでは１区斜面部の堆積状況を図示する。

調査の便宜上、調査区は、寺地古墳群・窯跡群から続く斜面部を中心とした１区と、その東側に位置する２区に分割したが、遺跡としては一連のものである。



1. 10YR3/3 暗褐色シルト　礫を含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト　礫・風化した基盤岩片を含む
3. 10YR3/2 黒褐色シルト　礫・風化した基盤岩片を含む　炭化物を含む
4. ３層とほぼ同じだが、拳大の礫を多く含む
5. 10YR2/3 暗褐色シルト　礫・風化した基盤岩片を含む
6. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト　粗砂～小礫を含む
7. 10YR3/4 暗褐色シルト　礫を少量含む
8. 10YR4/5 にぶい黄褐色シルト　礫・風化した基盤岩ブロックを多く含む　焼土ブロックを含む
9. 10YR3/4 暗褐色シルト　風化した基盤岩ブロックを多く含む
10. 10YR4/4 褐色シルト　風化した基盤岩のブロックを多く含む
11. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト　風化した基盤岩の細粒を多く含む
12. 10YR3/4 暗褐色シルト　礫・風化した基盤岩ブロックを含む
13. 10YR4/6 褐色細砂混り粘質シルト
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混りシルト　礫・風化した基盤岩の細粒ブロックを多く含む
15. 10YR4/4 褐色シルト　風化岩盤の小ブロックを多く含む
16. 風化岩盤

第13図　１区地層断面図

第２節．遺構と遺物

１　遺物の分類

寺地遺跡で出土した遺物は、古墳時代～鎌倉時代にわたる土師器・須恵器・鉄器等で、それぞれの器

種には、下記のようなものが見られる。またこの他に、中世末～近世に属する五輪塔が採集されている。

【土師器】　壷・甕・高杯・竈・小皿・杯・椀

【須恵器】　壷・甕・高杯・杯・椀

【瓦器・瓦質土器】　椀・火鉢

【陶磁器】　壷・甕・椀・皿

【鉄器】　刀子・鎌・鋤先・鑿・鏨・釘・不明鉄器

【石器・石製品】　叩石・一石五輪塔

これらのうち、特に律令期須恵器の小型器種の分類については、広く用いられている分類（奈良国立文化財研究所　1982）に準じて記載し、個体数の少ない大型器種については、個々に記載をおこなう。土師器に関しては、最も個体数の多い甕について、以下で口縁部の形態を基準とした分類をおこなっておく。また土師器皿・杯・椀については、次章寺地窯跡群の項において形態分類を行っているので、本章でもこれを基準に記載する。ただし、寺地窯跡群で出土した土師器は、すべてロクロ成形の土師器であり、手づくねの遺物は認められないが、寺地遺跡では少数ながら手づくねの土師器皿が見られるため、これらについては個別の記載とする。

【土師器甕の分類】

甕の分類は、その機能をもっとも反映すると推定される、径高比に代表される全体の形態を重視しておこなうべきであろうが、寺地遺跡で出土した土師器甕では、径高比を示せる資料はごくわずかである。そのためここでは、口縁部の形態による分類をおこない、これを基に記載をおこなう。

口縁部形態

第１類　口縁部が二段に外反して立ち上がり、二重口縁状となるもの

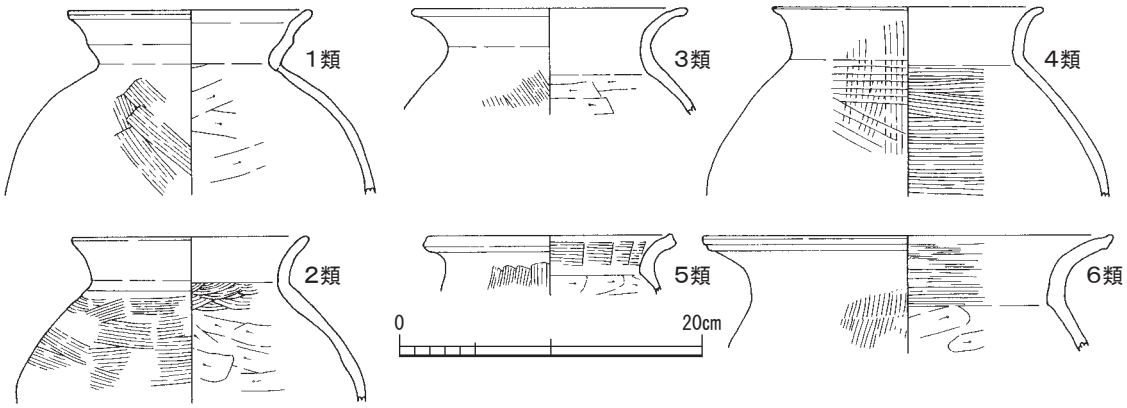
第２類　口縁部が直線的に、あるいは弱く外反しつつ立ち上がり、端部が丸く終わるもの

第３類　口縁部が外反しつつ立ち上がり、端部が丸く終わるもの

第４類　口縁端部直下を強く外反させて、口縁部上面がほぼ水平になるもの

第５類　口縁部が外反しつつ立ち上がり、端部が方形ないし多角形状に終わるもの

第６類　口縁端部をつまみ上げて、外側に面を形成するもの



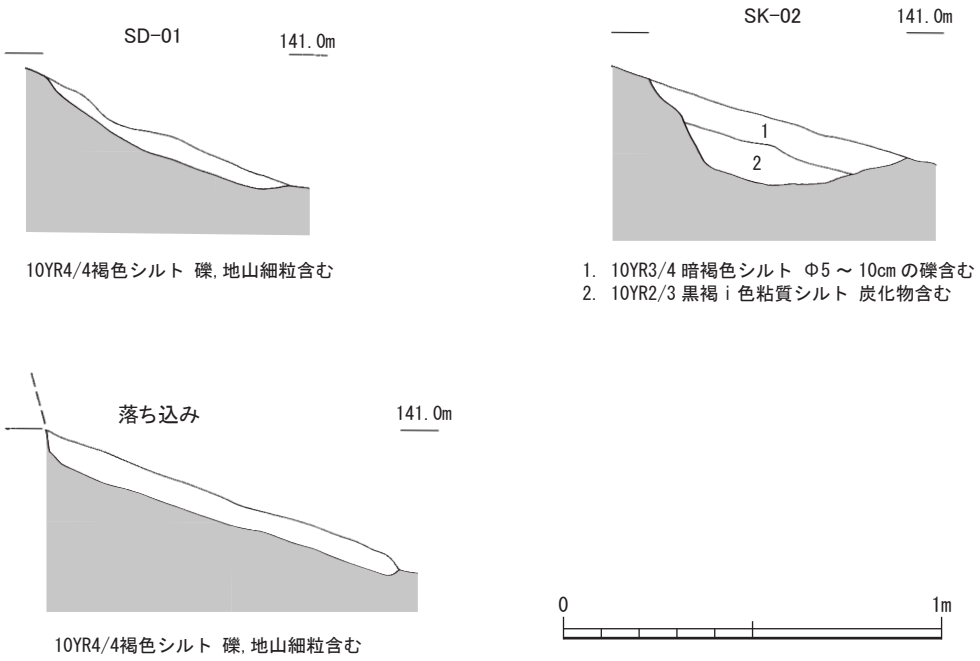
第14図　土師器甕の分類

２　１区の遺構と遺物

①　遺構

１区では、次章で述べる土師器窯跡群の他には、わずかに斜面上部で溝１条、土坑２基、柱穴（？）９基が検出されたにすぎない。これらに明確に伴う遺物も出土していないため、時期の判断は困難であるが、斜面上部に営まれた寺地窯跡群に伴って設けられた遺構であった可能性が考慮される。

第15図　１区遺構平面図



第16図　１区遺構断面図

【溝】

１区中央の、斜面上部で検出された（SD-01）。等高線に平行して延びていることから、人工的に設けられたものと思われる。一部で途切れながら延びており、延長5.6m、幅0.7mを測る。急傾斜地において、等高線に平行に設けられているため、斜面下方側ではごく浅いものとなる。従って溝とするよりも、むしろ段状の遺構とすべきかもしれない。図示可能な遺物は出土しなかったが、土師器甕の体部破片が出土している。

【土坑・落ち込み】

土坑２（SK-02）

楕円形の掘り方を見せ、長径90㎝、短径70㎝を測る。長軸は等高線と平行するが、SD-01に比べて掘り込みは明瞭である。土坑底には不整形な凹凸が見られる。内部は自然堆積によって埋没していた。図示可能な遺物は出土しなかった。

落ち込み

調査区北壁に接し、その一部は調査区外にある。不整形な掘り方を見せており、人為的な遺構か否か、判断する材料に欠けるため「落ち込み」とした。調査区内での規模は、2.2m×2.0mを測る。図示可能な遺物は出土しなかったが、飛鳥時代に属すると思われる須恵器等が出土している。

【柱穴（？）】

１区の斜面部に、散漫に分布する形で検出された。建物を設けることが困難な斜面部にあり、掘り込みもごく浅いことから、樹根などの自然為によって形成された偽遺構の可能性も否定できない。いずれからも、遺物は出土していない。

②遺物

【遺構内出土の遺物】

１区の遺構内からは、図示可能な遺物は出土しなかったが、土師器・須恵器等の細片が出土している。

【溝１】

土師器甕の体部破片が出土している。内面にはハケ目調整が施されている。

【土坑】

土坑２

土師器の細片、および焼けた小礫が出土している。

落ち込み

飛鳥時代に属すると思われる須恵器杯蓋、および土師器の細片が出土している。

【包含層出土の遺物】

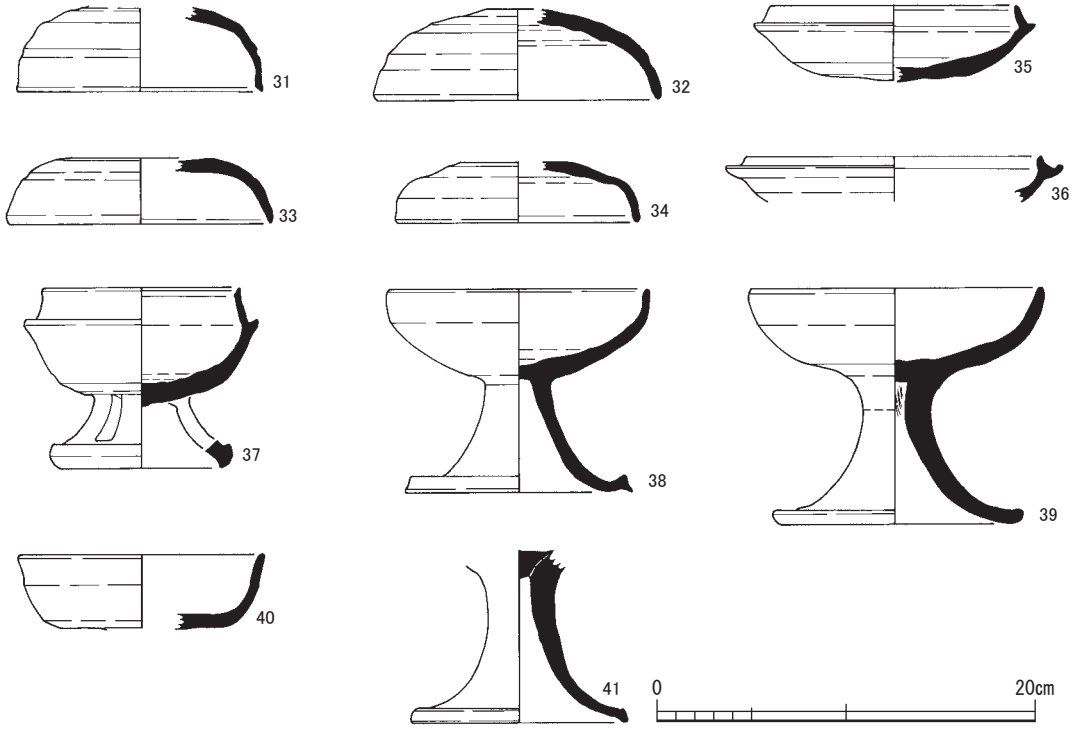
遺構の散漫さと比較して、包含層中からは古墳時代～中世にわたる多数の遺物が出土している。既述のとおり、寺地遺跡における遺物包含層は、二次的な移動で形成されたと判断されるため、ここでは、概ね時代順となるように記載を進める。

古墳時代～飛鳥時代の土器　（第17～18図）

（須恵器杯H）

31～36は杯Hの蓋および身である。

31は器高が高い蓋である。天井部には回転ヘラケズリが施され、天井部と口縁部の境界には、１条の



第17図　1区包含層出土の遺物（1）

凹線を巡らせる。口縁端部内面には、鈍い段を設ける。

32は天井部に回転ヘラケズリは見られるものの、天井部と口縁部との境界は丸みをおびており、不明瞭である。口縁端部は丸くおさめられている。

33は扁平化し、口径も縮小した蓋である。回転ヘラケズリは天井部中央にのみ認められる。天井部と口縁部の境界は丸く、判然としない。天井部外面には、ヘラ記号と思われる線１条が認められる。

34も扁平化した蓋である。やはり天井部と口縁部の境界は丸く仕上げられている。

35は内外面ともに回転ナデが施されているが、見込み部は当て具痕を一定方向のナデで消している。底部は回転ヘラケズリが施される。

36は立ち上がりが矮小化した杯身である。底部には、回転ヘラケズリは施されていない。

（須恵器高杯）

37～41は高杯である。

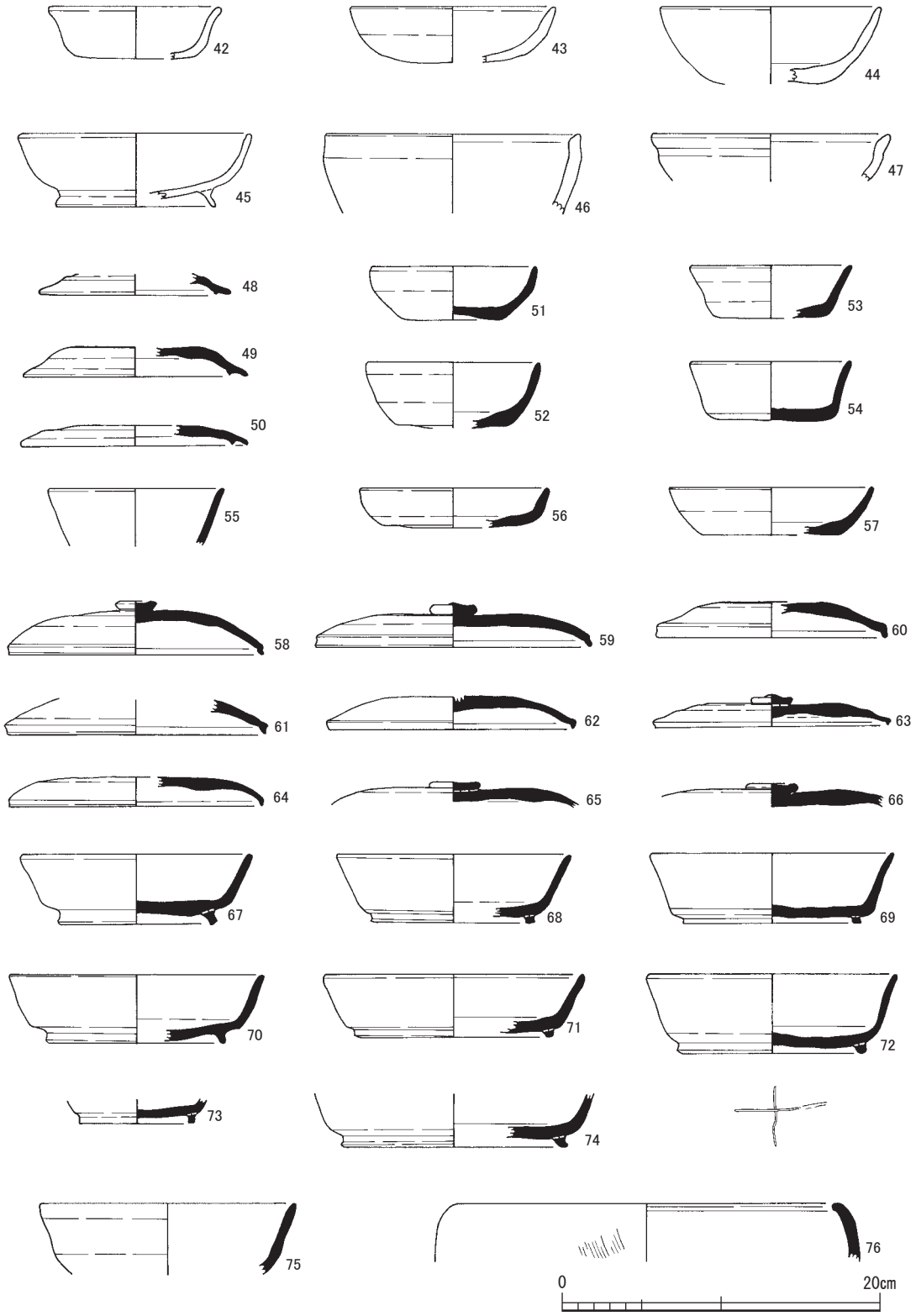
37は短脚の１段透かしをもつ有蓋高杯である。杯部は本器種の一般的事例よりも深く、口縁部は急斜度の立ち上がりを見せる。口縁端部内面には1条の沈線が巡る。

38・39は、無蓋高杯である。杯Hの蓋を反転させた形態の杯部を見せ、38では杯部底部に回転ヘラケズリが施される。脚部は、喇叭状に大きく開き、脚端部は７では下方へ屈折させて、端部外側に面を形成するが。39ではそのまま丸く終わる。11も、8・9と類同の脚である。

40は高杯の杯部である。平坦な底部から、急斜度に立ち上がる口縁部は、端部付近で弱く外反する。底部と口縁部との境界は、丸みをおびる。

41は高杯の脚部である。脚端部を下方に折り曲げるが、全体に稜線は鈍い作りとなっている。

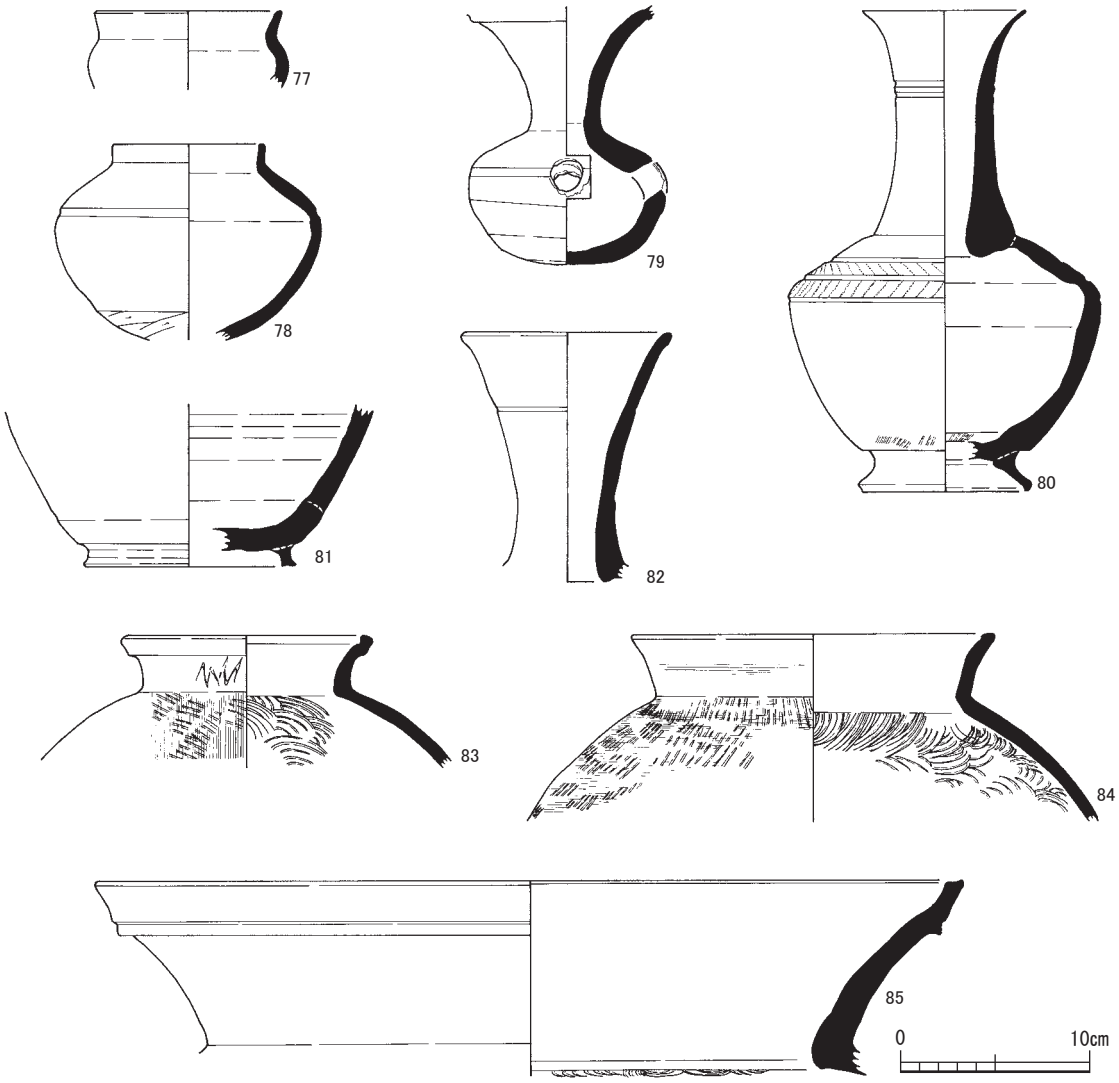
（須恵器壷・甕類）



第18図　1区包含層出土の遺物（2）

77は小型の、浅い甕であろう。底部を失っているが、体部はやや扁平な作りを見せ、口縁部は短く直線的に開く。

78は短頸壷である。最大胴径は器高の中央よりやや上位にあり、この位置に鈍い凹線を巡らせる。口



第19図　1区包含層出土の遺物（3）

縁部は短く、直線的に立ち上がる。底部外面には、不定方向のヘラケズリが施される。

79は甕である。口縁部をすべて欠くが、大きく喇叭状に開く頸部を見せる。体部はやや扁平な形態を示し、底部には回転ヘラケズリが施されている。

83は横瓶であろうか。口縁部を、外側に張り出させるように屈曲させている。口縁部の外面に、ヘラ描き鋸歯状文を描いている。体部外面は平行タタキの後、縦方向のカキ目調整が施されることから、壷のように横方向の回転体ではないと判断した。

84は大型の壷である。口縁端部に水平な面を作る。体部外面は平行タタキの後、横方向のカキ目で調整され、内面は同心円タタキが施される。

85は大型の甕である。口縁下外面を断面三角形の突帯状に拡張して、明瞭な稜を形成する。口縁端部はやや内側に拡張し、上部に凹んだ面を形成する。

飛鳥時代〜奈良時代の土器　（第18図〜第19図）

（土師器杯・高杯・椀）

42は、平坦な底部から、外反する口縁部が立ち上がる杯である。底部と口縁部の境界は丸みをおびる。

43は、平坦な底部から内湾気味に口縁部が立ち上がる杯である。底部と口縁部の境界は丸みをおびる。

44は、高杯の杯部である。平坦な底部から、わずかに内湾しつつ開く口縁部を見せる。

45は、高台をもつ土師器杯である。底部は丸みをおび、明瞭な境界を設けずに口縁部に至る。全体の形態から、金属器の椀を写した可能性が考慮される。

46・47は、類似した口縁部の形態を見せている。厚みのある器壁と、立ち上がりの角度などから、椀としておく。

46は急斜度の立ち上がりから、口縁下外面に強いヨコナデを施すことで外反させている。口縁端部には、内傾する面を形成する。

47は46と比較して立ち上がりの角度は緩やかである。やはり口縁下外面に強いヨコナデを施して外反させている。口縁端部には、内傾する面を形成する。

（須恵器杯）

48～74は須恵器杯である。

48～50は口縁部内面に返りをもつ、杯Bないし杯Gの蓋である。48・49と比較して、50はやや扁平な作りとなっている。48では天井部外面に回転ヘラケズリが施される。

51～55は杯身である。

古墳時代～奈良時代の土師器（第20図～第22図）

（壷）

86は壷である。口縁部はわずかに外傾して、直線的に立ち上がる。口縁端部は急激に厚みを減じておわる。体部外面には斜め方向のヘラミガキが施され、内面はナデ仕上げである。

（高杯）

87は高杯の脚部である。杯部の破片も出土したが、脚部とは接合しない。全体に器表面が劣化しており、調整痕は識別しがたい。

（甕）

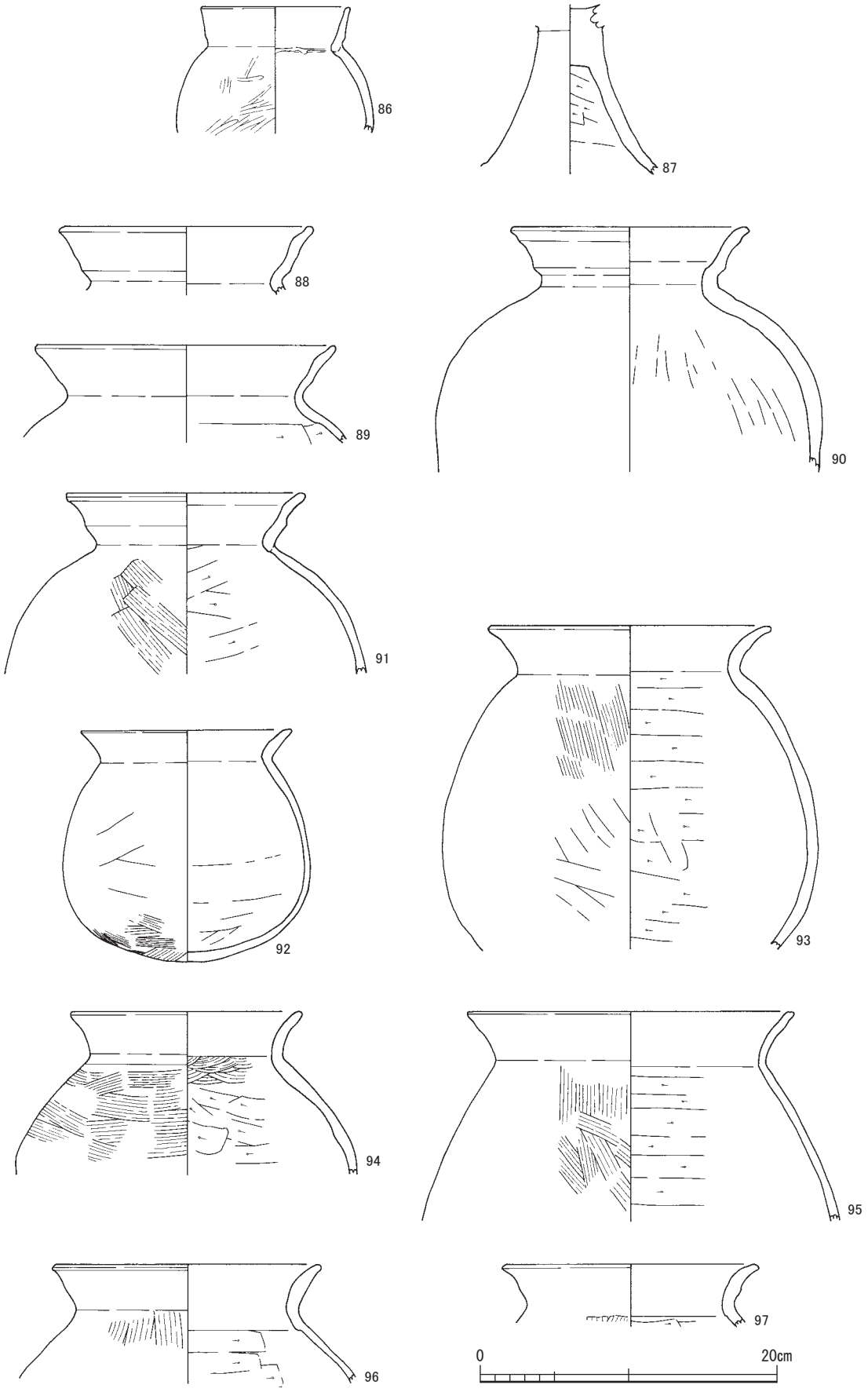
88～91は第1類の甕である。口縁部は二段に外反して立ち上がり、二重口縁状となる。

口縁部は内外面ともヨコナデが施され、体部は外面が板ナデ状を呈するもの（89・90）、ハケ目が施されるもの（91）が見られる。体部内面は横方向のヘラケズリ（89・91）と縦方向のヘラケズリ（90）とが認められる。

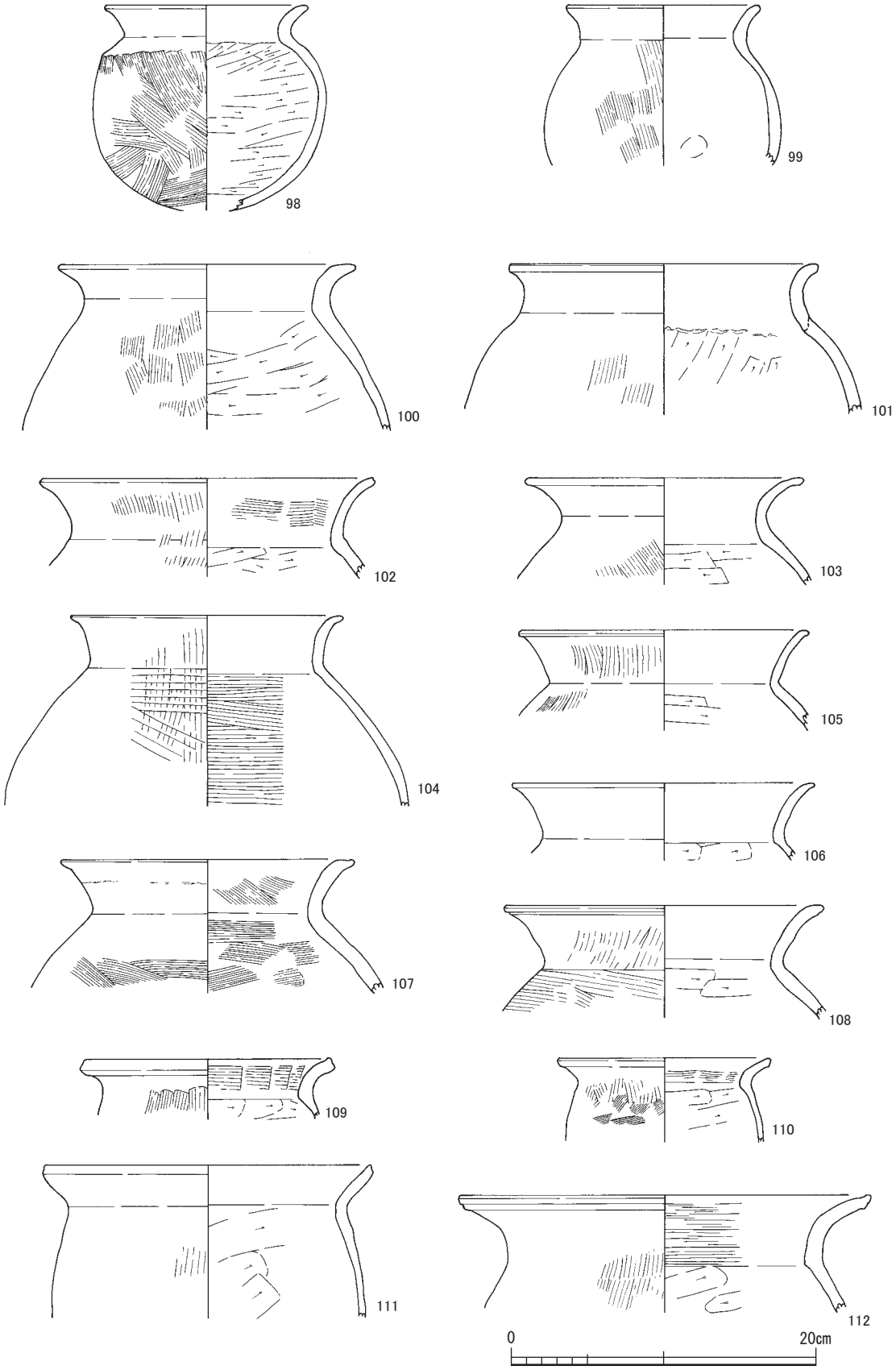
92～99は第２類の甕である。口縁部は直線的、あるいは弱く外反しつつ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。

92・93は、体部の最大径が、体部中位よりも下にあり、下膨れの形態を示す。体部外面は不定方向のハケ目（92）、ないしは縦方向～不定方向のハケ目（93）が施され、内面は横方向のヘラケズリが施される。92の底面は、受熱により黒化している。

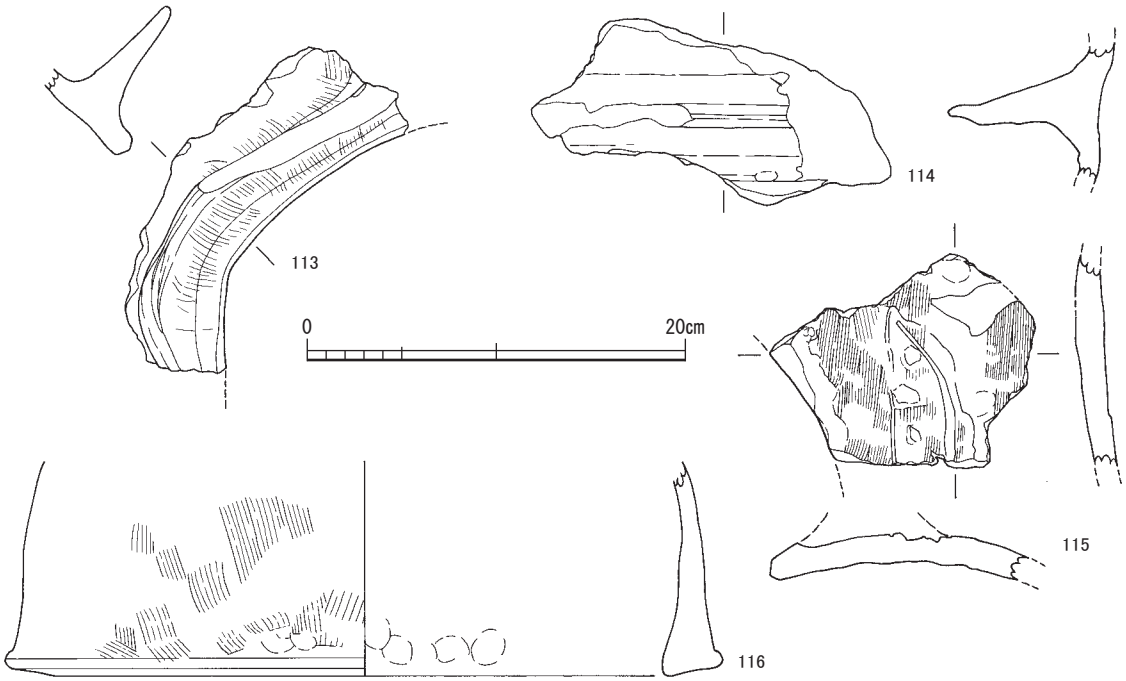
94は、体部の最大径がほぼ体部中位にあるものと思われる。体部外面は横方向のハケ目、内面上部は横方向のハケ目、下部は横方向のヘラケズリが施される。



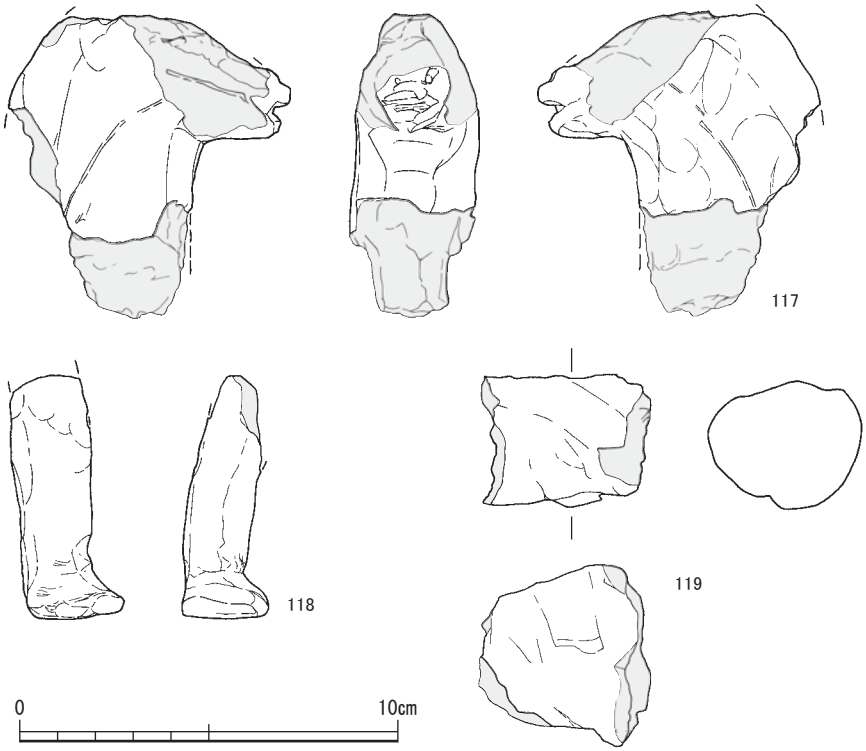
第20図　1区包含層出土の遺物（4）



第21図　1区包含層出土の遺物（5）



第22図　1区包含層出土の遺物（6）



第23図　1区包含層出土の遺物（7）

95は、体部の最大径が28㎝となる、やや大型の甕である。体部外面は縦方向～斜め方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリが施される。

96～99は口縁部中央付近が厚みを増す点で共通する。いずれも体部外面はハケ目、内面は99を除き横

方向のヘラケズリが施される。

100～103は第３類の甕である。口縁部が外反しつつ立ち上がり、口縁端部が丸く終わる。いずれも体部外面は縦方向ないし斜め方向のハケ目が施され、体部内面は横方向のヘラケズリが施される。102では口縁部内面にも横方向のハケ目が施されている。

104～108は第４類の甕である。口縁端部直下を強く外反させて、口縁部上面がほぼ水平になる。調整は多様で、体部外面に縦方向のハケ目を施すもの（105・108）、横方向のハケ目を施すもの（107）、不定方向のハケ目を施すもの（104）がある。体部内面は横方向のヘラケズリ（105・106・108）、横方向のハケ目（104・107）が見られる。

109・110は第５類の甕である。口縁部が外反しつつ立ち上がり、口縁端部が方形ないし多角形状に終わる。109は口縁端部がほぼ方形に終わる。口縁部内面には横方向のハケ目が施され、体部は内外面ともに横方向ないしは斜め方向のハケ目が施される。110は端部が多角形状を呈し、口縁部内面は横方向のハケ目、体部外面には縦方向～横方向のハケ目が施される。体部内面には横方向のヘラケズリが施される。

111・112は第６類の甕である。口縁端部をつまみ上げて、外側に面を形成する。111は端部をつまみ上げてわずかに内傾する面を形成する。体部外面には縦方向のハケ目、内面には横方向のヘラケズリが施される。112は端部をつまみ上げて、外傾する面を形成する。口縁部内面には横方向のハケ目を施す。体部外面には縦方向のハケ目、内面には横方向のヘラケズリを施す。

竈　（第22図）

竈の出土数は多い。図示できるものは4点であるが、他に、多数の破片が出土している。

113～115は竈の庇部、116は基底部である。116では、底径38㎝を測る。なお、115の器表面には、一見、文様のように見えるヘラ描き沈線が見られるが、これは庇の脱落した部分であることから、庇部貼り付け前におこなわれた作業の結果であり、意図的な文様とは考えがたい。

土製品　（第23図）

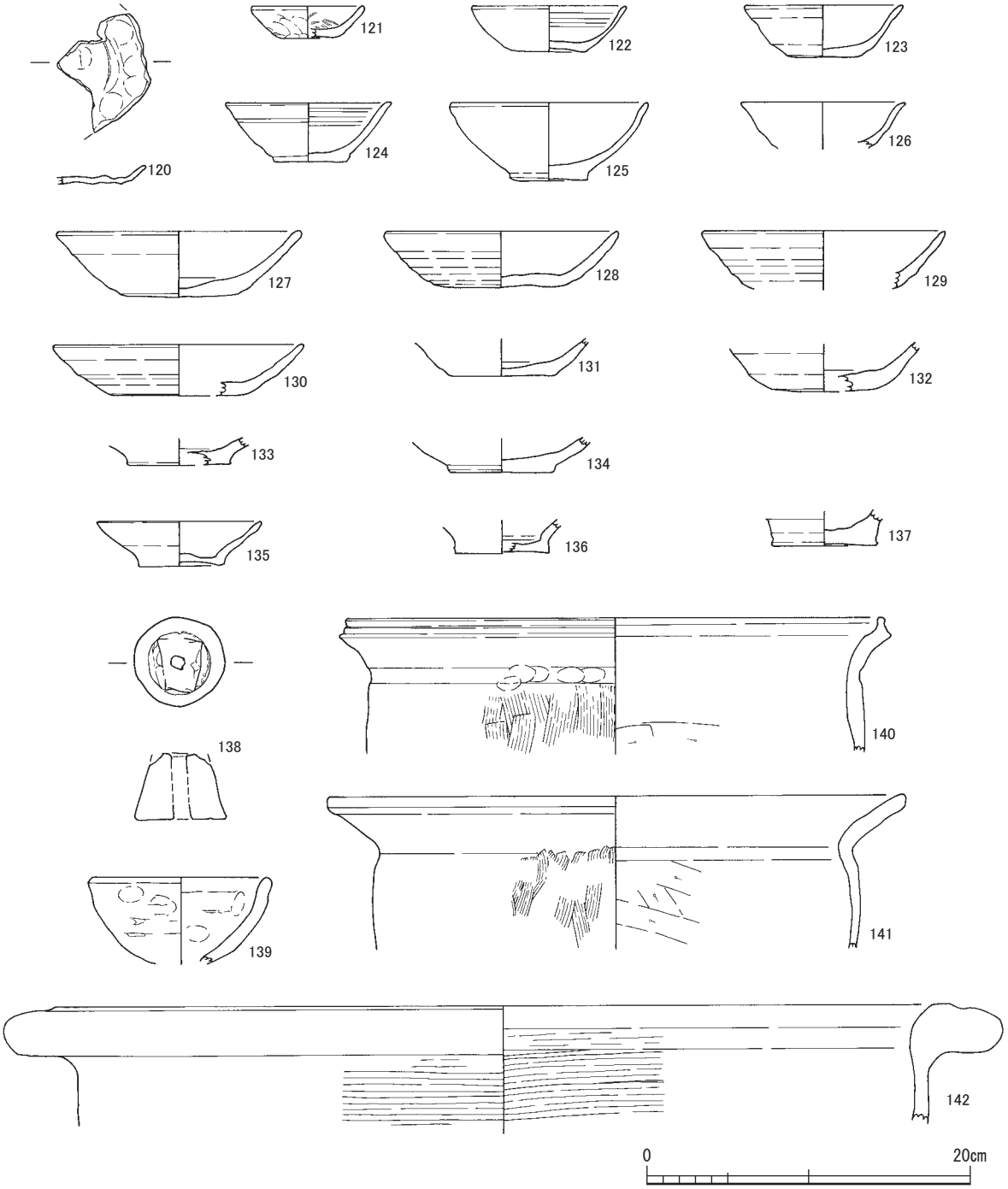
（土馬）

土馬は3点が出土した。いずれも１区斜面部の包含層より出土しており、同一個体に属する可能性も捨象できない。

117は頭部の破片である。顔面が顕著な損傷を受けて剥落しており、損傷面周辺はやや転磨を受けていることから、古い損傷と判断される。ヘラ状工具によって、鼻孔・口などが作られており、口の両端から沈線によって手綱が表現されている。目は刺突によって作られているが、耳は損傷の影響もあってはっきりしない。たてがみは頸部後方の粘土をつまみ出すように表現されている。全体には、写実的な表現と言えよう。

118は右脚である。付け根部分から脱落している。手づくねによって成形され、足は前方と内側に粘土を広げて表現されている。

119は胴部と思われる。手づくねの成形であるが、図左下の中央には、上から下へ表面をこすったような痕跡があることから、この部分が鞍を表現している可能性がある。



第24図　1区包含層出土の遺物（8）

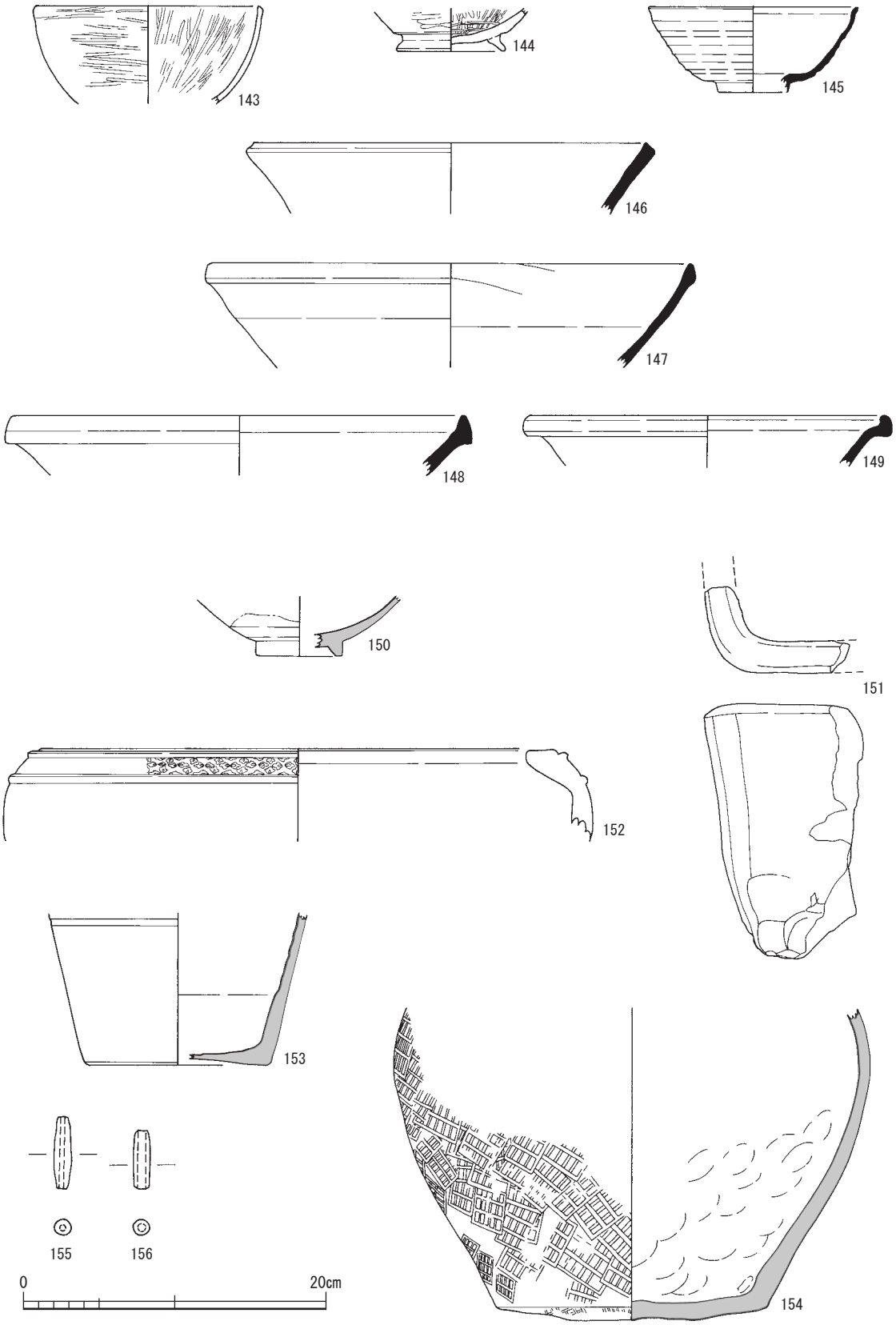
鎌倉時代以降の土器　（第24図・第25図）

120は手づくねの皿である。口縁部が円形にならないため、径の復元はできない。内外面に指頭圧痕が並び、工具の接触痕が残されている。

121も手づくね成形された小皿である。

122～137はロクロ成形された土師器である。

122・123は2類の杯である。平坦な底部から、わずかに内湾気味の口縁部が立ち上がる。 9 では、口



第25図　1区包含層出土の遺物（9）

縁端部が弱く外反する。

124～126は2類の椀である。いずれも低い平高台をもつ。口縁部は、内湾気味に立ち上がり、口縁端部にかけてわずかに外反する。回転ナデ調整が施されており、124の内外面上部には、工具の接触痕と思われる回転カキ目のような条痕が見られるが、これが意図的なものか否かは判断できない。

127～130は杯である。いずれも平坦な底部から、概ね直線的、ないしはわずかに内湾気味の口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境界は、丸みをおびる。

131～132は底部のみの遺存であるが、口縁部の立ち上がりの角度から椀と判断される。133・134は低い平高台であるが、椀の可能性が高い。

135は、やや上げ底状となった底部から、強く外反して立ち上がり、さらに角度を変えて概ね直線的に開く口縁部を見せる。内面は、見込み部が一段下がる形態を見せることから、托と判断した。136・137は口縁部を欠くが、底部付近の形態から本器種に属すると判断される。

138はいわゆる柱状高台である。底部は回転切り離しであるが、器表の劣化が顕著であるため、技法は判然としない。中心に直径１㎝の孔が貫通する。上部は杯ないしは皿状の形態であったと思われる。

139は所属時期が判断できない資料である。粗い胎土を用いて、粘土帯を積み上げて製作しており、内外面に指頭圧痕が残されている。器表面は受熱しているように見受けられる。日用器ではなく、何らかの作業に供された土器と思われる。

140・141は土師器鍋である。

140は、膨らみの小さい体部から、ゆるやかに外反する頸部～口縁部を見せる。口縁部の開きは小さい。端部はつまみ上げられており、外面に顕著な凹面を形成している。体部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリが施される。口縁部から体部にかけての外面は、火熱を受けており、煤が厚く付着している。

141は膨らみの小さい体部から、大きく、直線的に開く口縁部を見せる。口縁端部は、外側に鈍い面を形成する。体部外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが施される。

142は大型の鍋であろうか。ほぼ直角に屈折する厚い口縁部を見せ、復元口径は62㎝に達する。器面は著しく劣化しており、調整痕は識別できない。

瓦器

（椀）

２点が出土している。143は内湾しつつ急斜度に立ち上がる体部を見せる。外面には横方向のヘラミガキ、内面には縦方向のヘラミガキが施される。144は底部のみの破片である。見込み部にはジグザグ状のヘラミガキが施され、体部はやはり縦方向のヘラミガキが施される。

須恵器

（椀）

145は須恵器椀である。内外面ともに、回転ナデ調整が施されるが、粘土紐の凹凸が顕著に残り、外面には指頭圧痕が認められる。底部は平高台であったと思われ、見込み部が一段下がる。

（鉢）

４点が出土しているが、口縁部の形態がそれぞれ異なっている。

146は、体部の立ち上がりは直線的で、口縁端部がそのまま方形に終わるものである。147は口縁端部をつまみ上げて、外側にほぼ直立する面を形成する。148は口縁端部を上下に拡張して、外側の面を拡大している。149は口縁部をいったん水平に張り出させ、端部をつまみ上げて玉縁状としている。

磁器

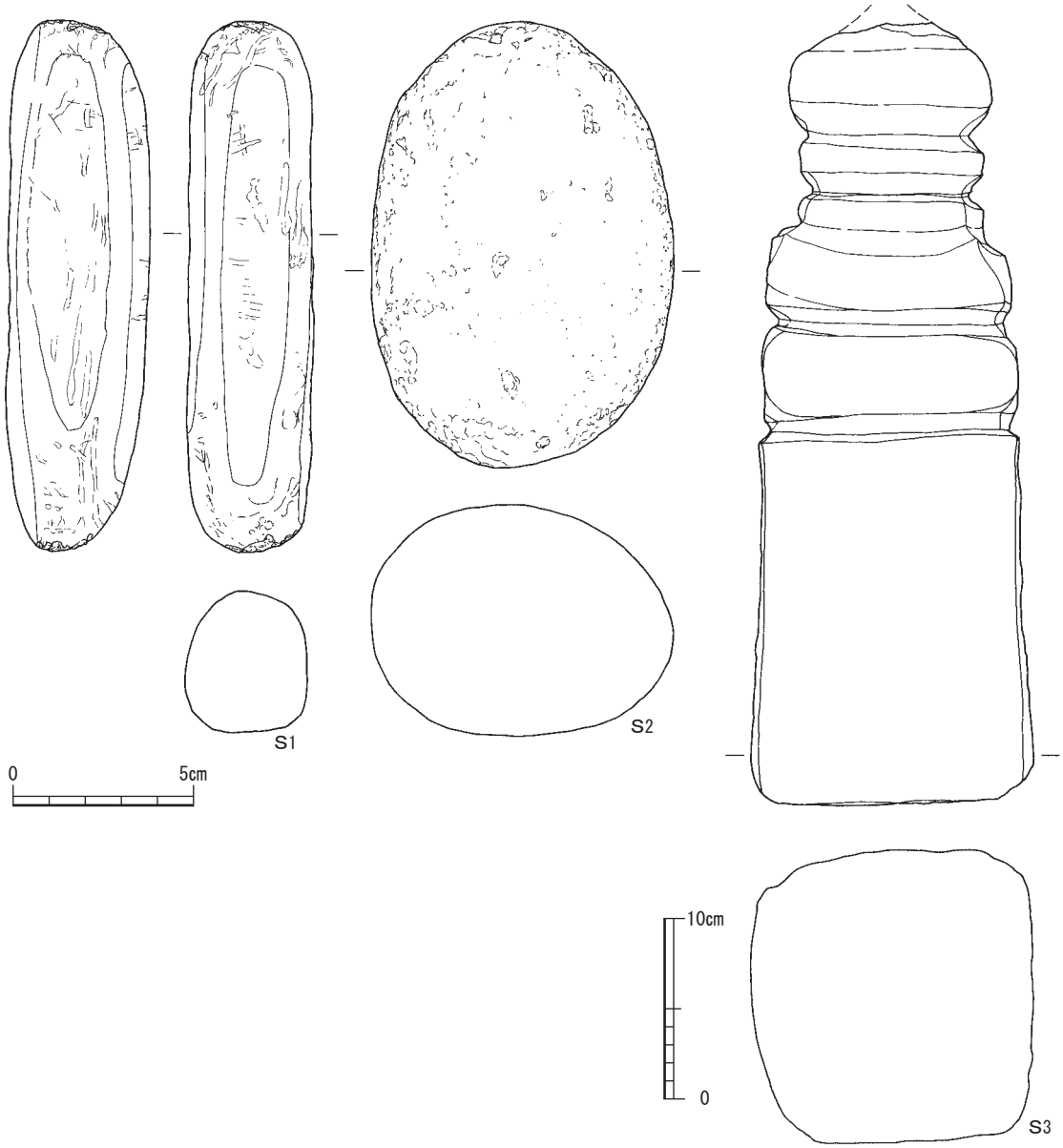
（碗）

150は白磁碗である。高台部は露胎となっており、高台外面はヘラケズリが施されている。

瓦質土器

（火鉢）

151は厚い器壁をもつ方形の瓦質土器で、四隅に柱状の脚をもつものである。形態から、火鉢と推定



第26図　1区包含層出土の遺物（10）

される。器表面は劣化が進行している。

152は内傾する口縁部の外面に、印花文を施すものでる。やはり火鉢と推定される。

陶器

（壷・甕）

153は壷である。底部は回転糸切りである。体部外面は鉄釉が施されている。

154は甕である。不整形な広い底部から球体状の体部が立ち上がる。体部外面には格子状のタタキが、内面には同心円状のタタキが施されるが、内面はタタキ目をナデ消している。外面は火熱を受けて、広い範囲で黄褐色～赤褐色に変色している。

土製品（第25図）

（土錘）

155・156は土師質の土錘である。155は中央部がやや膨らみ、156は直管状を呈する。

石器・石製品　（第26図）

包含層中および表面採集によって、３点の石器・石製品が回収された。

（叩石）

Ｓ１・Ｓ２は、河川の礫を用いた叩石である。いずれも所属時期を特定することはできない。

Ｓ１は細長い亜円礫の両端を用いて打撃をおこなっている。断面形はやや歪んだ円形をなし、使用部以外には加工痕・使用痕ともに認められない。

Ｓ２は厚みのある楕円形の礫の、両端を用いて打撃をおこなっている。断面形は卵形をなし、使用部以外には加工痕・使用痕ともに認められない。

（五輪塔）

Ｓ３は一石五輪塔である。寺地古墳背後の山林に放置されていたもので、器表面は風化が著しく、気泡状を呈する。風・火・水輪が扁平な形態を示すのに対し、地輪は長く作られている。これは、下部の埋設を念頭としたものであろう。下底面は平坦に仕上げられている。中世末～近世初頭の製作になるものであろう。あるいは、寺地古墳そのものが、中世段階でマツリの対象となっていたものかもしれない。

鉄製品（第27図）

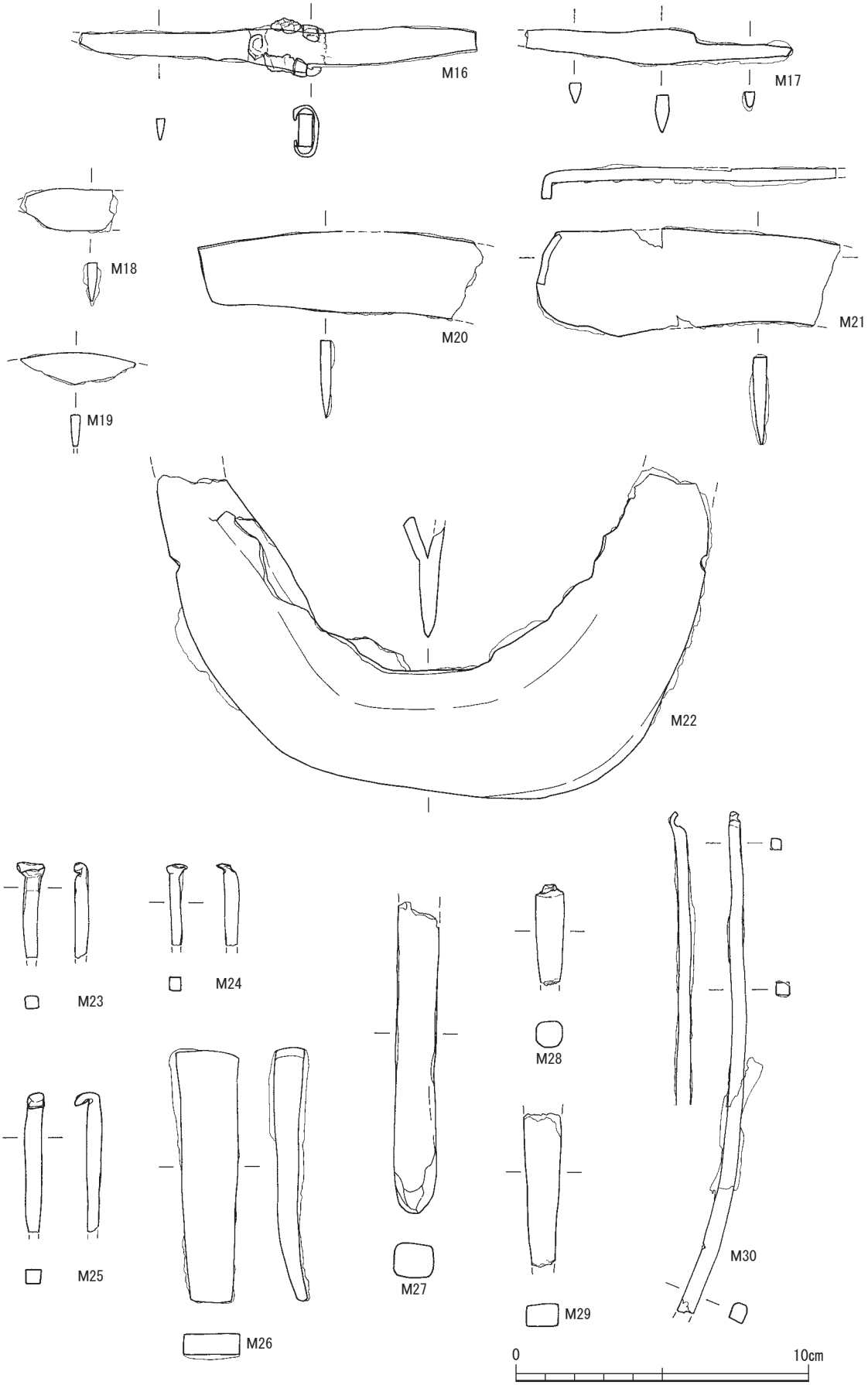
（刀子）（M16～M19）

M16は先端を欠くもののふくら切先で刃関を持つ。残存長13.6㎝で刃部の断面は楔形、茎部の断面は長方形を呈する。茎尻は一文字尻となっている。斜面下包含層から出土した。

M17は切先を欠き、背関で残存長9.1㎝を測る。刃部断面は切先側で楔形、茎部手前では五角形を呈する。茎部の断面も楔形である。茎尻は隅切りになると思われる。Ⅱ区の溝状の落ち込みから出土した。

M18は刀子の刃部と思われる破片である。断面は五角形を呈する。Ⅰ区窯跡群下方斜面から出土した。

M19は刃部と思われる破片である。断面形は五角形で背部に屈曲がある。Ⅰ区包含層から出土した。



第27図　包含層出土の遺物（11）

（鎌）（M20・M21）

M20は鉄鎌と思われる刃部である。切先と基部が失われ、刃部中央だけが残る。身幅は2.7㎝である。Ⅰ区包含層から出土した。M21は切先が失われるものの基部は残り、基部の背部角を折り返している。折り返しを表にした場合、切先は右を向き、いわゆる「折り返し乙技法」が採用されている。身幅は最大で3.7㎝を測る。Ⅰ区包含層から出土した。

（鋤先）（M22）

いわゆる「U字形鋤鍬先」である。両側の耳端部は失われている。基部幅は約19㎝、刃先長2.7㎝、着柄部V字溝の深さは1.45㎝を測る。Ⅰ区２号窯下方斜面から出土した。

（釘）（M23～M25）

いずれも頭部を扁平にし、折り曲げている。断面はほぼ正方形を呈する。先端部を欠く。残存長は2.75～4.8㎝を測る。M23・M24はⅡ区包含層、M25はⅠ区包含層から出土した

（鑿）

M26は鑿であろう。厚みのある長方形の断面を見せ、先端（下端）では厚みを減じて、直線的な刃部を設けていたものと思われる。

楔・鏨状鉄製品（M26・M27）

M26は短冊形の楔状鉄製品である。断面は長方形で頭部付近の厚さが約１㎝、端部付近で0.5㎝を測る。Ⅰ区斜面下包含層から出土した。M27は頭部を欠くが、先端に向かって先細りになり、厚みも減じる鏨状鉄製品である。残存長10.7㎝でⅠ区包含層から出土した。

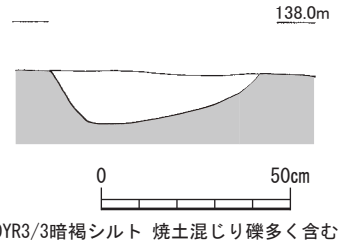
不明鉄製品（M28～M30）

M28は残存長3.4㎝を測り、断面は隅丸方形を呈する。両端を欠くため、本来の形状は不明である。Ⅱ区包含層から出土した。M29は残存長5.3㎝を測り、断面は長方形を呈する。上部から下部にかけて幅を減じ、両端を欠くため本来の形状は不明である。Ⅰ区の斜面部包含層から出土した。M30は３片に分かれており、接点が曖昧な部分もあるが、推定復元し図示した。断面は方形を呈し、弓なりになった棒状の形態をとり、一方の端に環状の突起がついていたと考えられる。Ⅰ区攪乱層から出土した。

３　２区の遺構と遺物

①遺構

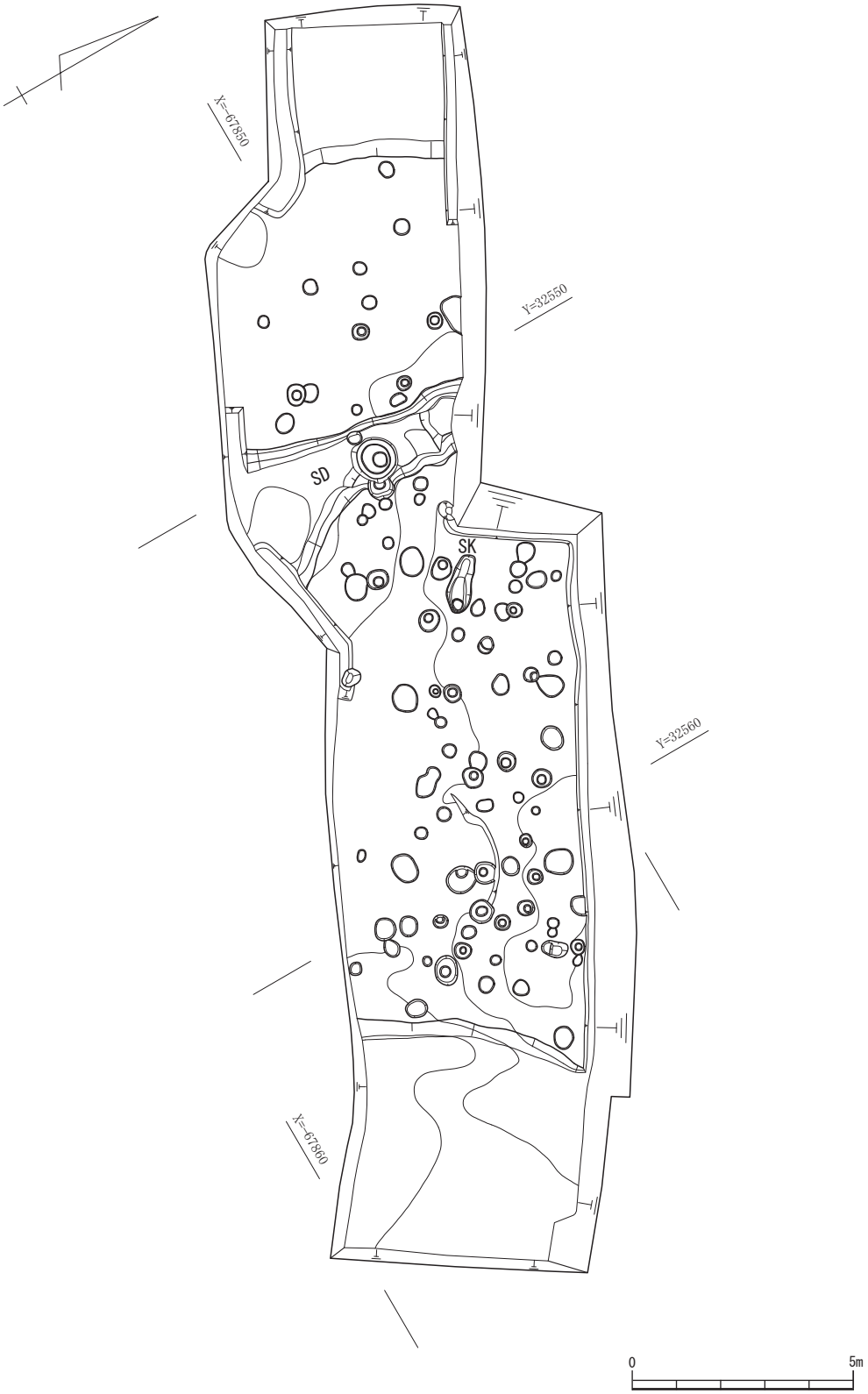
２区では、溝、土坑および数か所の焼土と97基の柱穴が検出された。ただし、調査区の制約上、建物跡を復元するには至らなかった。出土遺物は奈良時代を中心とするが、一部、古墳時代に遡るもの、中世に下るものも出土している。これ以外に、調査区の東西両端には埋没した旧河道があり、その内部を埋める堆積物からも、遺物が出土している。



第28図　2区土坑断面図

【土坑】（第28図）

検出された土坑は１基である。歪んだ長楕円形を呈し、長さ135㎝、幅55㎝、深さ15㎝を測る。内部はシルト質の砂で自然埋



第29図　２区平面図（1/150）

没していた。図示可能な遺物は出土していない。

【溝】

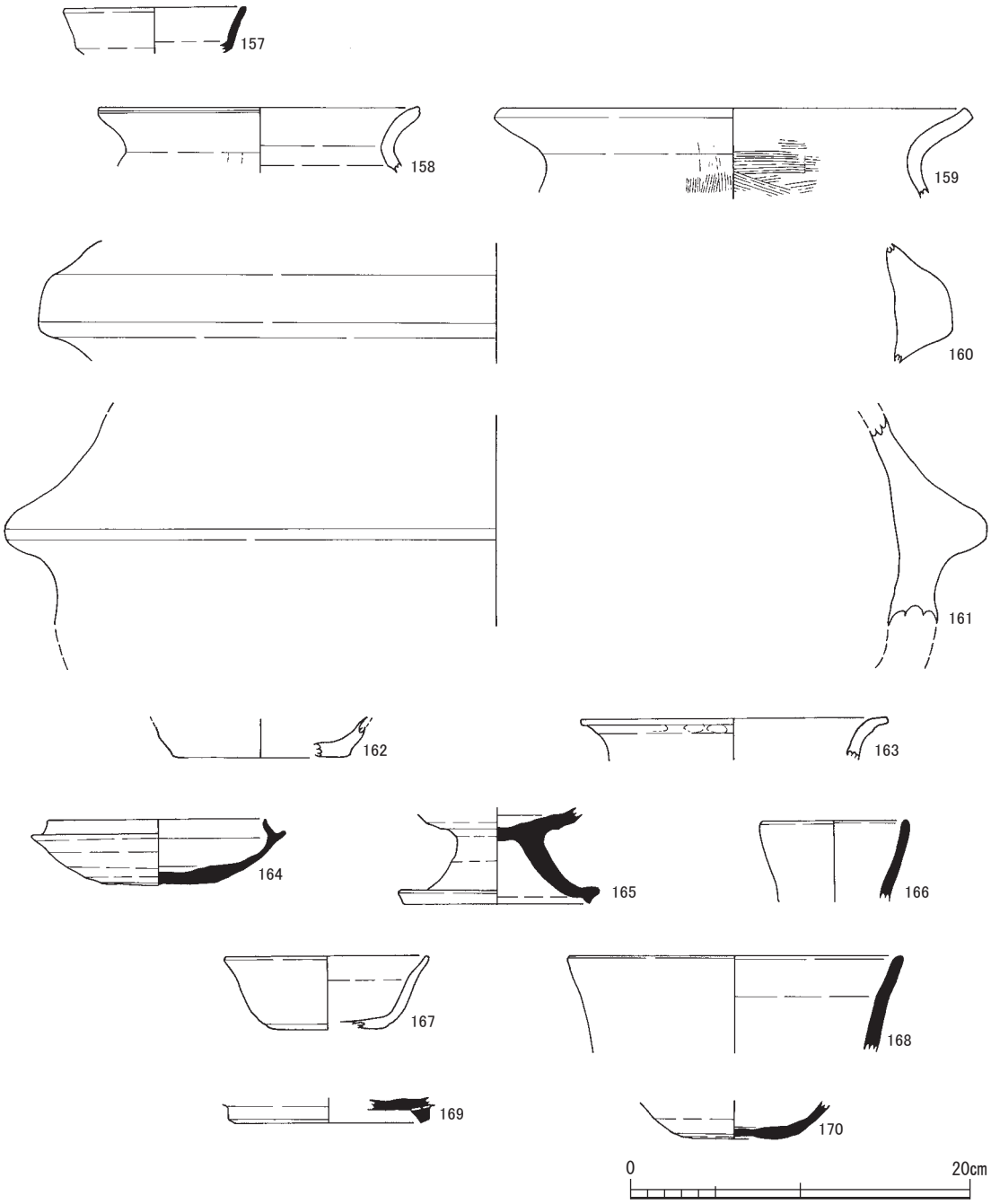
２区の中央に位置する不整形な溝で、人為的なものか否か判断し難い。延長５m、最大幅３m、深さ

20cmを測る。溝内は礫混じりの淘汰の悪いシルト～砂で埋没していた。図示可能な遺物は出土していない。

【柱穴】

２区では、直径20cm～80cmの柱穴95基が検出されたが、調査区が狭小であったため、建物跡・柵などを元することはできなかった。柱穴の多くは不整円形～楕円形を呈し重複も認められることから、複数の時期にわたって建物が設けられたものと思われる。

②遺物



第30図　２区出土の遺物（１）

【遺構内出土の遺物】

柱穴 2

157は柱穴 2 より出土した、須恵器の杯身である。

柱穴 3

158・159は土師器甕の口縁部である。

158は外反気味に開く口縁部で、端部外面に凹線を1条巡らせる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面には縦方向のハケ目、内面にはヘラケズリが施される。

159は直線的に開く口縁部で、端部の断面は方形を呈している。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目が施される。

160は土師器の羽釜であろうか。断面が台形をなす、きわめて厚い突帯部のみの破片である。器表面は風化が著しく、調整痕を識別することができない。

161も、160と同様の羽釜であろう。断面形が鈍い三角形を呈する、厚い突帯を巡らせる。やはり器表面の風化が著しい。

柱穴4

162は土師器杯の底部である。平坦な底部から、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部にかけて外反する。内外面はナデ調整が施され、底部はヘラ切り無調整である。

柱穴8

163は甕の口縁部である。強く外反する口縁部で、端部はほぼ水平に開く。口縁端部外面には、強い外反を生じさせたユビオサエの痕跡が並ぶ。

柱穴9

164は須恵器の杯H身である。内外面ともに回転ナデ調整が施されるが、底部は、わずかにヘラの当たりが見られるものの、ヘラ切り無調整である。見込み部には、同心円タタキの原体と思われる、当て具の痕跡が残る。165は須恵器の短脚高杯である。脚部は大きく開き、脚端部は拡張されて外傾する面を作る。杯部下面は回転ナデ調整が施されている。

第3表　2区柱穴内出土遺物（図示できなかったもの）

番号	出土遺物
2	須恵器杯Ｂ蓋・須恵器壷（？）口縁部
8	須恵器杯・須恵器高杯
9	須恵器杯Ｂ身・同蓋
10	細粒の焼土塊
22	須恵器杯Ｂ身・同杯H身（飛鳥）・須恵器椀（中世）
25	須恵器杯Ｈ
29	須恵器壷（？）体部破片（櫛状工具による刺突文）
31	細粒の焼土塊
32	土師器甕（３類）口縁部・土師器皿（？）口縁部
34	土師器甕（１類）口縁部
35	須恵器杯Ａ（？）身・同B身・同H身
50	須恵器椀（中世）
52	土師器甕（２類・６類）口縁部
53	土師器甕（６類）口縁部・竈・須恵器杯身（Ｂ？）
55	土師器皿（？・回転糸切の底部）

柱穴10

166は須恵器の壷ないしは瓶の口縁部である。内外面ともに回転ナデ調整が施される。

柱穴47

167は土師器の高杯である。杯部は、膨らみをもちつつ立ち上がり、口縁部は弱く外反する。全体に回転ナデ調整が施されている。168は須恵器壷の口縁部である。

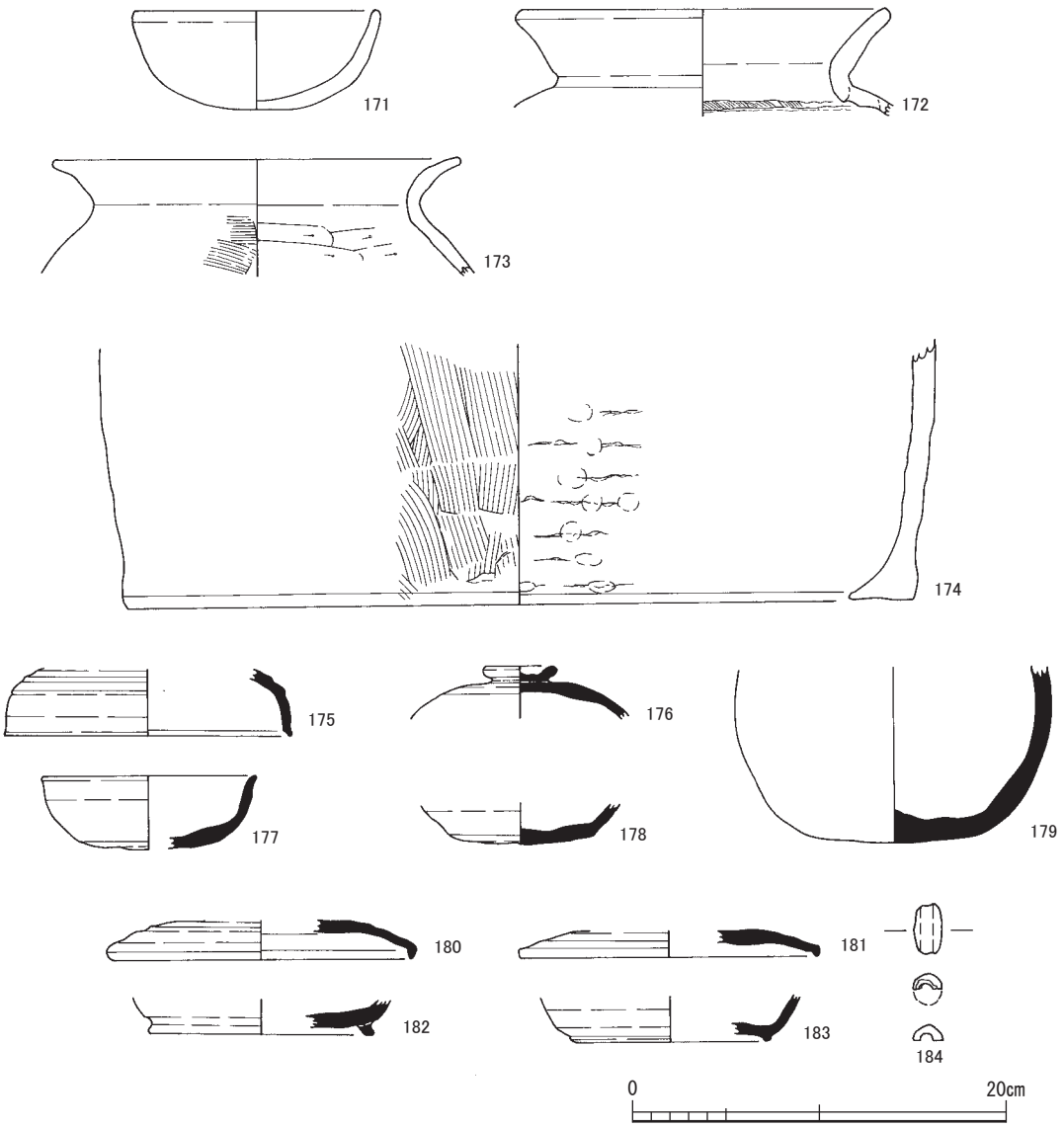
柱穴49

169は須恵器の杯B身である。底部には、外方に短く張り出した、断面が逆台形の高台を貼り付ける。

柱穴50

170は須恵器の壷底部である。体部には回転ナデ調整が施されるが、底部は回転ヘラ切り無調整。

以上の他に、図示できないが表のような遺物が出土している。



第31図　２区出土の遺物（２）

【包含層出土の遺物】

２区の包含層からも、多様な時期の遺物が混在して出土している。従って、２区においても遺物包含層は遺跡形成過程における古土壌層ではなく、二次的に流下、堆積したものと判断される。

（土師器杯・甕・羽釜・竈）

171は土師器杯である。丸底から、そのまま立ち上がり口縁部に至る。口縁部にはヨコナデが、他の部位には内外面ともにナデ調整が施される。

172・173は甕である。

172は、外反しつつ開く口縁部を見せる。体部外面には横方向のハケ目、内面には横方向のヘラケズリが施される。173は体部から屈折して直線的に開く口縁部を見せる。口縁端部は鈍い方形に終わっている。口縁部内外面にはヨコナデが、体部内面には縦方向のハケ目が見られる。

174は竈である。底部は内面に厚みを増し、平坦に終わる。体部はわずかな膨らみを見せ、やや外傾して立ち上がる。外面は縦方向のハケ目で調整される。内面は指頭圧痕と粘土帯の継目が顕著である。

（須恵器杯・高杯）

175は須恵器杯蓋である。肩部には1条の凹線が巡り、これより天井部には、回転ヘラケズリが施される。口縁端部内面には、段が設けられる。

176は有蓋高杯の蓋である。全体に丸みをおびており、天井部には回転ヘラケズリが施されている。

177は杯身とした。底部から丸みを持って立ち上がり、口縁端部に至る。底部はヘラ切り後、不定方向の仕上げナデが施される。

178は杯身である。やや丸みをおびた底部から、直線的に開く体部が立ち上がる。底部と体部の境界は明瞭である。底部は回転ヘラ切り無調整である。

179は須恵器壷の体部～底部である。ほぼ球体状を呈し、底部は静止糸切りである。

180は杯B蓋である。天井部はやや膨らみをもち、端部は内傾する。

181は杯B蓋である。扁平な作りで、端部はほぼ垂直に折り曲げられている。天井部には回転ヘラケズリが施されている。

182は杯B身である。高台は外方に張り出すように付けられているが、ごく扁平で、稜線も鈍い。

183は杯B身である。高台は、外方に張り出すが、稜線は鈍い。

184は土師質の土錘である。中程が膨らんだ管状を呈する。

第３節．小結

１区・２区ともに柱穴・土坑・溝等が遺構として検出された。いずれの地区でも、人為か否か判断に苦しむ遺構も存在したが、特に２区では柱穴密度が高いことから、これらの一部が集落を形成する建物跡であった可能性は高い。

遺構の時期を特定することが難しいが、１区の遺構に関しては、寺地窯跡群との関わりを無視することができないだろう。２区の遺構、特に柱穴では、律令期の遺物を出土したものが多く見られ、次いで中世の遺物を出土するものが多いようである。

また、寺地古墳よりも古い時期のものも含め、古墳時代の須恵器が出土していることから、寺地古墳の他にも、調査地周辺に古墳、あるいは古墳時代集落が存在した可能性は高い。

第５章　寺地窯跡群

第１節．遺構の立地

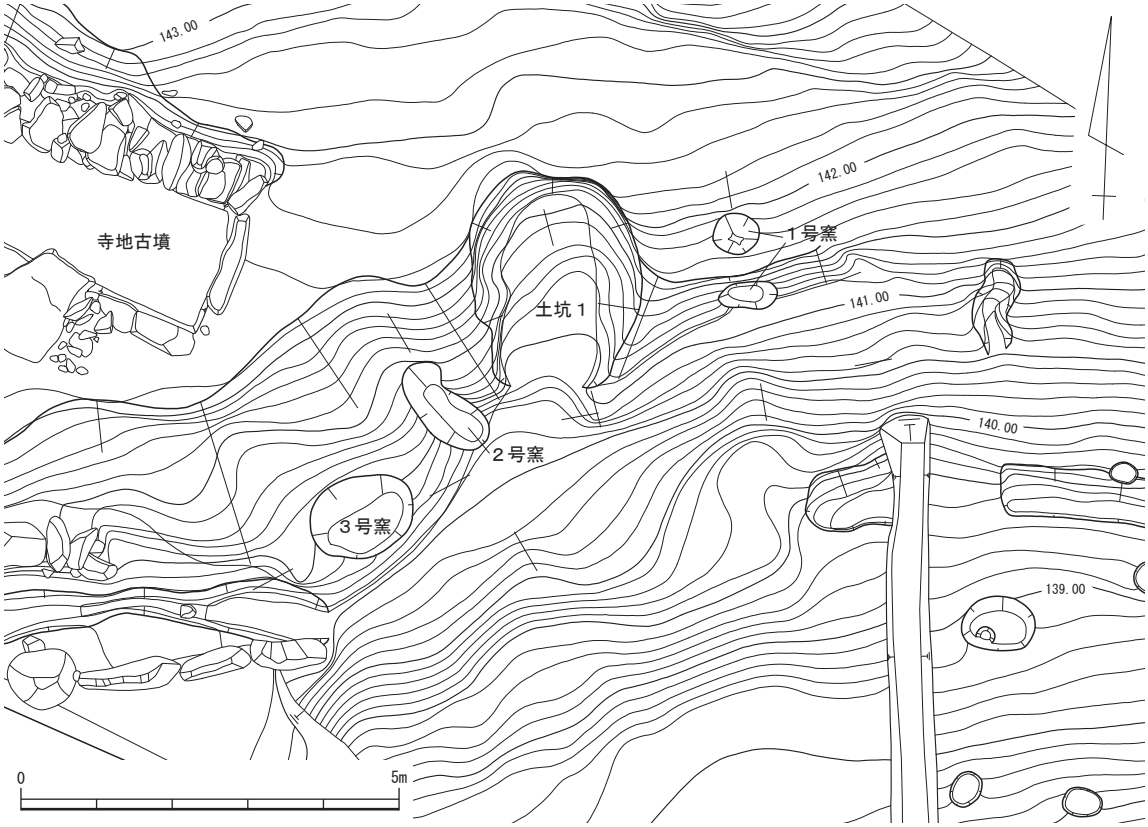
寺地窯跡群は、寺地古墳の裾部にあたる南東側斜面で検出された。遺構は、土師器窯跡３基と土坑１基から構成される。いずれの遺構も褐色～赤褐色を呈す風化岩盤、ないしはその上位のシルト質砂層を掘り込んで構築されている。窯跡・土坑は、ほぼ同一の等高線上に並んでおり、出土遺物からも、概ね同時期に構築されたものと考えられる。

第２節．遺構

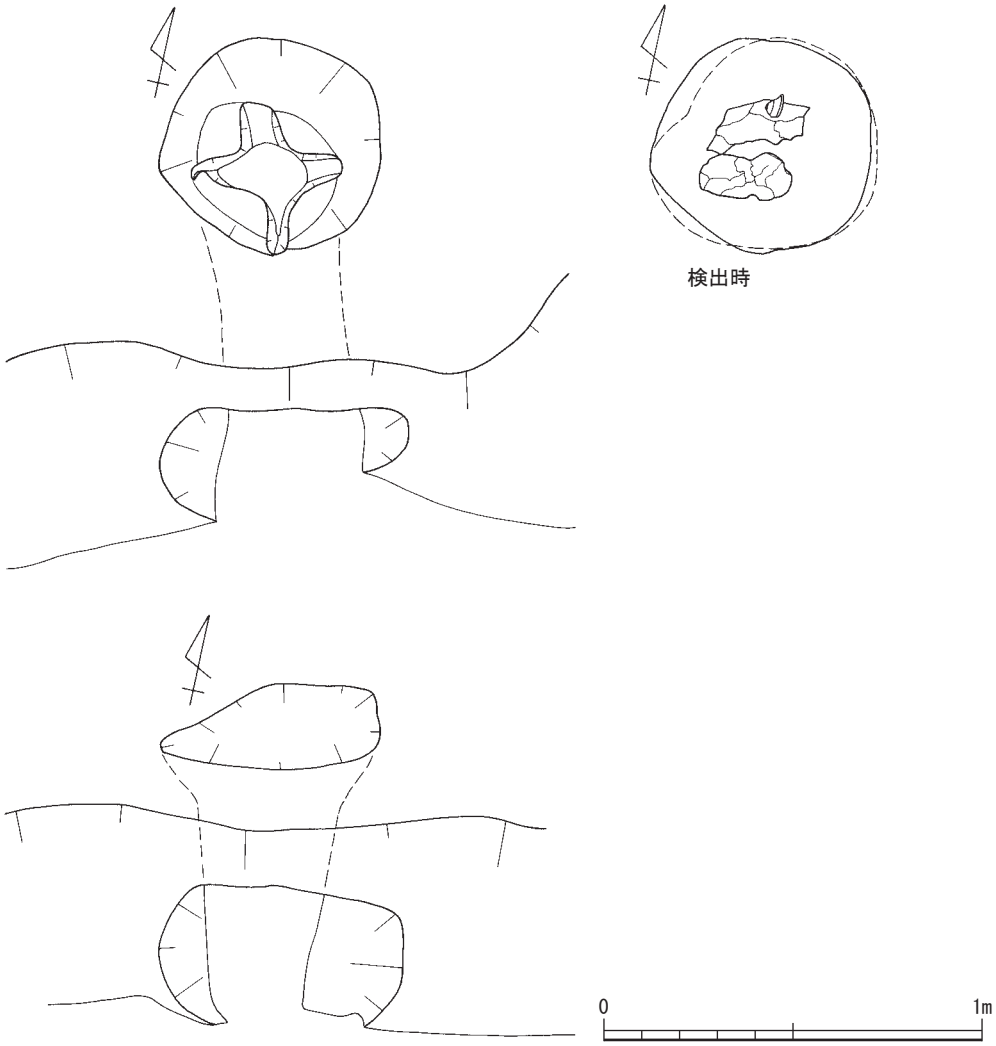
（１）１号窯跡（第33・34図）

山麓斜面をトンネル状に掘りぬいた窯跡で、形態からは「煙管式窯」と呼ばれるものに含まれる。上部構造をわずかに失っているものの、焚口部、燃焼部、焼成部が完存していた。焚口部の南東側には狭い前庭部があり、その下方のは急斜どの斜面となっていた。

焚口部は、幅65㎝、高さ40㎝弱の俵形を呈している。焚口部から奥壁までは奥行き80～90㎝を測る。この間の床面は緩やかに傾斜しており、焚口部に対して奥壁下端はやや高まっている。調査時点では、焚口部から45㎝前後にわたって天井部が残存していたが、この部分が燃焼部に相当するものと思われる。



第32図　寺地窯跡群平面図

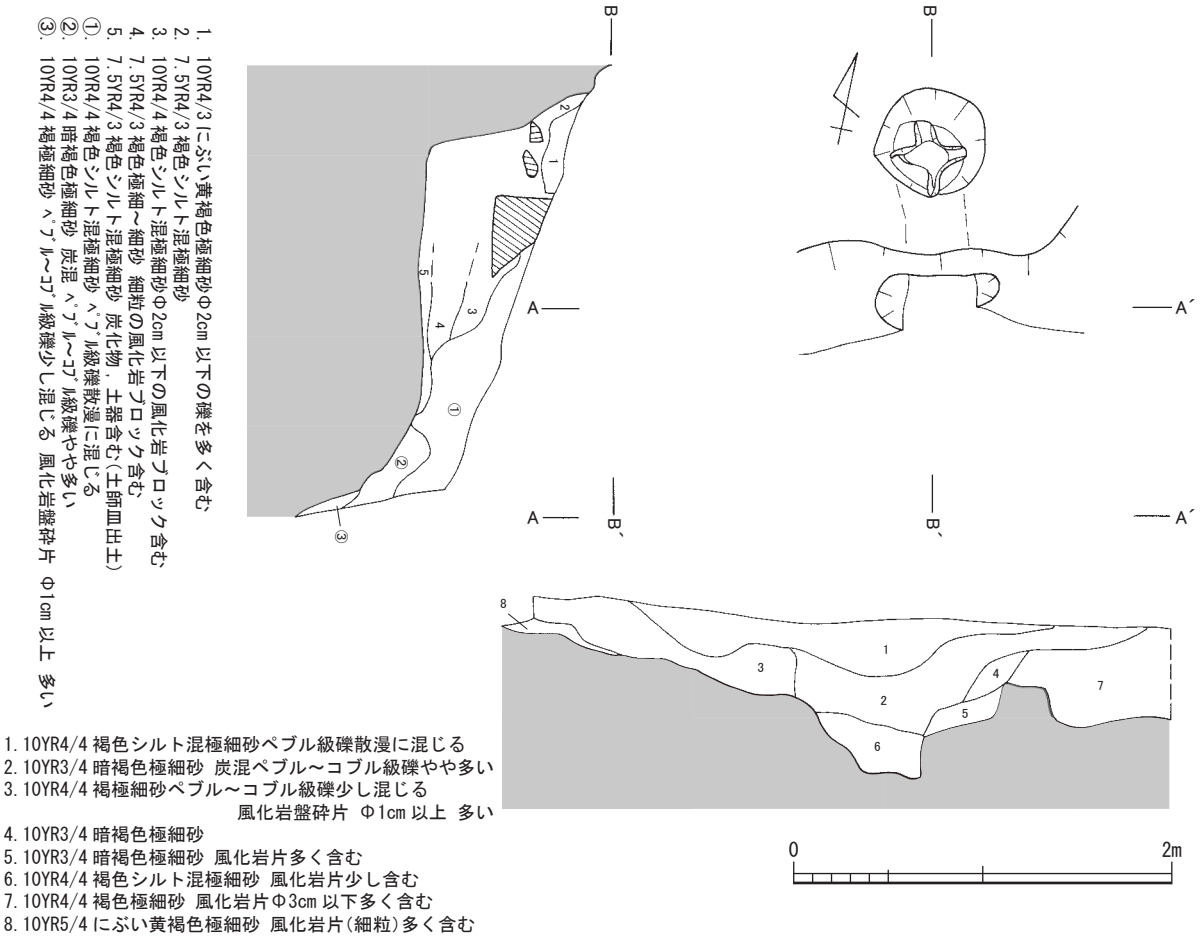


第33図　１号窯跡検出状況

奥壁からは煙管状に屈折し、上部に向かって開く掘り込みとなるが、この掘り込みの中位で大きく漏斗状に開いて検出面に至る。この掘り込みが大きく開く屈折部は、十字形に掘り込まれている。これはいわゆる「火格子」の機能をもつものと考えられ、焼成時に土器を置くための構造物であろう。この十字形構造より上位が、焼成室に相当すると考えておきたい。なおこれより上位には、構造物は遺存していなかった。ただし、十字形構造の直上には、被熱した粘土塊が堆積していたことから、調査時に確認された焼成室の上位に、天井のような構造物が存在したものと推定される。

窯体内から焚口部付近の床面には炭層が堆積していたが、前庭部は狭く、焚口部から１mほどは平坦であるが、その下方は急斜度の斜面となっていた。断面観察では、斜面部には炭・灰層は認められず、灰原の広がりも不明である。これは、灰原が存在しなかったというよりも、焚口部下方斜面が急傾斜であったため、炭・灰層が埋没する以前に、速やかに流出したことに起因する可能性がある。従って、１号窯における焼成回数については、判断する根拠がない。

なお１号窯跡については、調査終了後、窯体全体を発泡ウレタンで保護して切り取り、現地から移動させて保存している。従って窯体の断ち割りは実施しておらず、窯体の詳細な断面図・写真を示すことはできない。



第34図　１号窯跡断面図

（２）２号窯跡（第35図）

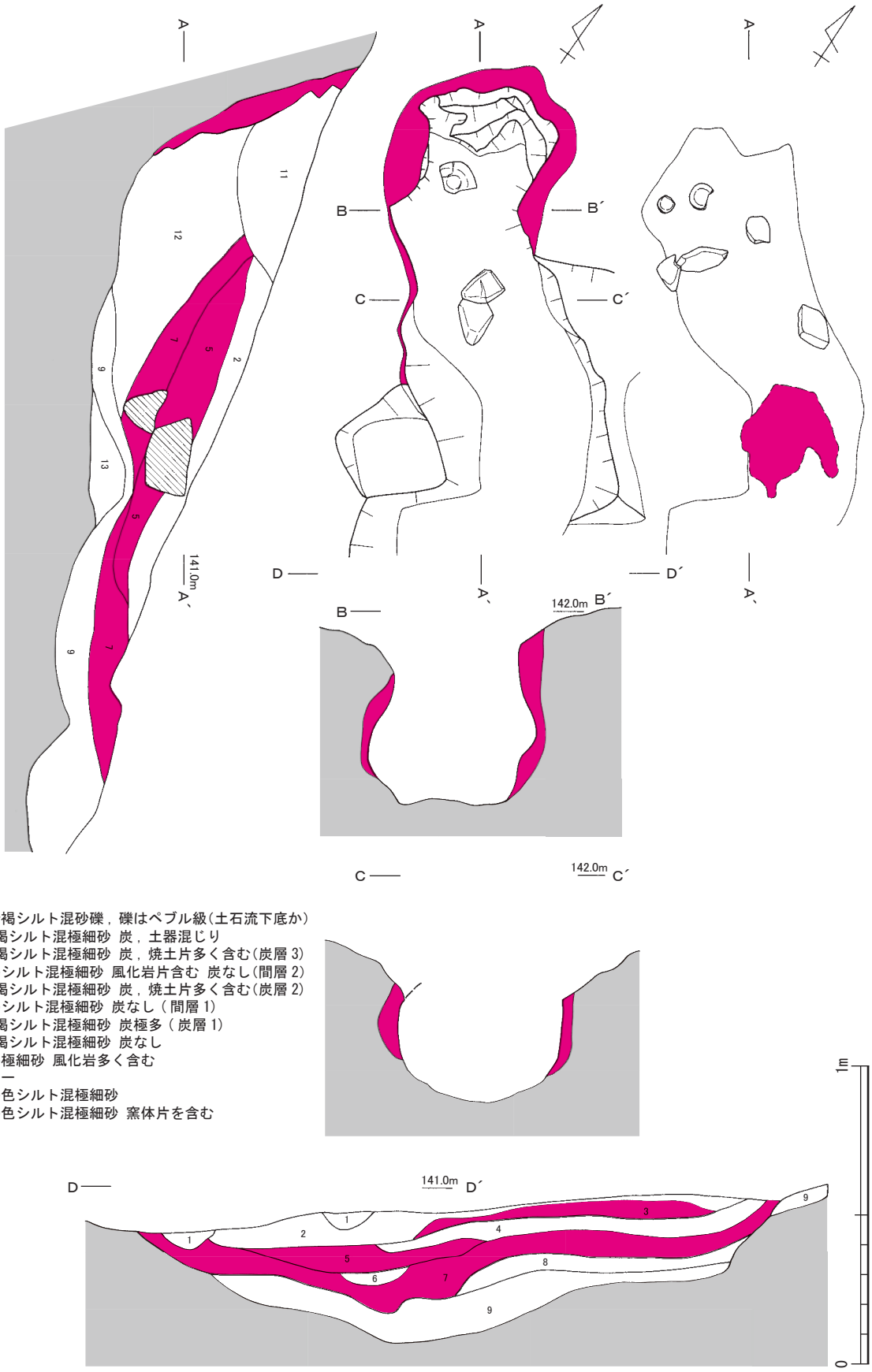
１号窯跡同様、斜面をトンネル状に掘りぬいた煙管式窯であるが、焚口から奥壁まで、天井部はすでに落下しており、全体には不整形な土坑状で検出された。しかし、掘削後の床面を見ると、形態・規模ともに１号窯跡に近似したものであったと思われる。

焚口部の掘方はやや喇叭状に開き、焚口部から奥壁に至る床面は、やや屈曲しつつ、5°～10°の傾斜をもって奥壁に至る。奥壁は漏斗状の掘り込みを見せるが、細かく見ると、途中で開きが大きくなることから、１号窯跡同様、これより上位が焼成室であったと思われる。奥壁付近での遺存深度は約80cmである。

側壁を含む横断面は、底面にわずかな凹凸をもつ袋状を呈している。また、焚口部付近の底面は、丸みをおびた船底状を呈する。

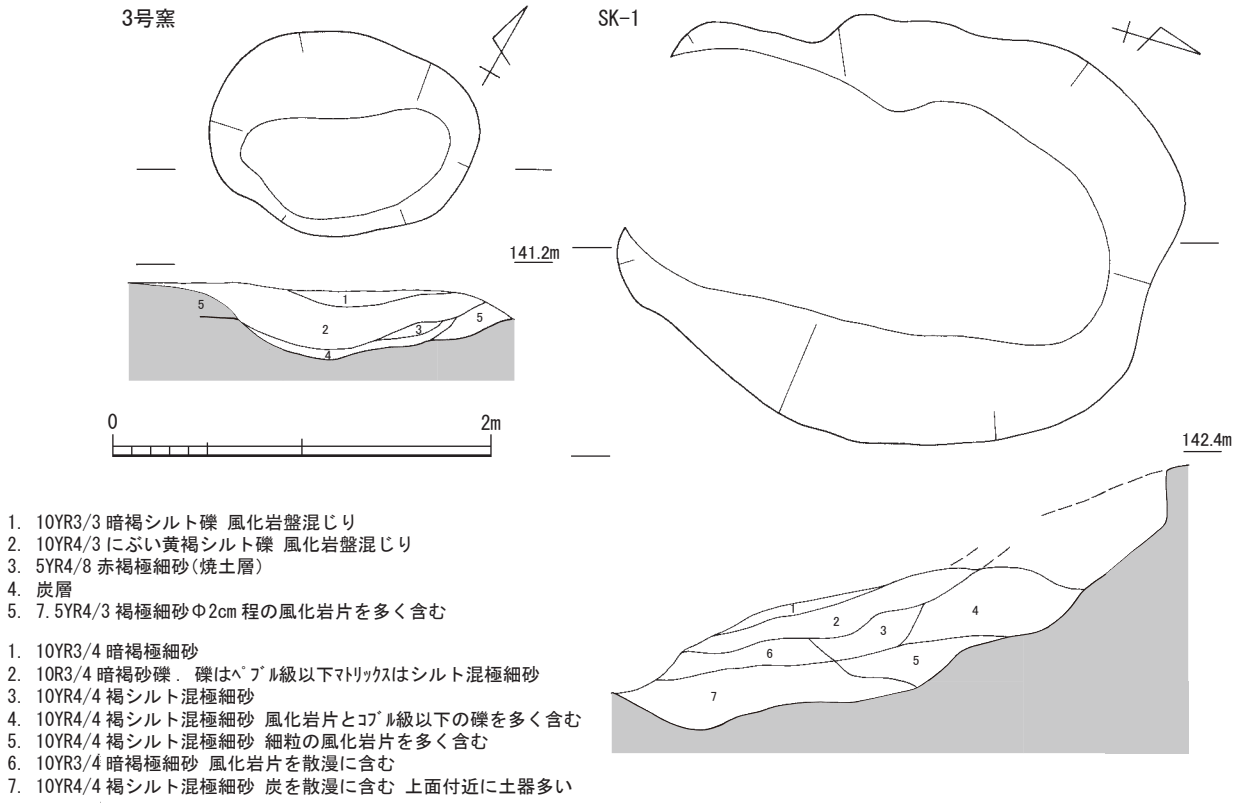
床面からは土師器皿・杯など計３点が出土したほか、焚口部において、土師器の細片と焼土が、直径30cmほどの範囲にまとまって検出された。また、床面とその上位の埋土中において、土師器杯、上部構造から落下したと思われる礫等が出土した。

前庭部は1号窯跡同様狭く、その下方は急斜度の斜面となっている。前庭部における断面観察によれば、一部に間層を挟みつつ、３層に区分される炭・灰層が認められた（第35図３・５・７層）。従って、２号窯においては、少なくとも３回の焼成が行われたものと推定される。ただし、急な斜面である



1. 10YR3/3 暗褐シルト混砂礫，礫はペブル級(土石流下底か)
2. 7.5YR4/3 褐シルト混極細砂 炭，土器混じり
3. 7.5YR4/4 褐シルト混極細砂 炭，焼土片多く含む(炭層 3)
4. 10YR4/4 褐シルト混極細砂 風化岩片含む 炭なし(間層 2)
5. 7.5YR4/3 褐シルト混極細砂 炭，焼土片多く含む(炭層 2)
6. 10YR4/4 褐シルト混極細砂 炭なし（間層 1)
7. 7.5YR4/3 褐シルト混極細砂 炭極多（炭層 1)
8. 7.5YR4/3 褐シルト混極細砂 炭なし
9. 10YR4/4 褐極細砂 風化岩多く含む
10. 9 とほぼ同一
11. 10YR4/4 褐色シルト混極細砂
12. 10YR4/4 褐色シルト混極細砂 窯体片を含む
13. 地山

第35図　２号窯跡平面・断面図



第36図　3号窯跡・土坑1

ため、流出が激しかったためか、炭層の遺存範囲は前庭部周辺に限られている。

（３）３号窯跡

１・２号窯跡とは異なり、窯体構造を持たない焼成土坑であったと考えられる。斜面部の地表を長径1.4m、短径1.1m、深さ36cmの不整楕円形に掘り下げている。土坑の縁辺部は熱を受けて赤褐色に変色し、その上位には厚さ数cmの、土壌をほとんど含まない炭層が観察されたほか、炭層上位にも焼土層が認められた。なお、焼土層より上位は、自然埋没したものと考えられる。

（４）土坑（SK-1）（第36図）

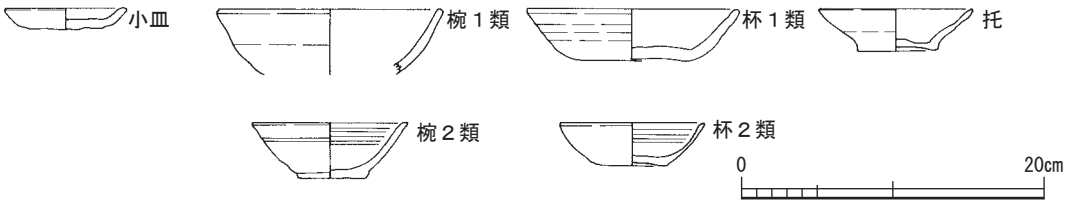
１・２号窯跡の間に位置する楕円形の大型土坑で、長軸を斜面方向にもつため、斜面上位側では深い掘方をもつが、斜面下位側ではほとんど深さがなくなっている。土坑底面は比較的平坦である。

土坑内は自然埋没したと考えられるが、最下層は、炭化物を散漫に含むシルト混じりの極細砂で、この上面付近から、多数の土師器類が出土している。こうしたことから、土坑１については、窯の操業に関係する機能を有していたものと推定される。

第３節．遺物

【器種分類】

寺地窯跡群で製作された土師器は、小型器種である椀・皿類にほぼ限定されている。いずれの器種も、回転（ロクロ）によって成形され、底部は回転糸切となっている。こうした技術的特徴は、「回転



第37図　寺地窯跡群における土師器の分類

台土師器」と呼称されている土師器の一群と合致するものである。

本報告書を作成するにあたり、器種については下記のように分類した。各器種は、形態上の特徴により、さらに細分することができるが、数量的な背景が十分ではないため、本稿では細分はおこなわない。

寺地遺跡・窯跡群出土の椀皿類の計測値を散布図に表すと、明瞭にA～Dの４群に分かれる（第38図）。各群内の遺物を詳細に検討すると、以下のとおりとなる。

Ａ群：口径が13～14cmで、器高が5.5cmを超える。径高比は２：１～３：１を示す。底部は平底あるいは僅かな平高台状をなし、底部と口縁部の境界は丸みをもつ。口縁部の立ち上がりは、緩やかな膨らみをもつ。

Ｂ群：口径が14～16cmで、器高が３～4.5cmにおさまり、径高比は3.5：１～４：１の間を示す。底部は平底をなし、底部から口縁部への立ち上がりは、概ね直線的である。

Ｃ群：口径が10cm前後、器高が３cm前後～４cm未満を示し、径高比が2.5：１～3:1となる。底部は平高台のものと平底のものとがある。口縁部は膨らみをもちつつ立ち上がるもの、直線的に立ち上がるもの、底部から強く外反し、その後直線的に開くものなど、多様な形態を示す。

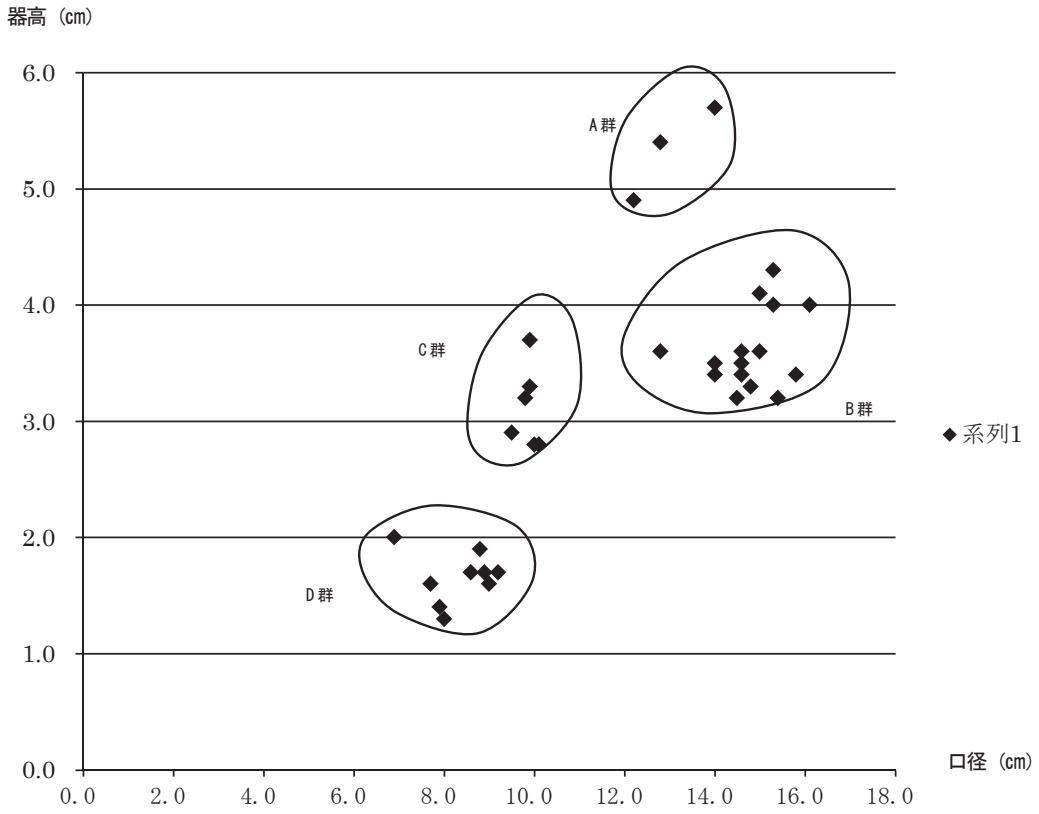
Ｄ群：口径が大略７～９cmで、器高が２cm以下におさまり、径高比は概ね4.5：1～6：1の間を示す。口縁部と底部の境界は丸みをもつ。口縁部の形態は、直線的に立ち上がるもの、膨らみをもって立ち上がるものなどが認められる。

これらのうち、Ａ・Ｂ・Ｄの各群に属する土器は、各群内での形態の類似性から１群を１器種と判断することができるので、一般的な土師器の分類名に従い、Ａ群を椀、Ｂ群を杯、Ｄ群を小皿と呼称する。

Ｃ群の土器については、含まれる形態が多様であり、それらが椀・杯との共通性を有するものに分離できることから、椀および杯のうち、小型のグループがこの群に含まれるものと判断される。また、平底から垂直に近い角度で立ち上がり、そこから強く屈折して開く特徴的な口縁部を有する資料については、托と呼ばれる器種に相当するだろう。

以上の内容を総括して、以下では、下記のとおり器種を設定する。椀・杯・小皿は、平底となるａ類と、平高台をもつｂ類に細分される。

椀　　１類　大型の椀　径高比はＡ群に属する　２類　小型の椀　径高比はＣ群に属する
杯　　１類　大型の杯　径高比はＢ群に属する　２類　小型の杯　径高比はＣ群に属する
小皿　　径高比はＤ群に属する



第38図　寺地窯跡群出土土師器の径高比分布

托

（１）１号窯跡出土の遺物

１号窯跡からは、土師器小皿、杯が出土した。いずれも前庭部からの出土であり、窯体内からの出土遺物で図示できるものはない。

185～188は前庭部より出土した。185～187は小皿、188は口縁部を失っているが、底部の形態からみると杯の可能性がある。

小皿は、口縁部がやや外方に伸びてそのまま終わるもの（185・186）と、端部が上向きに終わるもの（187）とが見られる。

188は厚みのある底部で、低い平高台状を呈する。やや外反する立ち上がりを見せていることから、杯の可能性が高い。

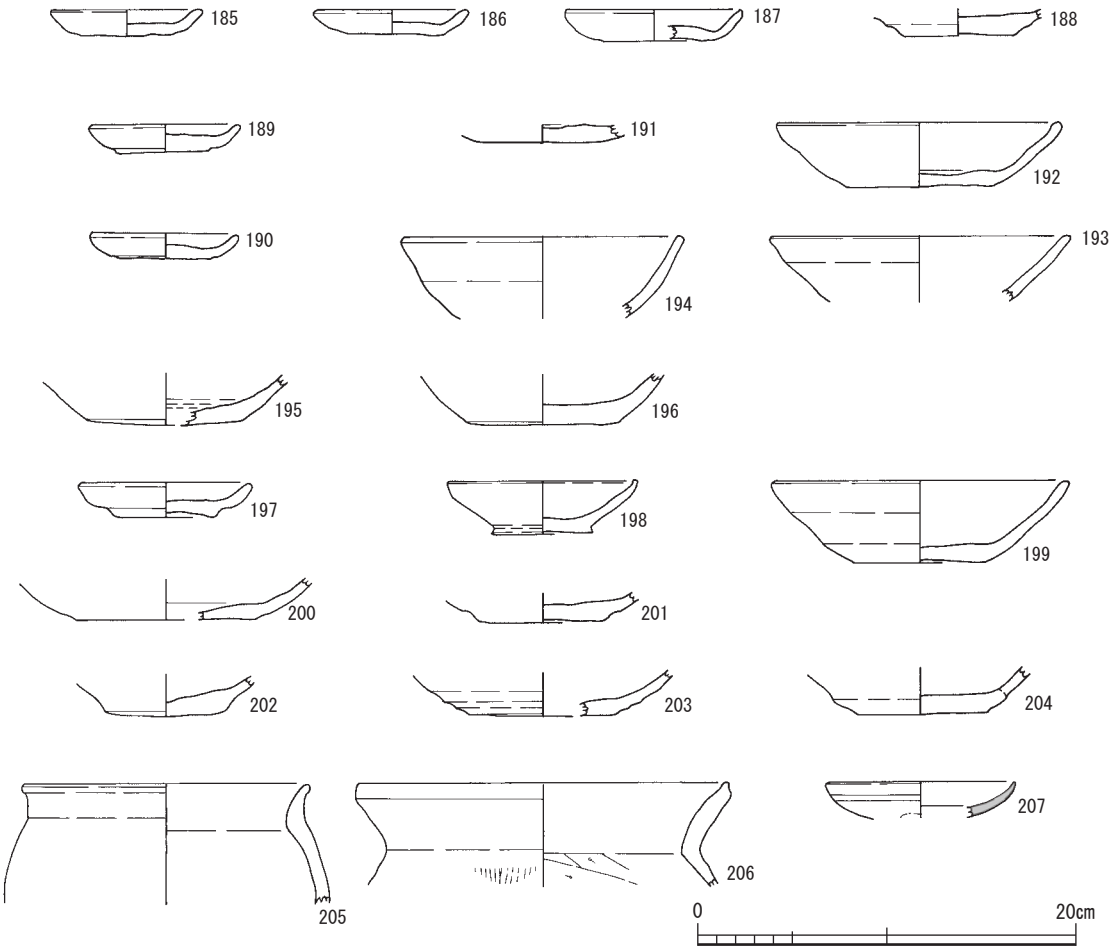
（２）２号窯跡出土の遺物

２号窯跡では、土師器小皿、杯、椀、甕が出土した。

189・191・192は、窯体内から出土した。

189は、窯体内の床面から出土した小皿である。底部は僅かに平高台状を呈するが、これは切り離し位置のぶれによって生じたもので、意図的なものとは考えがたい。

192は、窯体内の埋土中位から出土した杯である。平底から、ほぼ直線的に伸びる口縁部を見せる。底部は回転糸切り後に仕上げナデが施されている。



第39図　１・２号窯跡出土の遺物

191は、窯体内の床面から出土した資料で、底部の形態からは杯と考えられる。

190・193～203は前庭部から出土した。

190は炭層１から出土した小皿である。平底から、内湾気味に立ち上がる口縁部を見せる。内面に、底部粘土板と口縁部との粘土紐の継目が見られる。

193は焚口部～前庭部の炭層１から出土した杯である。外面下半は斜め方向のナデが施される。

194は焚口部～前庭部の炭層１から出土した椀である。

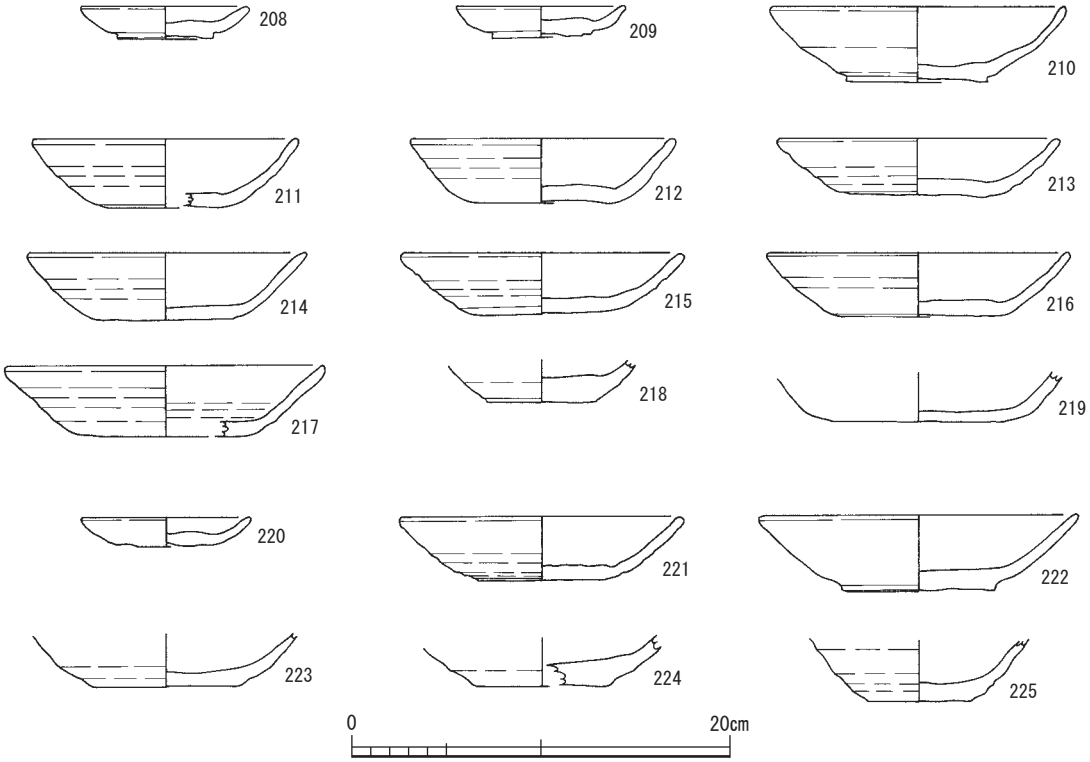
195は焚口部～前庭部の炭層１から出土した資料で、口縁部の立ち上がりの角度から、杯と判断される。

197は前庭部２区より出土した、小皿である。底部は低い平高台状をなし、口縁部は内湾気味に立ち上がる。

198は２類の椀である。底部は低い平高台をなし、口縁部が直線的に開いて立ち上がるが、端部付近でわずかに上方へ屈曲する。口縁端部内面には、弱い沈線が見られる。焼成は堅緻である。

199は杯である。平底から、直線的に開いて立ち上がる口縁部を見せる。

200～204は口縁部を欠く資料である。杯ないし椀の底部であるが、いずれに属するかは断定し難い。ただし、立ち上がりが相対的に急斜度となる202～204などは、椀の可能性があろう。



第40図　土坑1および窯跡群下方斜面出土の遺物

205は甕である。膨らみの小さい体部から、弱く外反する短い口縁部を見せる。口縁端部はわずかに外方へ膨らむ。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ、外面は工具によると思われるナデ調整が施される。

206は甕である。口縁部内外面は強いヨコナデが施され、端部はわずかに上方へつまみ上げられて、外面にはほぼ直立する面をもつ。体部外面は縦方向のハケ目、内面は横～斜め方向のヘラケズリが施される。

207は白磁の皿である。なめらかに内湾しつつ立ち上がる口縁部を見せる。外底面は露胎となる。

（３）　３号窯跡出土の遺物

３号窯跡では、図示可能な遺物は出土していないが、皿ないしは杯と思われる口縁部を含む、土師器の細片が出土している。

（４）　土坑１

土坑１では、小皿、杯が出土した（208～219）。

208・209は、いずれも、底部が低い平高台状を呈するｂ類の小皿である。いずれの口縁部も直線的に開くが、２では口縁端部直下の外面が回転ナデによって外反気味に仕上げられているため、口縁部が途中で屈曲するような外観となっている。いずれも、見込み部には、一定方向の仕上げナデが施される。

210～217は1類の杯である。底部は、210が低い平高台をなす１ｂ類である他は、いずれも平底の１ａ類で、底部と口縁部の境界はまるみをおびる。口縁部の立ち上がりは、217がやや外反気味である他

は、ほぼ直線的か内湾気味である。

218は底部のみであるため、確定的に判断し難いが、底径が小さく立ち上がりがやや急斜度となるため椀の可能性がある。底部は低い平高台状を呈する。

219は、平底からまるみをもって口縁部が立ち上がるため、杯と考えられる。

（５）　窯跡群下方斜面出土の遺物

寺地窯跡群では、灰原の明確な広がりは認められなかったが、窯跡群の下方斜面に堆積した地層からは、窯跡群に関連すると考えられる遺物が多数出土している。ここでは、特に調査時点で「窯跡群下方」の遺物として取り上げた資料の中から、窯で焼成されたと判断できる資料について抽出して記載しておく。その他の資料については、前章の「包含層出土の遺物」の項で記載している。

220は１類の小皿である。平底から直線的に開く口縁部を見せる。底部と口縁部の境界はまるみをおびる。

221は１ａ類の杯である。平底から直線的に開く口縁部を見せる。底部と口縁部の境界はまるみをおびる。底部粘土板と口縁部粘土紐の接合部が認められる。

222は１ｂ類の杯である。低い平高台状の底部から、直線的に開く口縁部を見せ。

223～225は底部であるが、立ち上がりが急斜度となる225は椀、223・224は杯であろう。

第４節．小結

寺地窯跡群で出土した土師器類は、基本的に須恵器製作技術を転用して製作されている。その基本となるロクロ整形、回転糸切などの技術は、東播磨系中世須恵器で用いられ、中世須恵器生産の広がりとともに、拡散したとされている（森内秀造　2007）。寺地窯跡群の近隣でも、相地地蔵谷窯跡、相地末釜窯跡など、12世紀前後の須恵器を出土する窯跡の存在が知られており、寺地窯跡群についても、これらの須恵器窯とのかかわりの中で成立したのであろう。寺地窯跡群で生産されたのは、土師器の椀・杯・小皿・托の４器種に限定されている。窯の規模からみても、１回の生産量はわずかなものであったろう。このような窯の状況からは、ごく限定された地域的需要に対応した小規模生産の姿が想起される。

引用・参考文献
森隆　1997「第８節　中世土師器・瓦器の焼成窯」『古代の土師器生産と焼成遺構』　窯跡研究会編
兵庫県教育委員会　2002　『勝手野古墳群』
松岡千寿　2002「勝手野窯跡群の操業時期及び窯の構造」『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会　2007　『平松八幡神社窯跡群　平松古墳群　石才大池遺跡』
森内秀造　2007「平松八幡神社窯跡群」『平松八幡神社窯跡群　平松古墳群　石才大池遺跡』兵庫県教育委員会

第6章　結　　語

第1節．寺地古墳

当墳は6世紀後葉に築かれた円墳である。主体部は竪穴系横口式石室で単独埋葬と考えられる。寺地遺跡の包含層中には当墳以外にも古墳が存在した可能性を示唆する遺物があり、単独墳ではない可能性もあるが、現状では判断を保留しておきたい。副葬品は須恵器と土師器のほか、耳環、鉄製武器（鉄刀・鉄鏃）、刀子があり、農具・馬具は持たない。須恵器に占める高杯の多さが特徴的である。

但馬地方ではこれまでも竪穴系横口式石室を採用した古墳が報告されているので、それらと比較して寺地古墳の状況を確認したい。

現時点で一番古いものとされるのはTK47型式併行に位置づけられた米里7号墳であるが、残存状況が悪く、埋葬の状況については不明な点が多い。続くMT15型式並行期、TK10型式並行期には竪穴系横口式石室を採用した古墳が増え、代表的なものとして大師山5号墳、観音塚古墳、見蔵岡1号墳、宿南びくに古墳などが出現し、追葬が認められるものが多い。なかでも見蔵岡1号墳、宿南びくに古墳では蓋杯が土器枕として利用され、鉄釘も出土していないことから、遺体を安置するにあたり木棺を使用していない可能性が指摘されている（谷本1993）。当墳では出土状況から見て蓋杯が土器枕として使用された可能性は低いが、鉄釘が出土していない点では共通しており、組み合わせ式木棺の使用あるいは礫床上に直接遺体を安置した可能性が考えられる。

石室の構造から見ると天井の高さが不明であるが、奥壁に鏡石を使用していること、側壁の一部に石材の長辺を利用していることから、一般的な横穴式石室の構築方法に影響を受けている可能性がある。

出土している鉄器は馬具・農具などを持たず、武器の数も少ないなど、組成・数量とも傑出した内容ではない。さらに鉄刀の全長が70㎝に満たない点からも被葬者の階層はそれほど高くないと思われる。

それと対照的なのが、副葬された土器の様相である。25点のうち、24点までが飲食器で、約1/3を脚付器種である有蓋高杯が占めており、壺・甕などが欠けているが、その代わりを土師器壺がつとめている可能性があり、その点では階層性の高さ（寺前2005）を示すようにも思える。

また、当墳が築かれた時期は大型横穴式石室を持つ大藪古墳群の造営が始まっており、竪穴系横口式石室と横穴式石室が地域内で併行して採用されている。このことからも竪穴系横口式石室は横穴式石室の導入に先立つ折衷的な型式ではなく、別系統の葬制であると考えられる（潮崎1995）。

以上のことを総合して、当墳の被葬者は大藪古墳群に代表される中央の墓制を取り入れた有力豪族と群集墳の造営母体となる有力家族層の中間に位置し、畿内的要素と在地的要素の双方をと入れることが可能な人物であったと考えられる。

第2節．寺地遺跡

調査区の幅がごく狭いものであったことから、今回の調査では、寺地遺跡の構造・規模などの情報を得ることができなかった。出土した遺物を見ると、古墳時代中期～後期、飛鳥時代～奈良時代、鎌倉時代という広い時期にわたっており、特に古墳時代中期以降、奈良時代にかけて、長期間にわたって集落が営まれた可能性が想起される。その中でも、遺物量が最大を示すのは、奈良時代である。

建物跡などが復元できなかったため、遺跡の性格についても不明であるが、土師器甕・竈など、日常的な煮沸具が多数出土している点からは、通常の集落遺跡という印象を受ける。ただし、祭祀遺物（土

馬）が出土していることを考慮すると、単純に一般的な集落と断ずることも躊躇される。

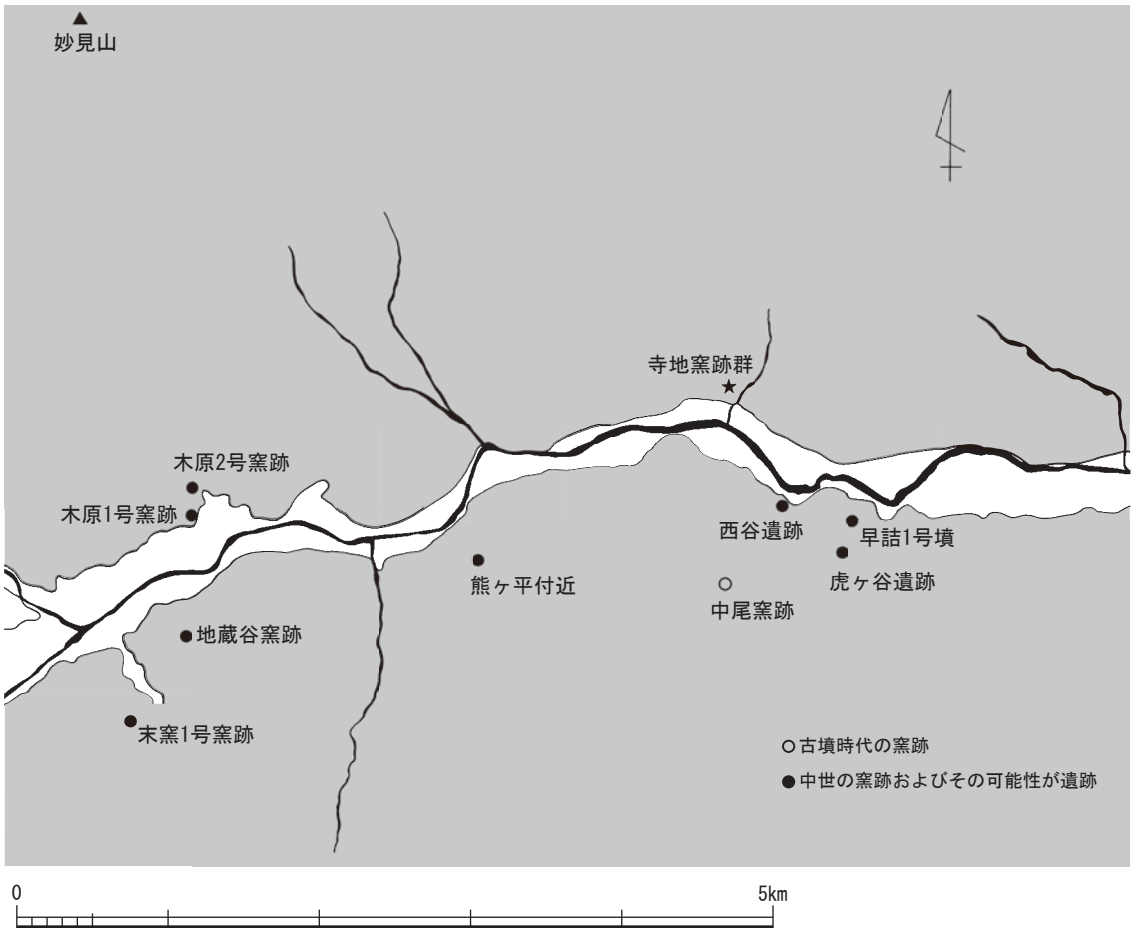
寺地遺跡の所在する大谷地区の東は「三宅」の大字名が残っている。こうしたことから、八木川中流域には、奈良時代を前後する時期に有力な集落が成立していたものと推察される。想像をたくましくするならば、今回、寺地遺跡で検出された遺構・遺物も、こうした「ミヤケ」との関わりの中で成立した可能性も考慮できよう。

第３節．寺地窯跡群

寺地窯跡群は、煙管式の土師器窯跡のみで構成されている。播磨～丹波地域では、煙管式窯跡は須恵器窯跡に付随して存在する例が多く見られ、須恵器の編年観に従って、土師器窯跡の時期も推定されている。寺地窯跡群出土の土師器に見られる形態および製作技術上の特徴は、播磨～丹波地域の須恵器窯跡に付随する煙管式窯跡の資料と同様のものであり、須恵器の製作技術を転用した、回転台土師器に属することは明らかである。

八木川の流域では、寺地窯跡群を含め、これまでに10か所の窯跡およびその可能性が指摘される遺跡が知られている（第41図）。そのうち発掘調査が行われたのは寺地窯跡群のみで、その他は分布調査によって遺物が採集されてはいるが、窯体については明らかにされていない。これらのうち、三宅中尾窯跡を除く９か所は、採集遺物からみて11～12世紀代に属するものと考えられる。

上述の遺跡のうち、土師器窯跡の可能性がある場所として5地点が挙げられている（高松龍暉



第41図　八木川中流～上流域の須恵器・土師器窯跡（高松　1982より作成）

1982）。

高松氏によれば、これらの地点のうち、三宅早詰１号墳の南側（原著では６号墳とされているが、その後古墳の名称が変更された）では、「回転糸切り文の底部が多数出土する」、その他の地点についても「土師器が多量に出土する」とされている。これらの地点では、窯体や明瞭な灰原は見いだされていないが、小規模な煙管式窯跡では、窯跡の規模そのものが小さいため地表面の観察で窯体を識別できる可能性はほとんどないし、須恵器窯跡に見るような大規模な灰原は形成されないため、分布調査だけで窯跡であることを確定することはほとんど不可能である。煙管式窯跡の中には、古墳の墳丘を利用して築造された例（井守徳男ほか　2002）もあり、三宅早詰１号墳の事例もその一つになるのかもしれない。

これらの土師器窯跡（その可能性があるものを含む）は、東播磨系中世須恵器生産の但馬地域への拡大という背景の中で、12世紀前後に成立したものであろう。

引用・参考文献

高松龍暉　1982　「関宮町における須恵器窯跡」『考古学から見た関宮町』その四
豊岡市教育委員会　1983　『見手山古墳群発掘調査概要－再調査の記録－』
広陵町教育委員会　1987　『史跡　牧野古墳』
八鹿町教育委員会　1987　『箕谷古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第6集
八鹿町教育委員会　1988　『八木西宮遺跡・大山田古墳』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第7集
奈良県立橿原考古学研究所　1989　『斑鳩藤ノ木古墳概報』
竹野町教育委員会　1990　『鬼神谷窯跡発掘調査報告』
関宮町教育委員会　1992　『万久里マシバ古墳群』関宮町埋蔵文化財調査報告書第6集
尾上元規　1993　「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』第40巻第１号　考古学研究会
財団法人大阪市文化財協会　1993　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
谷本　進　1993　「6世紀の墓制からみた宿南びくに古墳」『但馬考古学』第7集　但馬考古学研究会
田畑　基　1993　「後期群集墳への画期」『但馬考古学』第7集　但馬考古学研究会
奈良県立橿原考古学研究所　1993　『新庄町南藤井和田古墳群　付　二塚古墳出土の須恵器』奈良県文化財調査報告書第68集
京都大学文学部考古学研究室　1995　「山津照神社古墳の調査」・「鴨稲荷山古墳出土遺物の調査」『琵琶湖周辺の６世紀を探る』
潮崎　誠　1995　「但馬のなかの竪穴系横口式石室」『古代但馬と日本海』
豊岡市教育委員会・豊岡市立郷土資料館　1995　『森尾大内谷古墳群』
中村　弘　1995　「但馬における横穴系埋葬施設の導入」『古代但馬と日本海』
久保弘幸・池田征弘・岡本一秀　1998　『神出窯跡群』　兵庫県教育委員会
財団法人大阪市文化財協会　2000　『難波宮址の研究』第十一
井守徳男ほか　2002　『勝手野古墳群－勝手野遺跡・勝手野古墳群・勝手野窯跡群－』　兵庫県教育委員会
北見一弘　2003　「刀子小考Ⅰ」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅴ　財団法人市原市文化財センター
佐藤　隆　2003　「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築－」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号　大阪歴史博物館
水野敏典　2003　「古墳時代中期における日韓鉄鏃の一様相」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　帝京大学山梨文化財研究所
寺前直人　2005　「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
高松雅文　2006　「群集墳からみた地域支配－但馬地方の分析を中心に－（上）」『古代学研究』175　古代学研究会
佐藤　隆　2007　「6世紀における須恵器大型化の諸様相－陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その3－」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号　大阪歴史博物館
高松雅文　2007　「群集墳からみた地域支配－但馬地方の分析を中心に－（下）」『古代学研究』176　古代学研究会
森内秀造ほか　2007　『平松八幡神社窯跡群・平松古墳群・石才大池遺跡』兵庫県教育委員会

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
3	1	Tr6			土師器	甕	15.1	(4.4)			口縁部ヨコナデ／内外面一部ハケ 弱い二重口縁	確認調査
3	2				須恵器	杯蓋	14.0	4.7			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ	確認調査　杯Ｈ蓋
3	3				須恵器	杯蓋	16.6	2.9			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ ／扁平宝珠つまみ	確認調査　杯Ｂ蓋
3	4				須恵器	杯身	16.2	4.1		11.9	回転ナデ／底部回転ヘラケズリ	確認調査　杯Ｂ
3	5				須恵器	杯身	15.7	4.0		11.3	回転ナデ／底部回転ヘラケズリ／ 見込み部仕上げナデ	確認調査　杯Ｂ
10	6		石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	14.4	4.6			回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ 天井部灰かぶり	杯身１の上
10	7	1	石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	13.9	4.5			回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ	杯身２の下
10	8	1	石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	13.6	4.4			回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ	杯身３の下
10	9	1	石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	14.1	4.3			回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ	杯４の蓋
10	10				須恵器	杯蓋	15.9	4.5			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ	確認調査　杯Ｈ蓋
10	11	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	12.2	4.7	15.0		回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ	杯蓋１の下
10	12	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	12.1	4.5	14.9		回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ 底面に付着物あり	杯蓋２の上
10	13	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	11.9	4.6	14.9		回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込 み部仕上げナデ	杯蓋３の上
10	14											
10	15				須恵器	杯身	12.6	5.3	15.8		回転ナデ／底部回転ヘラケズリ／ 見込み部仕上げナデ	確認調査　杯Ｈ
11	16	1	石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	14.6	5.0			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ 天井部中央仕上げナデ 見込み部：仕上げナデ 天井部にヘラ記号	高杯３の上
11	17	1	石室床面	古墳	須恵器	杯蓋	13.5	4.2			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ 天井部中央仕上げナデ 見込み部：仕上げナデ 天井部にヘラ当たり	杯Ｈ蓋　高杯５の上

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
11	18	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	14.2	4.6			回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ／見込み部仕上げナデ・工具痕 天井部にヘラ記号（×）	杯H身　高杯６の上
11	19	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	12.1	4.8	14.9		回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込み部仕上げナデ	高杯１の上　杯H
11	20	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	13.9	4.7	15.8		回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込み部仕上げナデ	高杯２の上　杯H
11	21	1	石室床面	古墳	須恵器	杯身	11.8	6.8	15.1		回転ナデ／底部回転ヘラケズリ／見込み部仕上げナデ	杯H身　高杯７の上
11	22	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	13.7	16.8	16.1	13.2	杯部：回転ナデ／回転ヘラケズリ／見込み部仕上げナデ 脚部：回転カキメ・３方向１段すかし（長方形・未貫通）	高杯２
11	23	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	13.6	17.6	16.1	13.5	杯部：回転ナデ／見込み部仕上げナデ 脚部：回転カキメ・３方向１段すかし（長方形・一部未貫通）・脚下部に凹線文（？）１条	高杯４
11	24	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	14.2	17.2	16.9	15.1	杯部：回転ナデ・回転カキメ／見込み部仕上げナデ 脚部：回転カキメ・３方向１段すかし（長方形・一部未貫通）・脚下部に１条の段をめぐらせる	高杯３
11	25	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	13.8	17.6	16.8	13.8	杯部：回転ナデ／回転ヘラケズリ 脚部：回転ナデ・３方向１段すかし（長方形）　脚端の一部を意図的に打ち欠きか（欠損状態で直立するようになっている）	高杯１
11	26	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	13.1	16.6	15.6	13.2	杯部：回転ナデ・回転ヘラケズリ 脚部：回転カキメ・３方向１段すかし（長方形）・脚下部に凹線文３条	高杯６
11	27	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	13.3	16.4	16.2	13.8	杯部：回転ナデ・回転カキメ 見込み部：仕上げナデ 脚部：回転カキメ・３方向２段すかし（上段＝長方形　下段＝台形）・すかし上下段の間に凹線文２条	高杯５

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
11	28	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	14.0	17.5		14.0	杯部：回転ナデ・回転ヘラケズリ 見込み部：仕上げナデ 脚部：回転カキメ ３方向２段すかし（上段＝長方形　下段＝台形）	高杯８
11	29	1	石室床面	古墳	須恵器	高杯	14.0	17.9		14.1	杯部：回転ナデ・回転ヘラケズリ 脚部:回転カキメ・櫛描波状文（４段） ３方向２段すかし（上段＝長方形　下段＝三角形　上段と下段のすかしは位置がずれる）	高杯７
11	30	1	石室床面	古墳	土師器	平瓶	8.4	13.0	12.4		体部外面下半：粗いヘラミガキ 体部外面上半：タテハケ 口縁部外面～体部内面:ヨコナデ・ナデ　内面：ユビオサエ	
17	31	1	最下段包含層		須恵器	杯Ｈ蓋	12.9	(4.4)			内外面回転ナデ／天井部回転ヘラケズリ	
17	32	1	最下段包含層		須恵器	杯Ｈ蓋	14.8	4.8			口縁部および内面回転ナデ・天井部回転ヘラケズリ	
17	33	1	整地層		須恵器	杯Ｈ蓋	13.8	3.5			天井部回転ヘラケズリ・内外面回転ナデ・内面仕上げナデ	
17	34	1	整地層		須恵器	杯Ｈ蓋	12.8	3.2			天井部回転ヘラケズリ・内外面回転ナデ・内面仕上げナデ	天井部にヘラ記号　「－」
17	35	1	２・３号窯下方斜面包含層		須恵器	杯Ｈ身	12.8	3.5			内外面回転ナデ・見込み部仕上げナデ・底部回転ヘラケズリ	
17	36	1	斜面部包含層		須恵器	杯Ｈ身	15.5	(2.4)			内外面回転ナデ	
17	37	1	平地部包含層上部		須恵器	高杯	10.2	9.6		9.6	杯部内外面回転ナデ　杯部外面回転ヘラケズリ	短脚１段透かし高杯
17	38	1	包含層		須恵器	高杯	13.8	10.8		12.0	回転ナデ	
17	39	1	包含層		須恵器	高杯	15.3	12.5		13.3	回転ナデ・杯部下面回転ヘラケズリ	
17	40	1	平地部サブトレ		須恵器	高杯	13.0	(4.0)			回転ナデ	
17	41	1	斜面下方平地部包含層		須恵器	高杯		(9.1)		11.5	内外面回転ナデ　円盤充填	
18	42	1	平坦面包含層		土師器	皿Ｃ	9.9	3.3		7.6	内外面回転ナデ	
18	43	1	斜面部包含層		土師器	杯身	12.8	3.6			口縁部ヨコナデ　内外面ナデ	外面に黒斑

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
18	44	1	斜面下方包含層		土師器	高杯	13.7	(4.9)			内外面回転ナデ	
18	45	1	斜面下包含層		土師器	杯	14.3	4.6		10.0	内外面回転ナデ／底部ナデ／全体に赤色の化粧土を塗布	
18	46	1	斜面下方平地部包含層		土師器	壷	16.0	(5.6)			内外面ヨコナデ	
18	47	1	平地部包含層上部		土師器	椀Ｃ	14.9	(3.0)			内外面ヨコナデ	
18	48	1	斜面部包含層		須恵器	杯蓋	11.8	(1.4)			内外面回転ナデ　天井部回転ヘラケズリ	
18	49	1	整地層		須恵器	杯Ｂ蓋	13.9	(1.9)			内外面回転ナデ	
18	50	1	斜面部包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	14.1	(1.3)			内外面回転ナデ	
18	51	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｈ蓋	10.5	6.3			内外面回転ナデ／底部ヘラ切り無調整	
18	52	1	斜面下包含層		須恵器	杯	10.7	(4.2)		(7.0)	内外面回転ナデ／底部回転ヘラケズリ	
18	53	1	斜面部包含層		須恵器	杯	10.0	3.4			内外面回転ナデ　底部ヘラ切り無調整	
18	54	1	斜面下包含層		須恵器	杯身	9.9	3.8		8.1	内外面回転ナデ／底部ヘラ切り後ナデ	
18	55	1	斜面部包含層		須恵器	杯	11.0	(3.6)			内外面回転ナデ	
18	56	1	斜面下方包含層		須恵器	杯身	11.8	2.5			内外面回転ナデ・底部回転ヘラ切り無調整	
18	57	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ａ	12.7	3.0		8.7	内外面回転ナデ　底部回転ヘラ切り無調整	底部に自然釉
18	58	1	平坦部包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	16.0	3.4			内外面回転ナデ・天井部内面仕上げナデ	
18	59	1	平坦部包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	17.2	2.8			内外面回転ナデ・天井部内面仕上げナデ	
18	60	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	14.5	(2.2)			内外面回転ナデ・天井部回転ヘラケズリ	
18	61	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	16.1	(2.2)			内外面回転ナデ	
18	62	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	15.4	(2.1)			内外面回転ナデ	天井部に薄く灰釉
18	63	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	14.6	2.0			内外面回転ナデ	扁平な宝珠つまみ
18	64	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	15.9	(1.8)			内外面回転ナデ	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
18	65	1	最下段包含層		須恵器	蓋		(1.2)			内外面回転ナデ	扁平な宝珠つまみ
18	66	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ蓋		(1.5)			内外面回転ナデ　扁平宝珠つまみ	
18	67	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｂ身	14.4	4.4		10.0	内外面回転ナデ／底部回転ナデ	
18	68	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ身	14.6	4.4		10.4	内外面回転ナデ　底部外面回転ヘラケズリ	
18	69	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ身	15.2	4.5		11.2	内外面回転ナデ　見込み部仕上げナデ　底部回転ヘラケズリ	
18	70	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｂ身	15.9	4.3		11.3	内外面回転ナデ／底部回転ヘラケズリ	
18	71	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ	16.2	4.0			内外面回転ナデ・見込み部仕上げナデ・底部回転ヘラケズリ	
18	72	1	斜面下方包含層		須恵器	杯Ｂ身	15.5	5.0		11.9	内外面回転ナデ　見込み部仕上げナデ　底部回転ヘラケズリ	底部に「十」のヘラ記号　墨痕あり
18	73	1	斜面部包含層		須恵器	杯		(1.6)		7.2	内外面回転ナデ・底部ヘラ切り無調整	
18	74	1	斜面下包含層		須恵器	杯Ｂ身		(3.4)		14.3	内外面回転ナデ／見込み部仕上げナデ／底部回転ヘラケズリ	
18	75	1	斜面下方包含層		須恵器	杯身	15.7	(4.5)			内外面回転ナデ	
18	76	1	斜面下包含層		須恵器	鉢	23.5	(3.7)			内外面回転ナデ／外面縦方向ハケ目またはカキ目	
19	77	1	2号墳下方斜面包含層		須恵器	小型甕	9.8	(4.1)	10.6		内外面回転ナデ	
19	78	1	最下段包含層		須恵器	短頸壷	7.7	(10.4)	14.0		内外面回転ナデ／底部回転ヘラケズリ／肩部に凹線１条	
19	79	1	斜面下方平地部包含層		須恵器	瓶		(13.7)	10.5		体部上半～口縁部内外面回転ナデ底部回転ヘラケズリ	底部～体部外面に灰かぶり
19	80	1			須恵器	長頸壷	8.5	25.4	16.5	9.1	内外面回転ナデ／頸部外面凹線２条／肩部凹線３条および凹線間に刺突列点文	
19	81	1	礫混じり層	１号窯直下	陶器	壷		(8.6)	19.4	11.2	回転ナデ　外面無釉　貼付高台	
19	82	1	窯跡群下方斜面包含層		須恵器	長頸壷	10.7	(13.3)			内外面回転ナデ／凹線１条	
19	83	1	2・3号窯跡下方斜面包含層		須恵器	甕	12.5	(7.1)			口縁部内外面回転ナデ／体部外面平行タタキ後縦方向カキ目／体部内面同心円タタキ	頸部外面に鋸歯状のヘラ記号

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
19	84	1	包含層	１号窯下方斜面	須恵器	甕	19.0	(10.0)			外面：平行タタキ後カキメ／ナデ 内面：同心円タタキ 口縁部：回転ナデ	
19	85	1	最下段包含層		須恵器	甕	45.8	(10.4)			口縁部内外面回転ナデ・体部内面同心円タタキ	
20	86	1	最下段包含層		土師器	甕	10.0	(8.6)	13.2		口縁部内外面ヨコナデ／体部外面斜め方向ヘラミガキ／体部内面ナデ	
20	87	1	斜面下平坦部包含層		土師器	高杯		(11.4)			脚部外面ヨコナデ／脚部内面ヘラケズリ	
20	88	1	平坦面包含層		土師器	甕	16.3	(4.6)			口縁部内外面ヨコナデ	
20	89	1	平坦部包含層		土師器	甕	20.0	(6.6)			口縁部ヨコナデ・体部外面横方向板ナデ・体部内面横方向ヘラケズリ	
20	90	1	斜面下方平地部包含層		土師器	甕	15.8	(11.5)	25.5		口縁部内外面ヨコナデ・体部外面不定方向板ナデ・体部内面縦方向ヘラケズリ	二重口縁
20	91	1	平地部包含層上部		土師器	甕	16.0	(15.2)			口縁部内外面ヨコナデ・体部外面ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
20	92	1	最下段包含層		土師器	甕	14.1	15.6	16.7		口縁部ヨコナデ・体部外面不定方向のハケ目・体部内面下部横方向ヘラケズリ	底面は受熱により黒化
20	93	1	斜面下方平地部包含層		土師器	甕	18.8	(21.7)	25.3		口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半縦方向ハケ目・体部外面下半不定方向ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
20	94	1	最下段包含層		土師器	甕	15.4	(11.0)	23.0		口縁部ヨコナデ・体部外面横ハケ目・体部内面上部横ハケ目、下部横方向ヘラケズリ	
20	95	1	斜面下方平地部包含層		土師器	甕	21.8	(14.2)	28.2		口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半縦方向ハケ目・体部外面下半斜め方向ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
20	96	1	最下段包含層		土師器	甕	17.7	(8.1)			口縁部ヨコナデ・体部外面縦ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
20	97	1	包含層		土師器	甕	16.6	(4.2)			口縁部ヨコナデ･体部外面ハケ目･内面横方向ヘラケズリ	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
21	98	1	最下段包含層		土師器	甕	13.2	(13.5)	15.2		口縁部ヨコナデ・体部外面不定方向のハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
21	99	1	最下段包含層		土師器	甕	12.4	(10.6)	15.6		口縁部ヨコナデ・体部外面縦ハケ目・体部内面ユビオサエ	
21	100	1	斜面下包含層		土師器	甕	19.0	(10.9)			口縁部内外面ヨコナデ／体部外面縦方向ハケ目／体部内面横方向ヘラケズリ	
21	101	1	最下段包含層		土師器	甕	20.0	(9.9)			口縁部ヨコナデ・体部外面縦ハケ目・体部内面縦方向ヘラケズリ	
21	102	1	斜面部包含層		土師器	甕	21.7	(6.5)			口縁部ヨコナデ　口縁部下半～体部外面縦ハケ　口縁部内面横ハケ体部内面ヘラケズリ	
21	103	1	斜面下段部包含層		土師器	甕	18.0	(7.0)			口縁部内外面ヨコナデ／体部外面斜め方向ハケ目／体部内面横方向ヘラケズリ	
21	104	1	斜面下方平地部包含層		土師器	甕	17.7	(12.6)			口縁部内外目ヨコナデ　体部外面多方向のハケ　内面横ハケ	
21	105	1	最下段包含層		土師器	甕	18.8	(6.6)			口縁部ヨコナデ・口縁下部～体部外面縦ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
21	106	1	斜面下方平地部包含層		土師器	甕	19.8	(5.1)			口縁部内外ヨコナデ　体部内面横方向ヘラケズリ	
21	107	1	最下段包含層		土師器	甕	19.0	(8.8)			口縁部内外面ヨコナデ／口縁部内面ハケ目／体部外面ヨコナデと横方向ハケ目／体部内面横方向ハケ目	
21	108	1	最下段包含層		土師器	甕	20.8	(7.4)			口縁部ヨコナデ・口縁下部縦ハケ目・体部外面横ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	口縁端部外面に沈線１条
21	109	1	斜面下方包含層		土師器	甕	15.6	(3.0)			口縁部ヨコナデ・口縁内面横ハケ目・体部外面縦ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	
21	110	1	平坦面包含層		土師器	甕	13.7	(5.5)	13.0		口縁部ヨコナデ・頸部縦方向ハケ目(粗)・体部外面斜め～横ハケ目・口縁部内面横ハケ目・体部内面横方向ヘラケズリ	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
21	111	1	斜面下方包含層		土師器	甕	21.2	(10.1)	20.5		口縁部内外面ヨコナデ　体部外面ハケ（？）　内面横方向ヘラケズリ	口縁端部外側に凹面をもつ
21	112	1	斜面下方包含層		土師器	甕	26.9	(7.8)			口縁部ヨコナデ　口縁部内面　横ハケ　体部外面縦ハケ　内面横方向ヘラケズリ	口縁端部をつまみ上げる
22	113	1	包含層		土師器	竈（庇部）					表裏ともにハケ目調整	
22	114	1	斜面部包含層		土師器	竈		(7.5)			外面全体にナデ	
22	115	1	斜面下方包含層		土師器	竈		(13.7)			内面　縦方向ケズリ　外面縦ハケ	庇の貼り付け痕
22	116	1	斜面部包含層		土師器	竈		(11.4)		38.0	外面縦方向ハケ目・内面ユビオサエ・ナデ	
23	117	1	平坦部包含層		土製品	土馬（頭部）	(8.0)	(7.5)	(3.5)		手づくね	
23	118	1	斜面下方包含層		土製品	土馬（脚）	(6.4)	(3.0)	(2.3)		手づくね	
23	119	1	１号窯下方斜面包含層		土製品	土馬（胴部）	(4.6)	(4.0)	(4.0)		手づくね	
24	120	1	整地層		土師器	小皿		1.2			手づくねの土師器	
24	121	1	斜面下方包含層		土師器	小皿	6.9	2.0		3.0	内外面ヨコナデ・底部ナデ	
24	122	1	平坦面包含層		土師器	小皿	9.5	2.9		4.7	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
24	123	1	平坦面包含層		土師器	小皿	9.8	3.2		4.6	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
24	124	1	斜面下方平地部包含層		土師器	椀	9.9	3.7		4.5	内外面回転ナデ・回転による細い沈線（外面２条　内面カキ目状）底部回転糸切り	
24	125	1	平坦面包含層		土師器	椀	12.2	4.9		4.9	内外面回転ナデ・底面は摩耗のため不明	
24	126	1	平坦面包含層		土師器	椀？	10.1	(2.9)			内外面回転ナデ	
24	127	1	斜面部包含層		土師器	杯	15.0	4.1		7.3	内外面回転ナデ・底部回転糸切	
24	128	1	斜面部包含層		土師器	杯	14.3	3.5		6.7	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	窯跡下
24	129	1	斜面部包含層		土師器	杯	15.0	3.6			内外面回転ナデ	
24	130	1	斜面部包含層		土師器	杯	15.4	3.2		8.3	内外面回転ナデ・底部回転ヘラ切？	
24	131	1	斜面部包含層		土師器	椀？		(2.4)		6.7	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	
24	132	1	最下段包含層		土師器	椀？		(3.0)		6.5	内外面回転ナデ・底部回転ヘラ切り	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
24	133	1	最下段包含層		土師器	椀？		(2.1)		6.5	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
24	134	1	斜面部包含層		土師器	椀		(2.2)		6.6	内外面回転ナデ・一部内面に仕上げナデ・底部回転糸切	
24	135	1	平坦面包含層		土師器	小皿	10.1	2.8		5.3	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
24	136	1	最下段包含層		土師器	椀		(2.1)		5.9	内外面回転ナデ・底部回転糸切り見込み部が一段凹む	托か
24	137	1	包含層		土師器	椀		(2.2)		6.5	内面仕上げナデ・外面回転ナデ・底部回転糸切	
24	138	1	斜面下方包含層		土師器	柱状高台		(4.1)		5.6	底部回転糸切り	芯部に、上下方向に貫通する孔
24	139	1	斜面下方包含層		瓦質土器	椀	10.8	(5.4)			内外面ユビオサエ・ナデ	
24	140	1			土師器	鍋	33.0	(8.4)	30.6		外面：縦ハケ　頸部：指オサエ　口縁部：ヨコナデ　内面：ヘラケズリ　口縁端部を上方につまみあげ、外面に凹面を作る。	
24	141	1	最下段包含層		土師器	甕	35.7	(9.5)			口縁部ヨコナデ・体部外面縦方向ハケ目・体部内面横方向～斜め方向ヘラケズリ	
24	142	1	最下段包含層		土師器	鍋	62.0	(7.4)			口縁部内外面ヨコナデ／体部内外面横方向ハケ目	
25	143	1	包含層		瓦器	椀	14.7	(6.5)			内面縦方向ヘラミガキ　外面横方向ヘラミガキ	
25	144	1	包含層		瓦器	椀		(2.9)		7.2	内面　縦方向ヘラミガキ	
25	145	1	斜面部包含層		瓦器	椀	13.6	5.7		4.6	外面：回転ナデ・ユビオサエ 内面：回転ナデ・ヘラミガキ	須恵器ではないか？？？
25	146	1	斜面下方包含層		須恵器	鉢	26.0	(4.8)			内外面回転ナデ	
25	147	1	平地部包含層上部		須恵器	鉢	31.7	(2.9)			内外面回転ナデ・一部内面に仕上げナデ	
25	148	1	平坦部包含層		須恵器	鉢	29.4	(4.0)			内外面回転ナデ	
25	149	1	平地部包含層上部		須恵器	鉢	23.3	(3.5)			内外面回転ナデ	
25	150	1	斜面部包含層		白磁	碗		(4.0)		5.7	高台部露胎・高台外面ケズリ	
25	151	1	斜面下方平地部包含層		瓦質土器	火鉢		(16.8)			調整は不明　方形の四脚器	
25	152	1	斜面部包含層		瓦質土器	火鉢	33.8	(6.2)			内外面回転ナデ・口縁外面に印花文	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
25	153	1	斜面下方平地部包含層		陶器	壷		(10.1)		12.3	外面回転ナデ 底部回転糸切り 体部外面に凹線１条	
25	154	1	斜面下方包含層		陶器	甕		(20.7)	31.3	17.9	体部外面格子タタキ・内面同心円タタキ後ナデ消し・底部ユビオサエ	外面は二次焼成を受けて赤色化している
25	155	1			土製品	土錘	4.8	1.2				
25	156	1	平坦面包含層		土製品	土錘	4.0	1.1				
30	157	2		Ｐ２	須恵器	杯？	10.5	(2.8)			回転ナデ	
30	158	2		Ｐ３	土師器	甕	18.6	(3.9)			口縁部ヨコナデ　体部外面縦ハケ	口縁端部外面に凹線１条
30	159	2		Ｐ３	土師器	甕	27.3	(5.4)			口縁部ヨコナデ 体部外面縦ハケ 内面横ハケ	
30	160	2		Ｐ３	土師器	鍋		(12.4)	58.0		外面ヨコナデ	鍔部分の断片
30	161	2		Ｐ３	土師器	鍋		(7.0)	54.0		外面ヨコナデ	鍔部分の断片
30	162	2		Ｐ４	土師器	杯		(2.3)		10.4	体部外面ヨコナデ　内面ナデ　底部ヘラ切無調整	
30	163	2		Ｐ８	土師器	甕	17.8	(2.5)			口縁部ヨコナデ	
30	164	2		Ｐ９	須恵器	杯Ｈ身	12.7	3.9			内外面回転ナデ　底部ヘラ切り無調整 見込み部に当て具痕（同心円状の文様）	
30	165	2		Ｐ９	須恵器	高杯		(5.7)		11.8	脚部内外面回転ナデ　杯部外面回転ナデ	外面に灰かぶり
30	166	2		Ｐ１０	須恵器	壷（または瓶）	8.5	(4.8)			口縁部回転ナデ	
30	167	2		Ｐ４７	土師器	高坏	12.0	(4.3)			口縁部ヨコナデ　見込み部・底部ナデ	
30	168	2		Ｐ４７	須恵器	甕	19.5	(5.7)			口縁部回転ナデ	
30	169	2		Ｐ４９	須恵器	杯Ｂ				11.9	回転ナデ	
30	170	2		Ｐ５０	須恵器	壷		(2.2)			体部回転ナデ　底部回転ヘラ切り	
31	171	2	西部谷部包含層		土師器	椀	12.8	5.3			内外面ヨコナデ	口縁部に黒斑
31	172	2	西部谷部包含層		土師器	甕	19.5	(5.8)			内面縦方向ハケメ　口縁部ヨコナデ	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
31	173	2	西部谷部包含層		土師器	甕	21.5	(6.3)			内面横方向ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 体部外面横方向ハケメ	
31	174	2	包含層	西端谷部	土師器	竈		(14.0)		42.1	外面縦方向ハケ目・内面ユビオサエ	粘土紐の継ぎ目が顕著
31	175	2	西部谷部包含層		須恵器	杯蓋	15.0	(3.6)			天井部回転ヘラケズリ 回転ナデ　肩部段の上に凹線１条	
31	176	2	包含層		須恵器	高杯蓋		(2.8)			天井部回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	
31	177	2	西部谷部包含層		須恵器	杯身	11.4	3.9			底部ヘラ切り後仕上げナデ その他は回転ナデ	
31	178	2	包含層		須恵器	杯身		(2.2)			底部回転ヘラ切り無調整 その他は回転ナデ	
31	179	2	西端谷部包含層		須恵器	壷		(9.4)	16.9		底部静止糸切 体部内外綿回転ナデ	
31	180	2	包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	16.0	(2.1)			内外面回転ナデ	
31	181	2	包含層		須恵器	杯Ｂ蓋	15.9	(1.4)			天井部回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	
31	182	2	西部谷部包含層		須恵器	杯Ｂ身		(1.9)		12.1	内外面回転ナデ	
31	183	2	包含層		須恵器	杯Ｂ身		(2.5)		10.9	内外面回転ナデ	
31	184	2	包含層		土師器	土錘	2.8	1.5			調整痕不明	
39	185	1	下層	１号窯前庭部	土師器	皿	7.9	1.4		4.8	回転ナデ／底部回転糸切	
39	186	1	前庭部横断畦	１号窯	土師器	皿	8.0	1.3		5.1	回転ナデ	
39	187	1		１号窯前庭部東半	土師器	皿	9.2	1.7		5.4	回転ナデ／底部回転糸切	
39	188	1		１号窯前庭部東半	土師器	皿		(1.4)		5.7	回転ナデ／底部回転糸切	
39	189	1	前庭下層～窯体内	２号窯	土師器	皿	7.7	1.6		4.9	手づくね／底部回転糸切	
39	190	1	炭層1	２号窯前庭部～焚口	土師器	皿	7.7	1.3		4.9	手づくね／底部回転糸切 見込み部に墨痕	
39	191	1	前庭下層～窯体内	２号窯	土師器	椀？		(1.0)		6.6	回転ナデ／底部回転糸切	
39	192	1	中位	２号窯焼成室内	土師器	杯	14.6	3.5		7.6	回転ナデ／底部回転糸切	
39	193	1	炭層１	２号窯前庭部～焚口	土師器	杯	14.6	(4.4)			回転ナデ・ナデ	

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
39	194	1	炭層１	２号窯前庭部～焚口	土師器	杯	15.4	(3.5)			回転ナデ	
39	195	1	炭層１	２号窯前庭部～焚口	土師器	椀？		(2.7)		8.2	回転ナデ／底部回転糸切	
39	196	1	灰層２／３間	２号窯前庭部	土師器	椀		(2.7)		8.1	回転ナデ／底部回転糸切	
39	197	1		２号窯前庭部２区	土師器	皿	8.8	1.9		5.3	回転ナデ／底部回転糸切	
39	198	1		２号窯	土師器	小皿	10.0	2.8		5.4	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
39	199	1	縦断畦下半	２号窯前庭部	土師器	杯	15.3	4.3		6.8	回転ナデ／底部回転糸切	
39	200	1		２号窯前庭４区	土師器	椀		(2.1)		9.5	回転ナデ／底部回転糸切	
39	201	1		２号窯前庭４区	土師器	椀		(1.6)		6.1	回転ナデ／底部回転糸切	
39	202	1		２号窯前庭部２区	土師器	皿		(2.1)		6.3	回転ナデ	
39	203	1	縦断畦下半	２号窯前庭部	土師器	椀（皿？）		(2.4)		7.8	回転ナデ／底部回転糸切	
39	204	1		２号窯前庭４区	土師器	椀		(2.5)		7.0	回転ナデ／底部回転糸切	
39	205	1		２号窯	土師器	甕	15.0	(6.4)			口縁部ヨコナデ・体部外面板ナデ？・体部内面ナデ	
39	206	1		２号窯跡前庭部１区	土師器	甕	19.6	(5.5)			口縁部内外面ヨコナデ／体部外面縦方向ハケ目／体部内面横方向ヘラケズリ	
39	207	1	炭層	２号窯前庭部下方	磁器	皿	9.8	(1.9)			内外面施釉／底部外面は露胎	
40	208	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	皿	8.6	1.7		5.1	回転ナデ／見込み部仕上げナデ底部回転糸切後ナデ	
40	209	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	皿	8.9	1.7		5.3	回転ナデ／見込み部仕上げナデ底部回転糸切	
40	210	1		ＳＫ１	土師器	杯	15.3	4.0		7.5	回転ナデ／底部回転糸切	
40	211	1		ＳＫ１	土師器	杯	14.0	3.7		6.0	回転ナデ／底部回転糸切	
40	212	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	杯	13.7	3.4		6.9	回転ナデ／底部回転糸切	
40	213	1		ＳＫ１	土師器	杯	14.5	3.0			回転ナデ／底部回転糸切	
40	214	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	杯	14.6	3.6		7.5	回転ナデ／底部回転糸切	
40	215	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	杯	14.6	3.4		7.0	回転ナデ／底部回転糸切後ナデ	
40	216	1		ＳＫ１	土師器	杯	15.8	3.4		8.2	回転ナデ／底部回転糸切	
40	217	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	杯	16.6	4.0		7.6	回転ナデ／底部回転糸切	２号窯前庭２区との間に接合

第４表－１　掲載遺物一覧表

挿図番号	掲載番号	地区	層位	遺構	種別	器種	口径（長）cm	器高（幅）cm	腹径（厚）cm	底径 cm	形態・製作技術上の特徴	備考
40	218	1	埋土西半	ＳＫ１	土師器	皿		(2.2)		5.8	回転ナデ／底部回転糸切	２号窯前庭２区との間に接合
40	219	1	埋土	ＳＫ１	土師器	皿？		(2.7)		9.1	回転ナデ／見込み部仕上げナデ 底部回転糸切	
40	220	1	斜面部包含層		土師器	小皿	9.0	1.6		5.0	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	窯跡下
40	221	1	斜面部包含層		土師器	杯	14.8	3.3		6.8	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	窯跡下
40	222	1	２・３号窯下方斜面包含層		土師器	杯	16.3	4.0		8.0	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
40	223	1	窯跡群下方斜面包含層		土師器	杯		(2.8)		8.0	内外面回転ナデ／底部回転糸切り	
40	224	1	２・３号窯下方斜面包含層		土師器	杯？		(2.6)		7.2	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	
40	225	1	２・３号窯下方斜面包含層		土師器	椀		(3.3)		5.5	内外面回転ナデ・底部回転ヘラ切り	

第４表－２　掲載遺物一覧表（金属器）

区分	挿図番号	掲載番号	種別	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）
寺地古墳	第 12 図	M1	銅製品	銅芯金貼耳環	(2.20)	2.70	0.47
寺地古墳	第 12 図	M2	銅製品	銅芯金貼耳環	2.45	2.75	0.50
寺地古墳	第 12 図	M3	鉄製品	刀	67.1	4.52	2.50
寺地古墳	第 12 図	M4	鉄製品	鏃	(2.45)	1.20	0.33
寺地古墳	第 12 図	M5	鉄製品	鏃	(4.75)	0.70	0.35
寺地古墳	第 12 図	M6	鉄製品	不明	(2.05)	0.40	0.40
寺地古墳	第 12 図	M7	鉄製品	鏃	－	－	－
寺地古墳	第 12 図	M8	鉄製品	鏃	(3.03)	0.70	0.40
寺地古墳	第 12 図	M9	鉄製品	鏃	8.88	0.92	0.5
寺地古墳	第 12 図	M10	鉄製品	鏃	(2.0)	1.15	0.25
寺地古墳	第 12 図	M11	鉄製品	鏃	(8.20)	0.95	0.60
寺地古墳	第 12 図	M12	鉄製品	鏃	(8.25)	0.85	0.5
寺地古墳	第 12 図	M13	鉄製品	鏃	8.2	0.93	0.4
寺地古墳	第 12 図	M14	鉄製品	刀子	13.65	1.80	0.55
寺地古墳	第 12 図	M15	鉄製品	刀子	11.10	1.70	1.50
寺地遺跡	第 27 図	M16	鉄製品	刀子	(13.6)	2.0	0.9
寺地遺跡	第 27 図	M17	鉄製品	刀子	(9.1)	1.25	0.45
寺地遺跡	第 27 図	M18	鉄製品	不明刃部	(3.1)	1.45	0.3
寺地遺跡	第 27 図	M19	鉄製品	不明刃部	(3.9)	1.1	0.4
寺地遺跡	第 27 図	M20	鉄製品	鎌	(9.7)	2.95	0.4
寺地遺跡	第 27 図	M21	鉄製品	鎌	(10.05)	3.7	0.45
寺地遺跡	第 27 図	M22	鉄製品	鋤先	10.95	18.9	1.4
寺地遺跡	第 27 図	M23	鉄製品	釘	(3.2)	0.92	0.45
寺地遺跡	第 27 図	M24	鉄製品	釘	(2.75)	0.7	0.5
寺地遺跡	第 27 図	M25	鉄製品	釘	(4.8)	0.65	0.5
寺地遺跡	第 27 図	M26	鉄製品	斧	8.6	2.2	0.7
寺地遺跡	第 27 図	M27	鉄製品	釘？	(10.7)	1.45	1.2
寺地遺跡	第 27 図	M28	鉄製品	不明	(3.4)	1.0	0.92
寺地遺跡	第 27 図	M29	鉄製品	釘	(5.3)	1.3	0.73
寺地遺跡	第 27 図	M30	鉄製品	笄？	(17.5)	0.6	0.64

第４表－３　掲載遺物一覧表（石器）

区分	挿図番号	掲載番号	種別	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量
寺地遺跡	第 26 図	S1	磨製石器	叩石	124.0 ㎜	83.5 ㎜	64.0 ㎜	945.6g
寺地遺跡	第 26 図	S2	磨製石器	叩石	147.0 ㎜	34.0 ㎜	39.0 ㎜	303.7g
寺地遺跡	第 26 図	S3	石製品	一石五輪塔	(43.45)	15.6	16.3	14.8 kg

図　　版

古墳全景（南から）

石室全景（南から）

古墳全景（東から）

図版２　寺地古墳遺構（2）

石室床面全景（西から）

石室床面全景（東から）

第２群土器出土状況（東から）

第２群土器出土状況（北から）

第１群土器出土状況（西から）

図版４　寺地古墳遺構（4）

鉄刀・耳環等出土状況（北から）

石室閉塞状況（東から）

石室閉塞状況（西から）

石室閉塞状況：外側閉塞石除去
（西から）

石室入口部：天井石除去後
（西から）

石室入口部：天井石除去後
（東から）

図版６　寺地古墳遺構（6）

石室入口部北側立石（南から）

石室入口部南側立石（北から）

石室基底石全景（南から）

石室入口部南側（北から）

石室入口部北側（南から）

石室完掘状況（南から）

図版８　寺地古墳遺物（1）

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

図版 10　寺地古墳遺物（3）

25

28

26

29

27

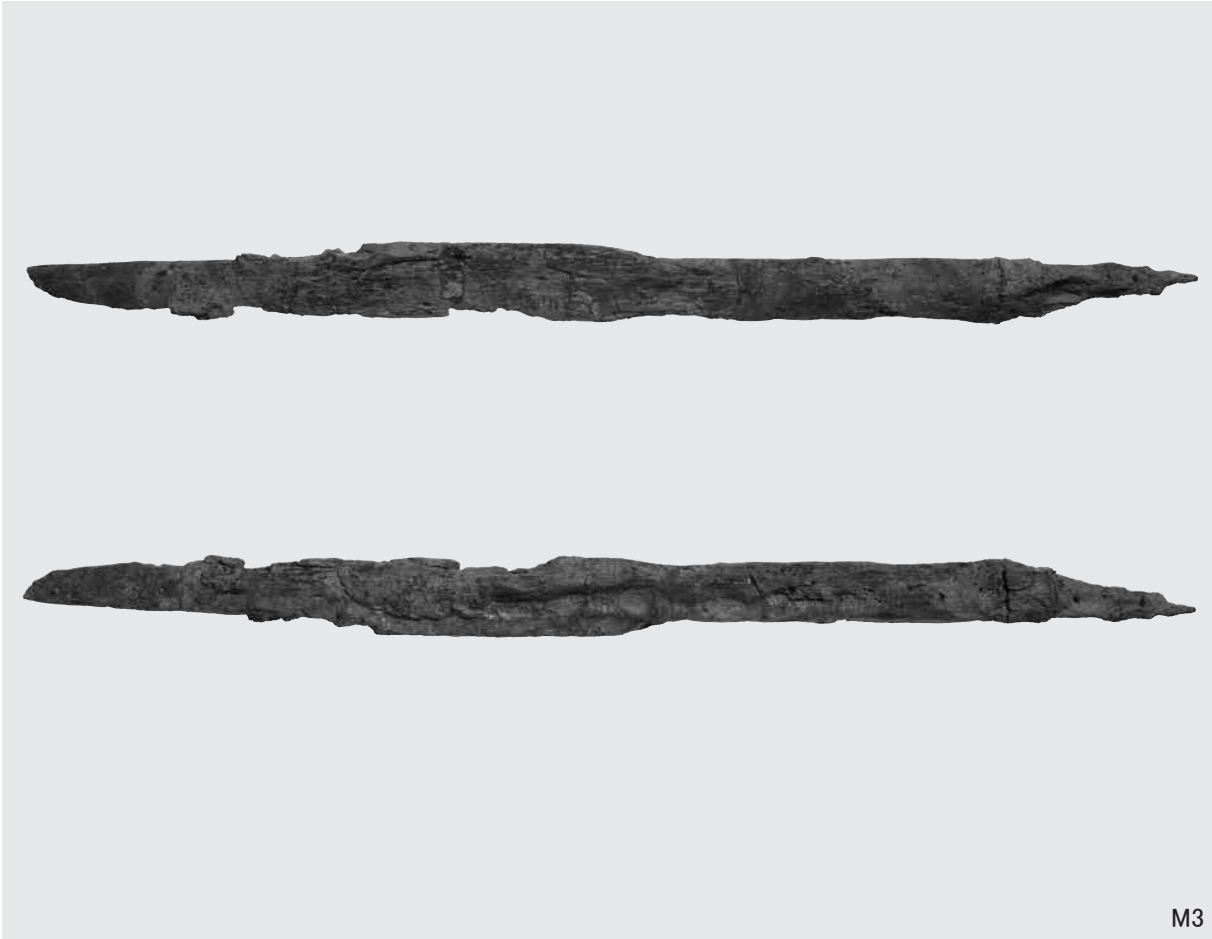
30

M1　M2

M4

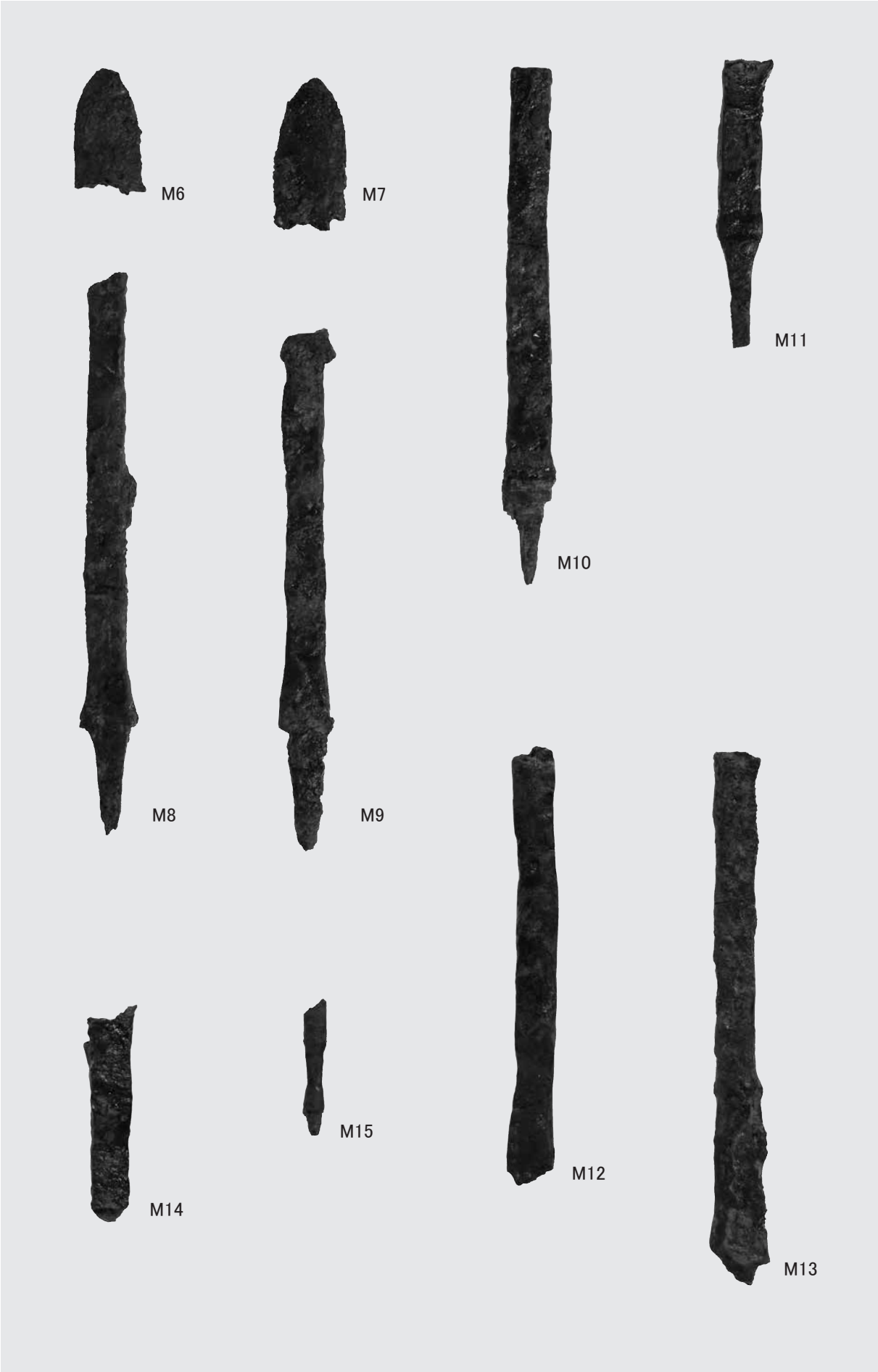
M5

図版 12　寺地古墳遺物（5）



M3

M3


M6
M7
M10
M11
M8
M9
M15
M12
M14
M13

図版 14　寺地遺跡１区遺構（1）

調査区全景（東から）

１区斜面部の遺構（南東から）

１区斜面部の遺構（南から）

１区溝１断面

１区土坑１断面

１区土坑１断面

図版 16　寺地遺跡１区遺構（3）

１区地層堆積状況（南東から）

１区地層堆積状況（東から）

１区包含層鉄器出土状況

２区遺構検出状況（東から）

図版 18　寺地遺跡遺物（1）

37

38

39

41

43

45

51

53

54

58

59

69

104

79

80

83

84

85

図版 20　寺地遺跡遺物（3）

86

91

87

92

90

93

94

98

95

102

96

105

97

116

図版 22　寺地遺跡遺物（5）

117

118

119

122

123

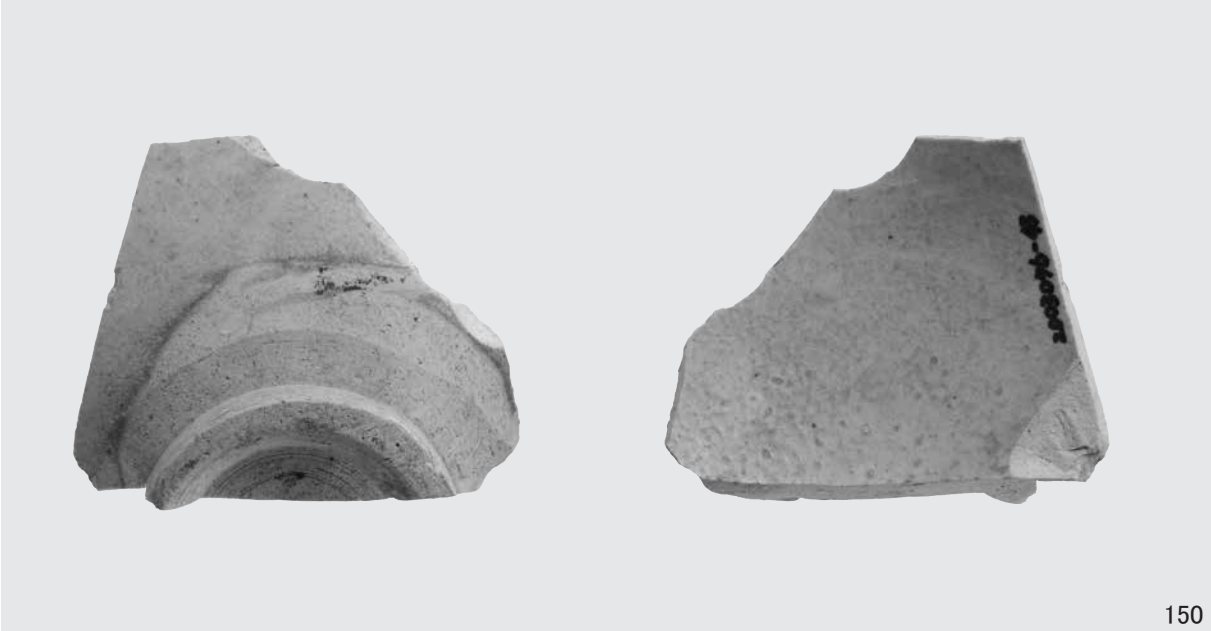
124

135

136

130

138


150

図版 24　寺地遺跡遺物（7）

154

172

164

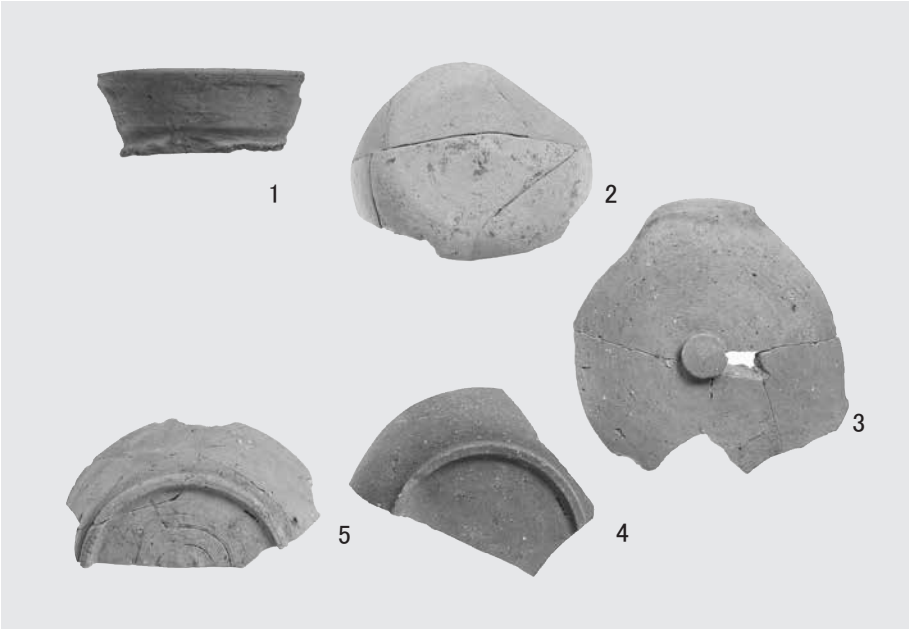
173

165

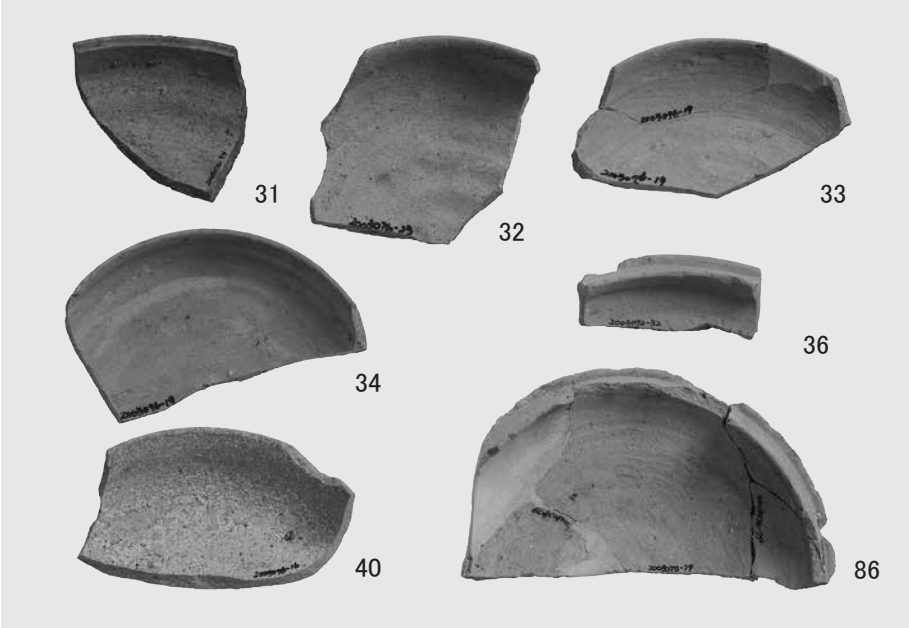
174

171

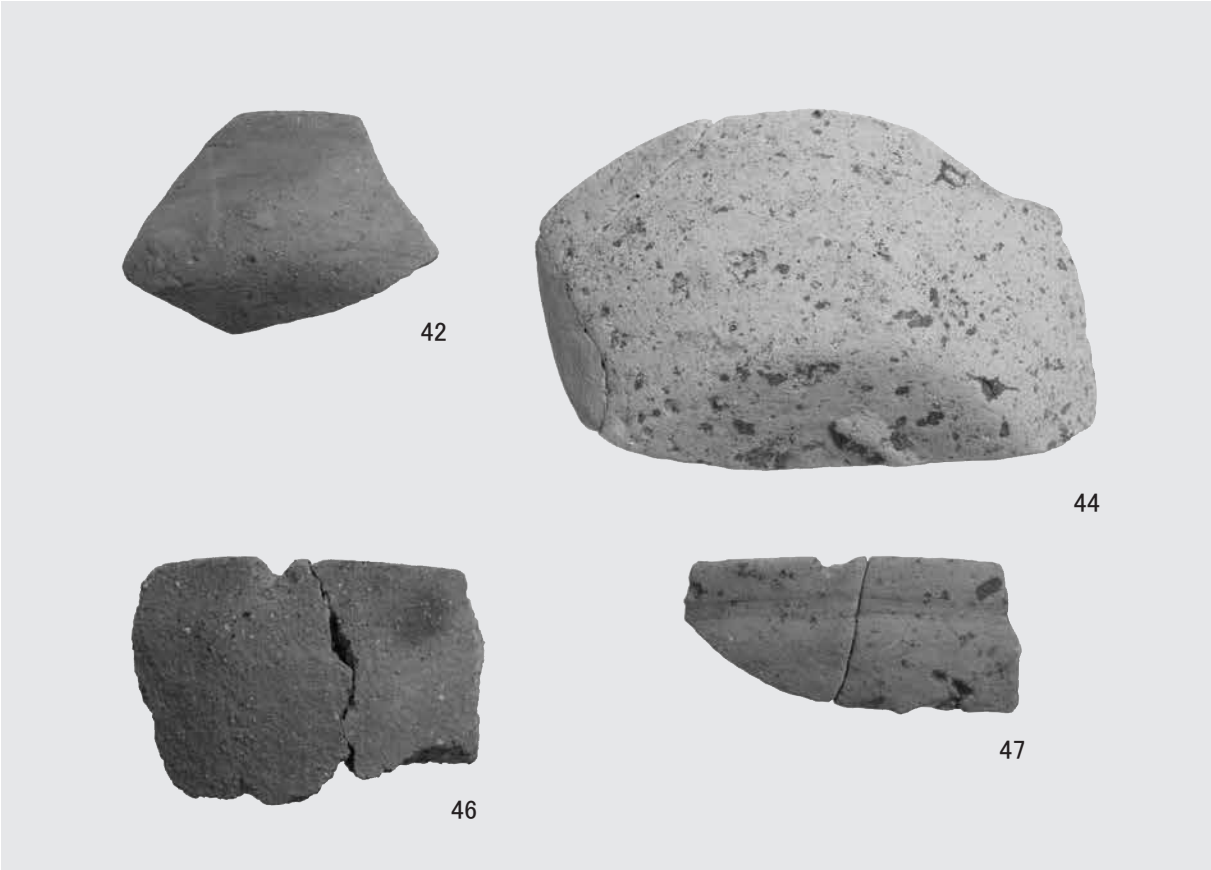
179

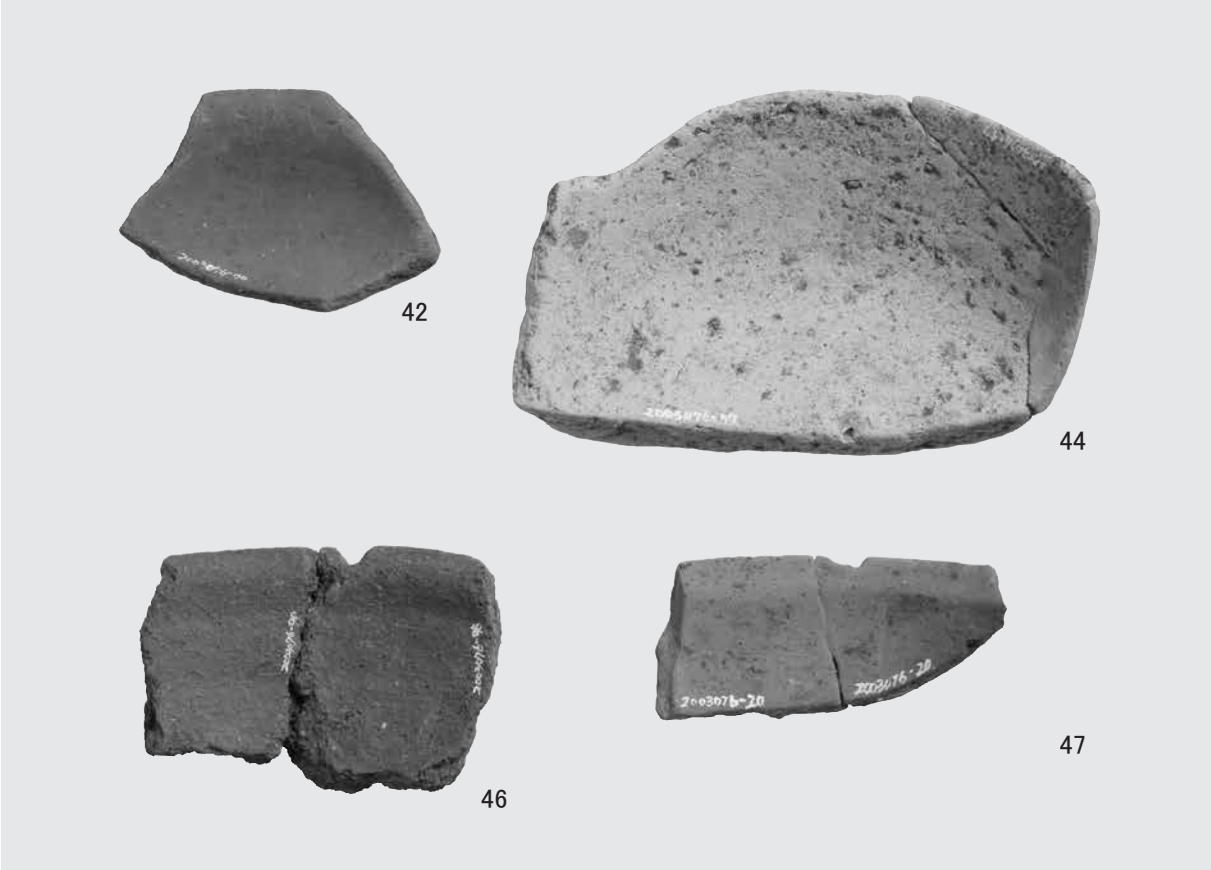

1
2
3
5
4

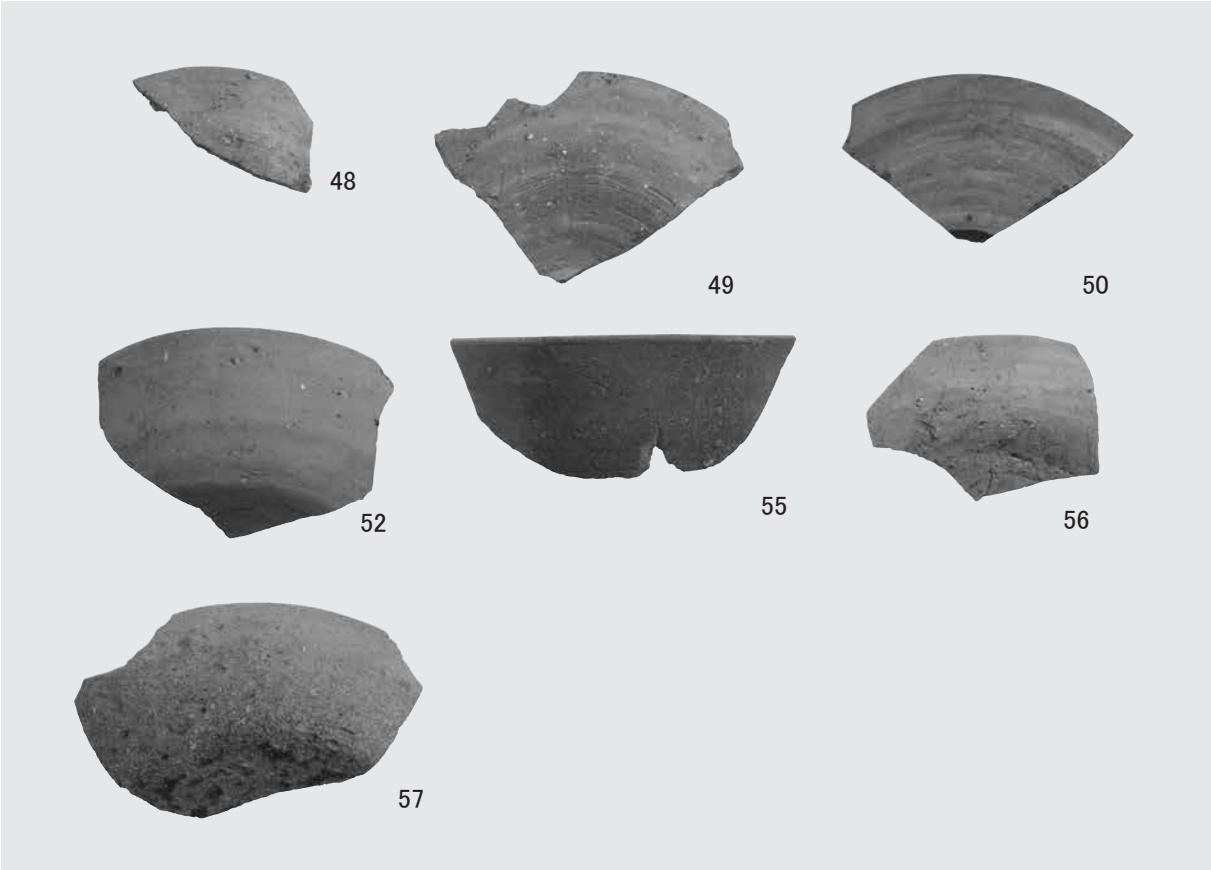
31
32
33
36
34
40
35

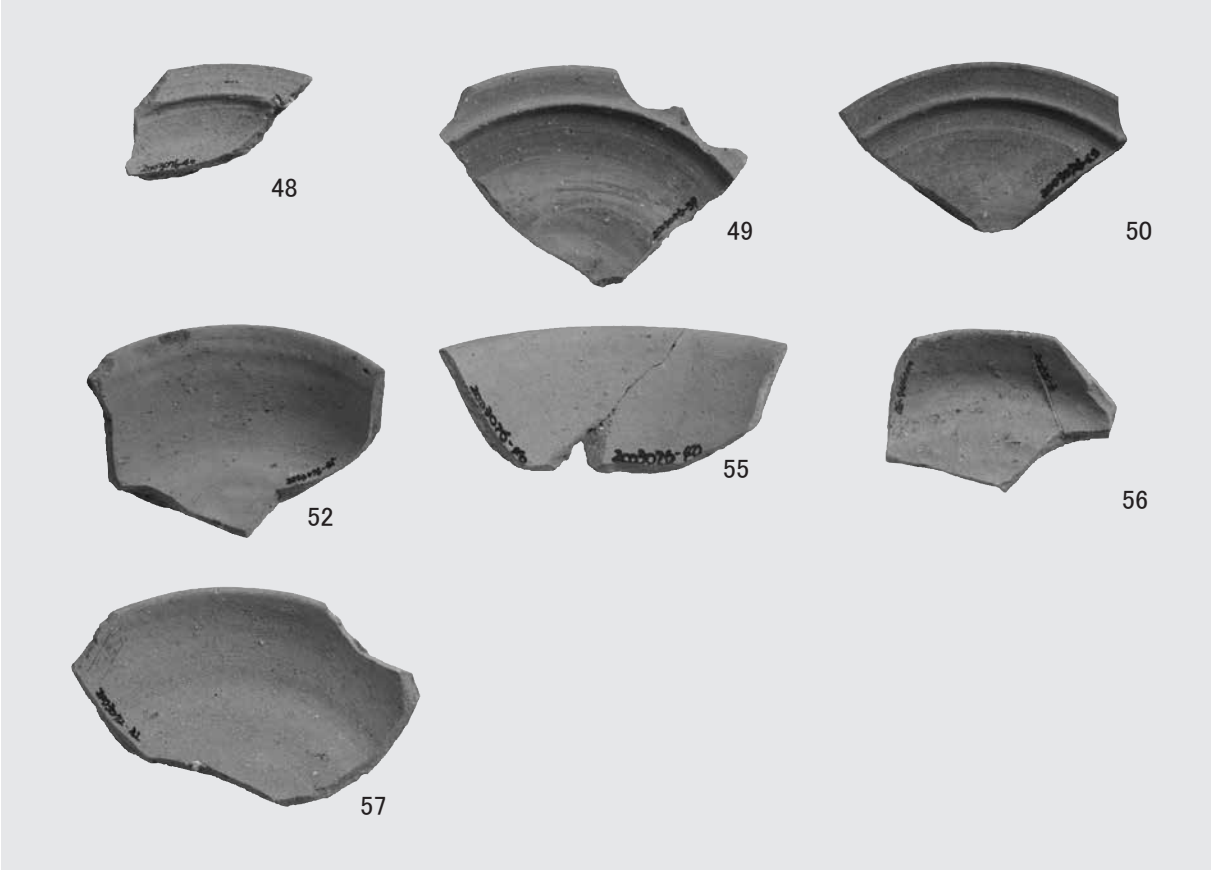

31
32
33
36
34
40
86

図版 26　寺地遺跡遺物（9）

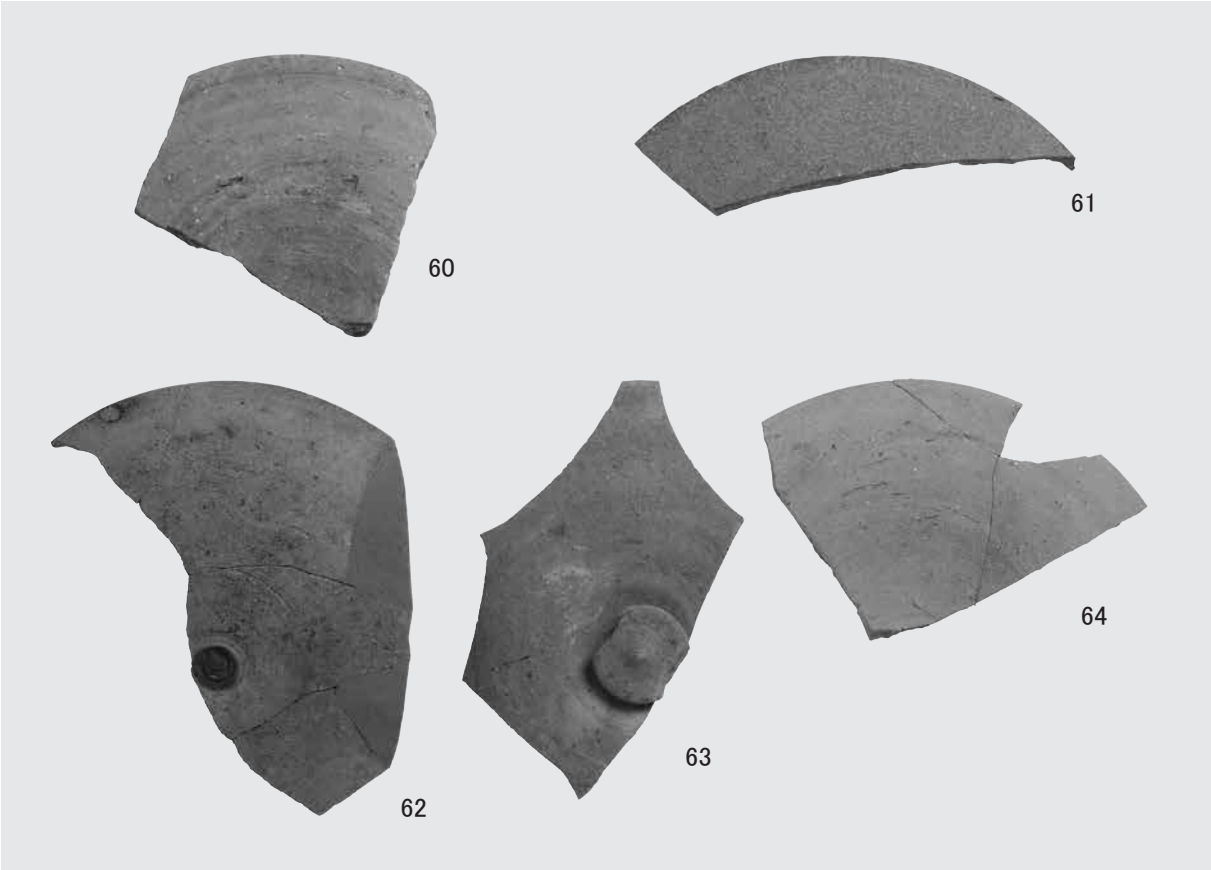


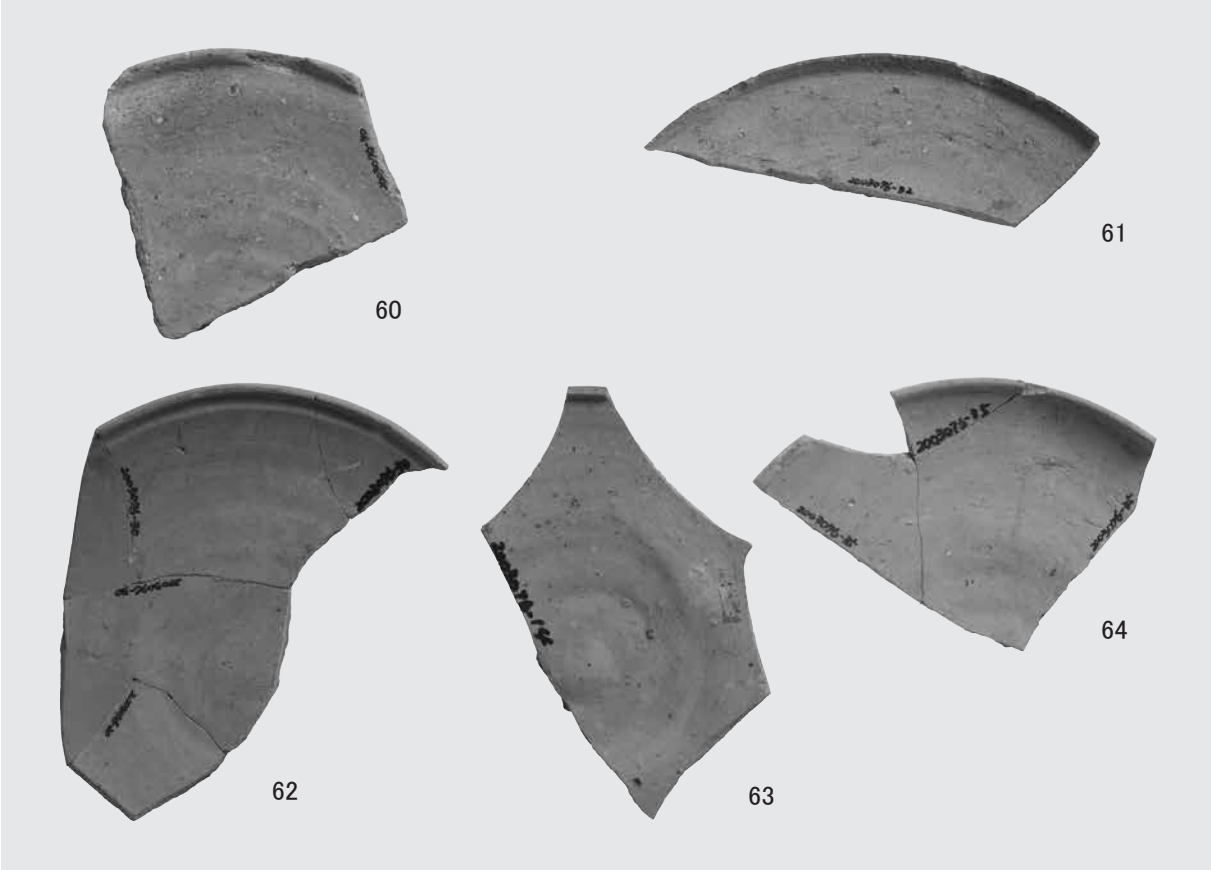



48
49
50
52
55
56
57


48
49
50
52
55
56
57

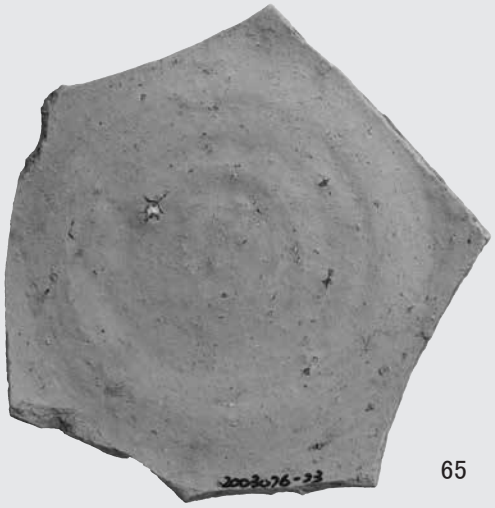
図版 28　寺地遺跡遺物（11）



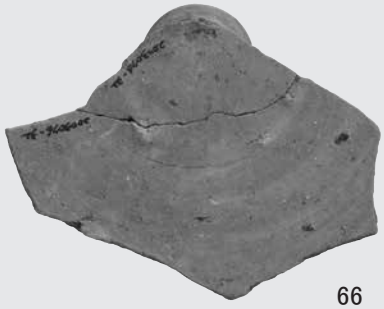


65

66

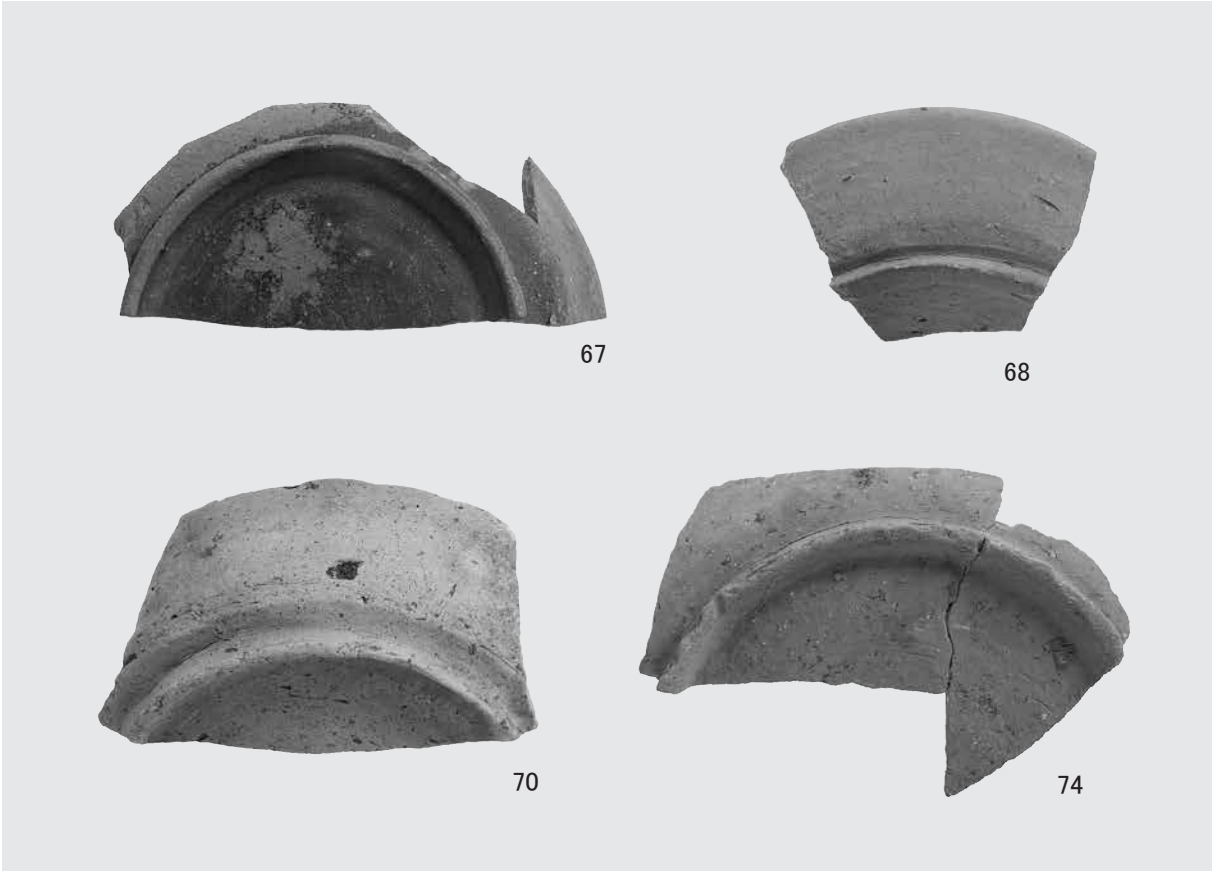


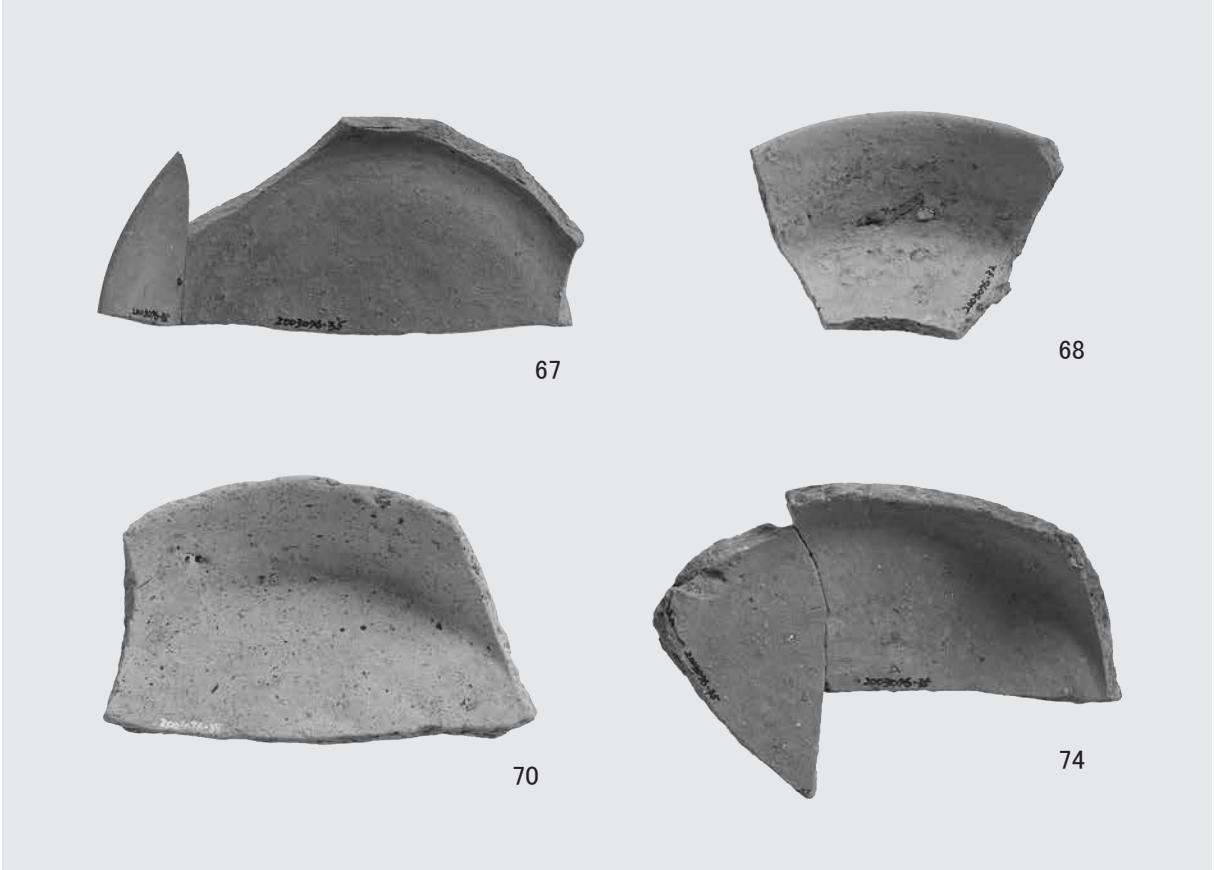
65



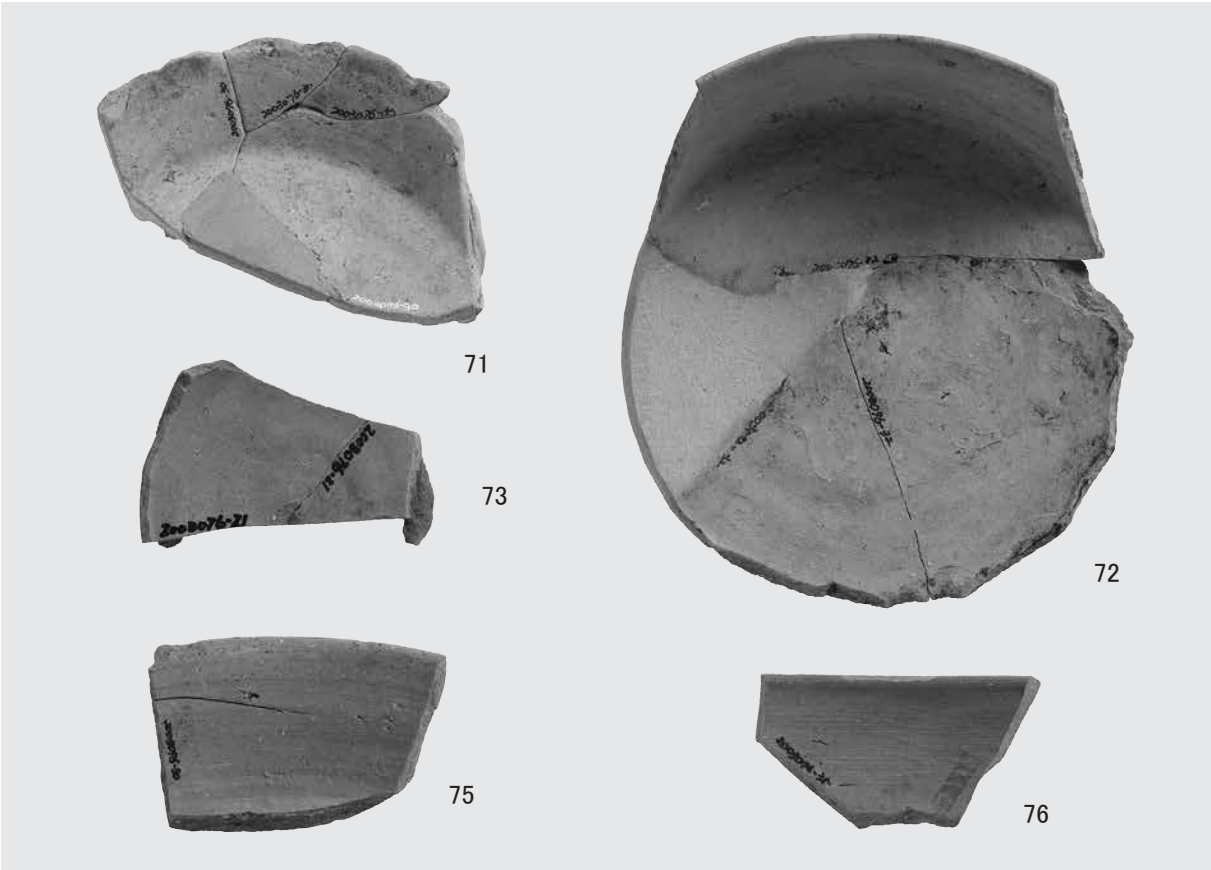
66

図版 30　寺地遺跡遺物（13）

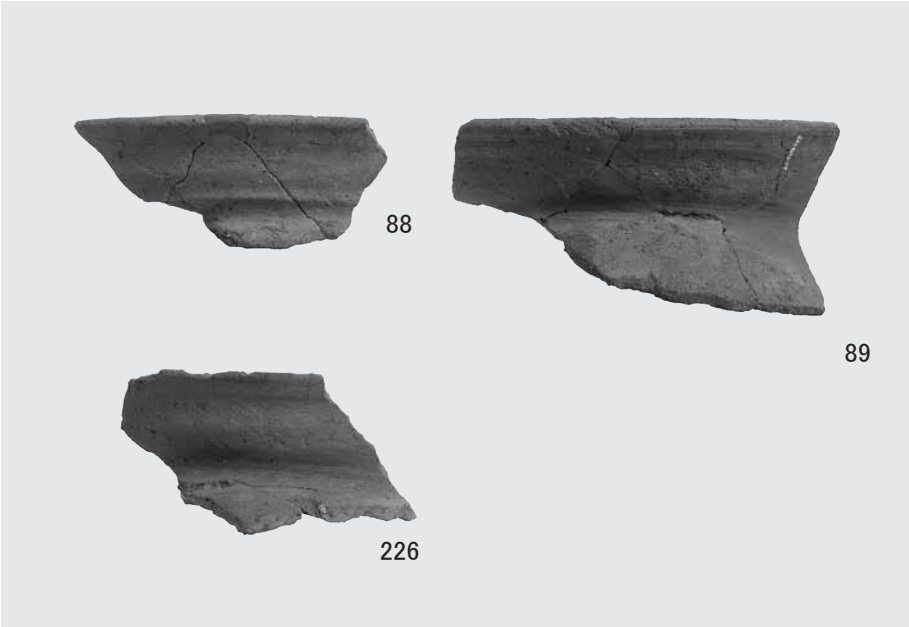


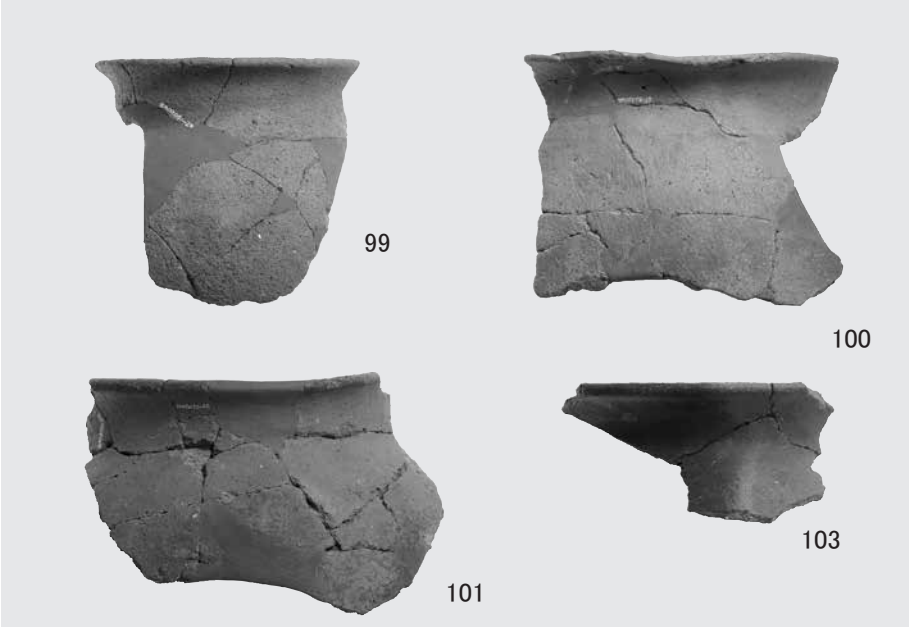


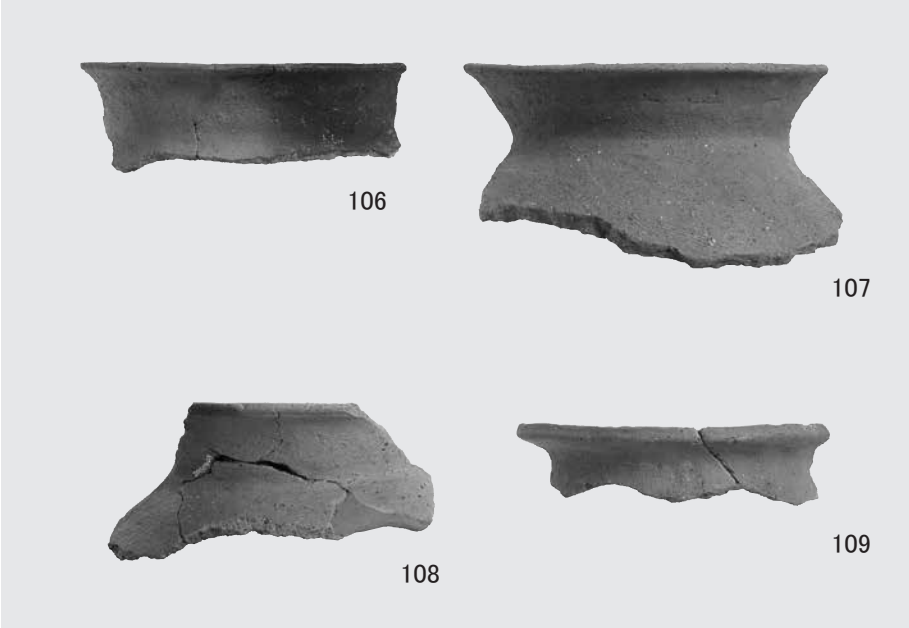
71
73
72
75
76


71
73
72
75
76

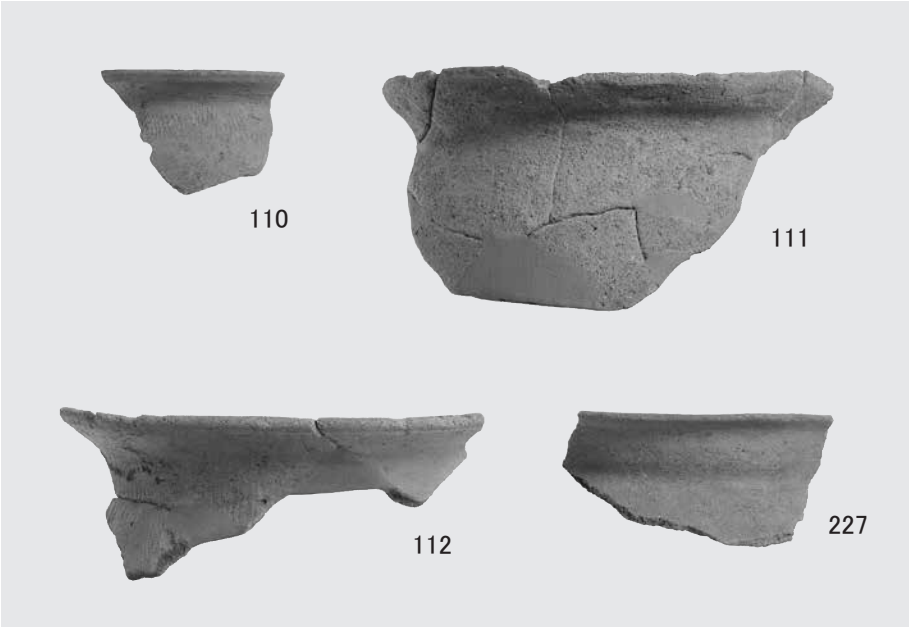
図版 32　寺地遺跡遺物（15）

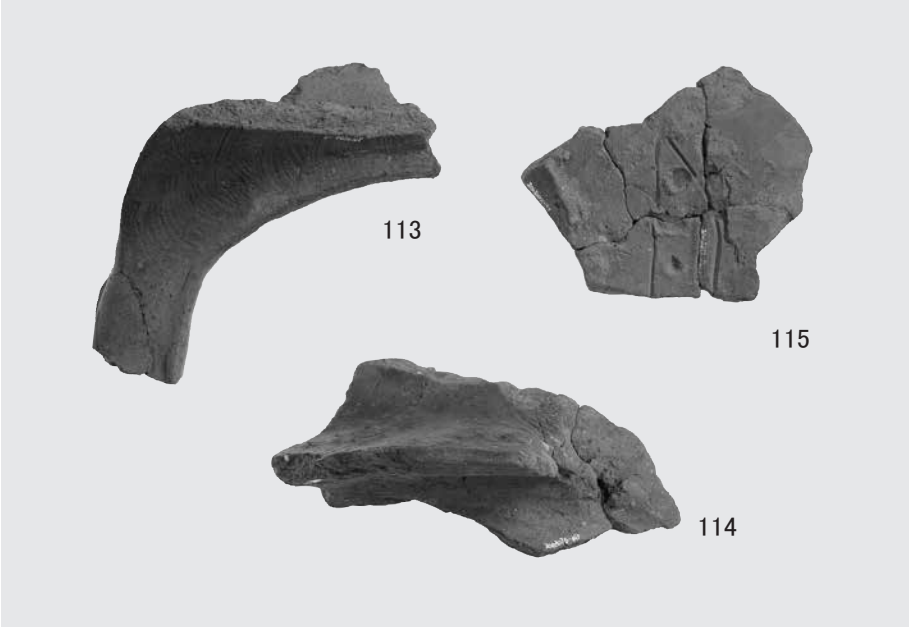

88
89
226


99
100
101
103


106
107
108
109

図版 34　寺地遺跡遺物（17）





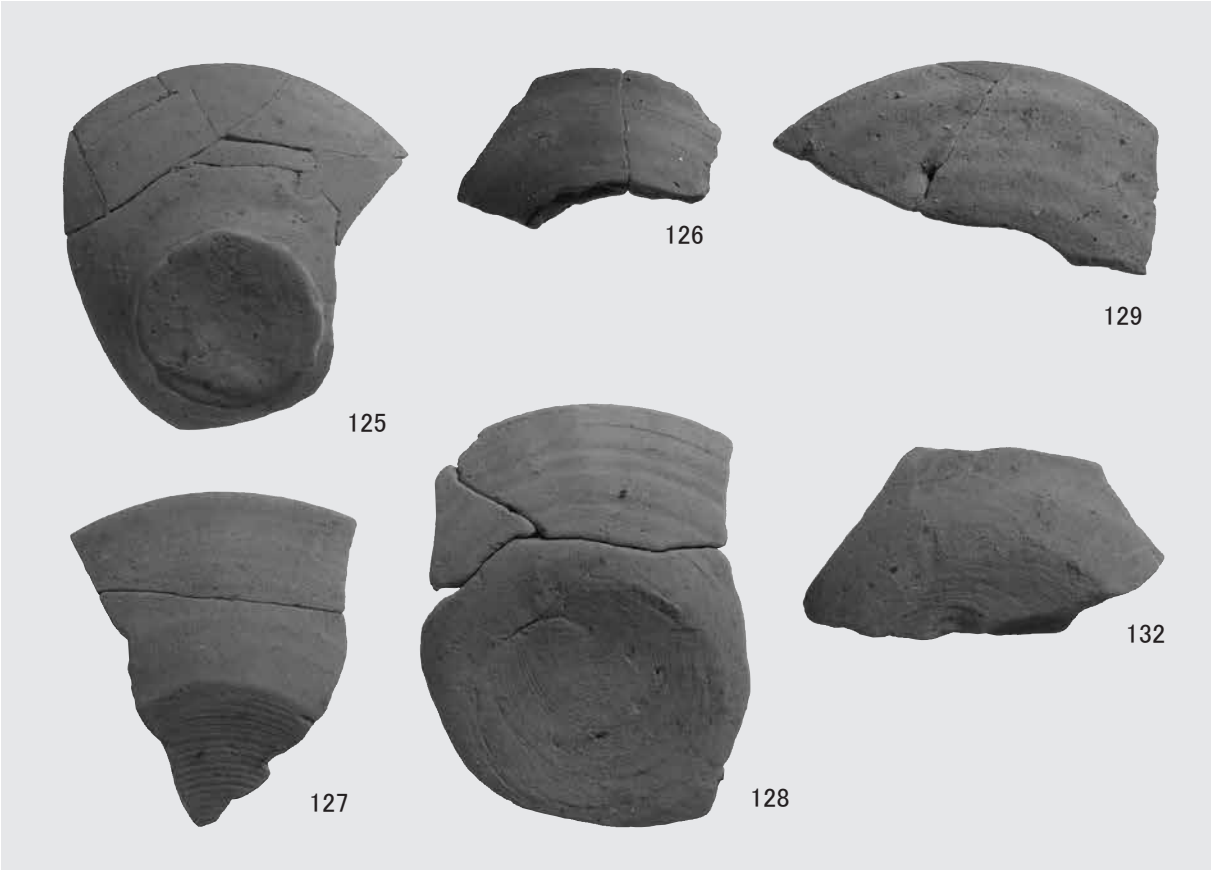
120

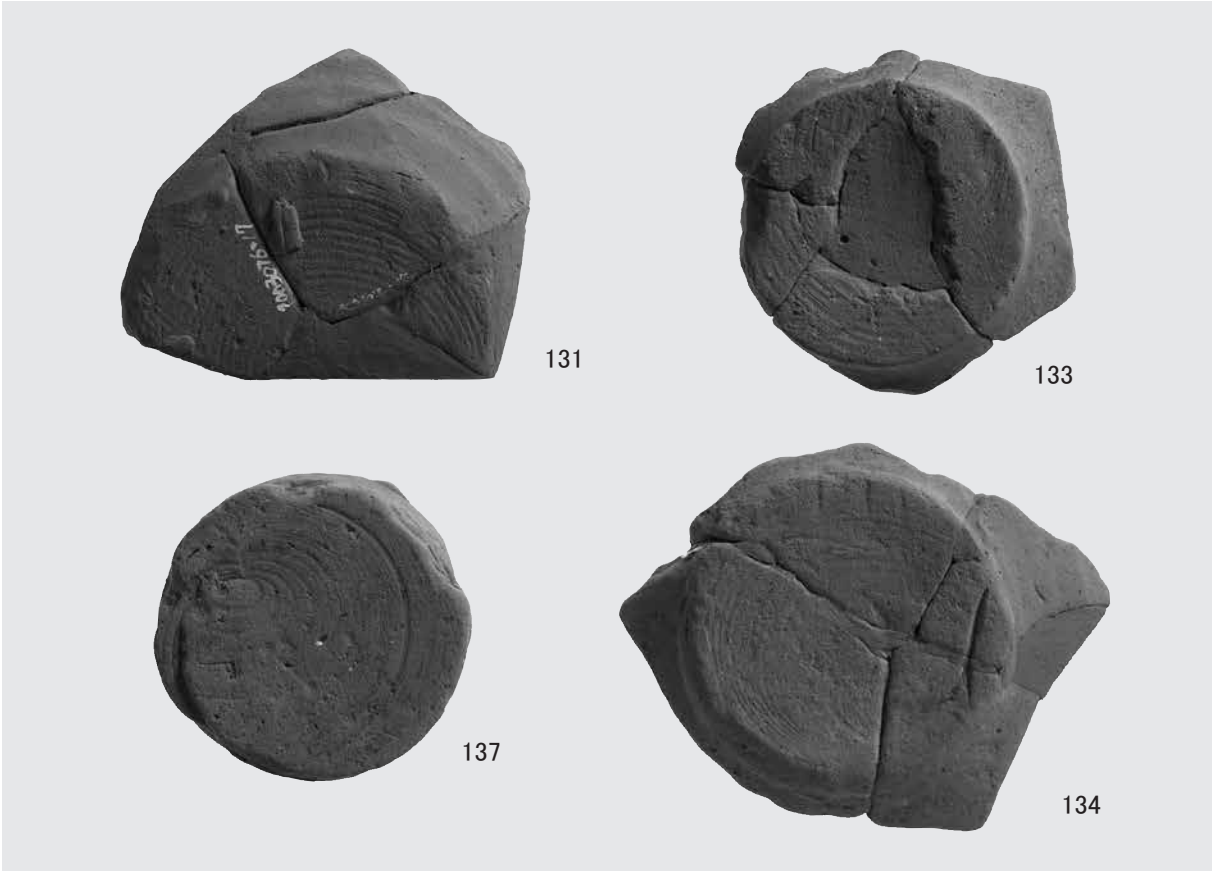
121

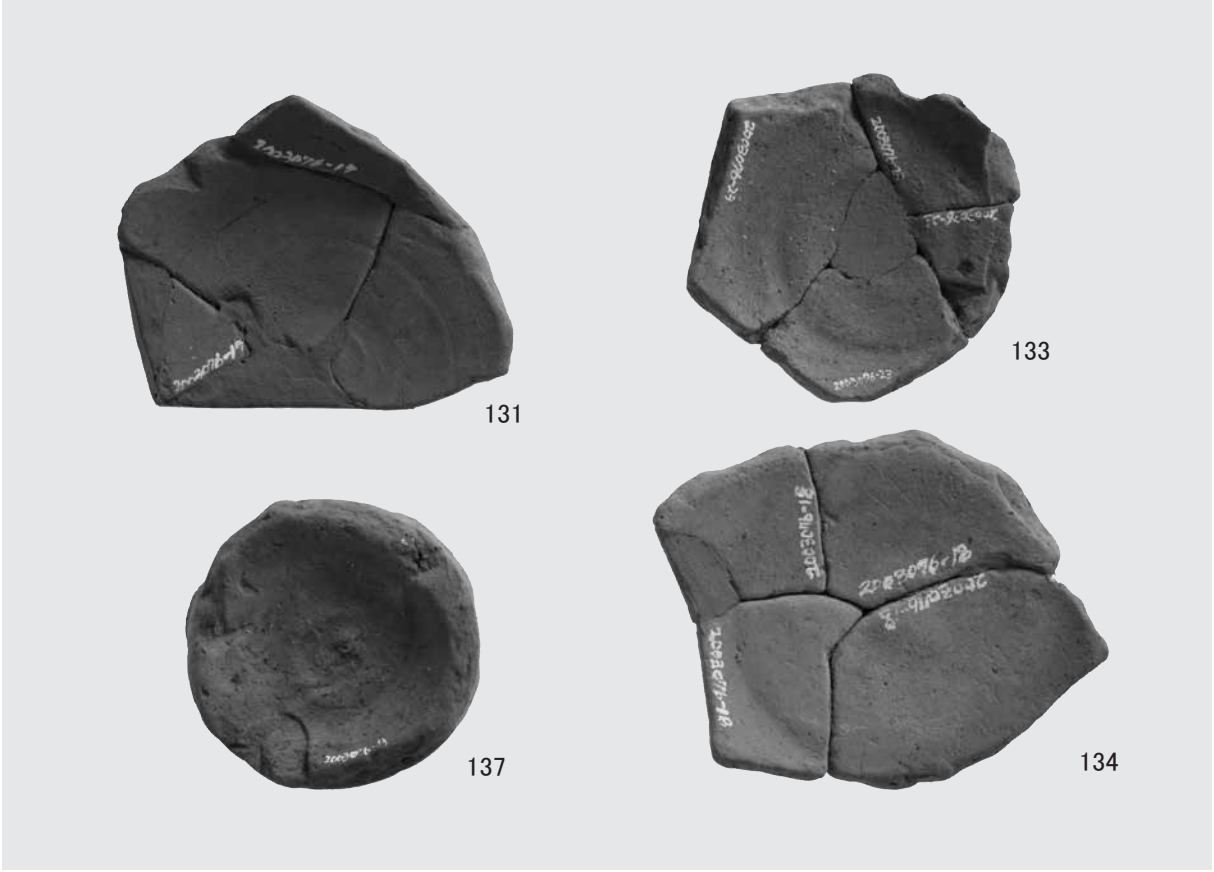
120

121

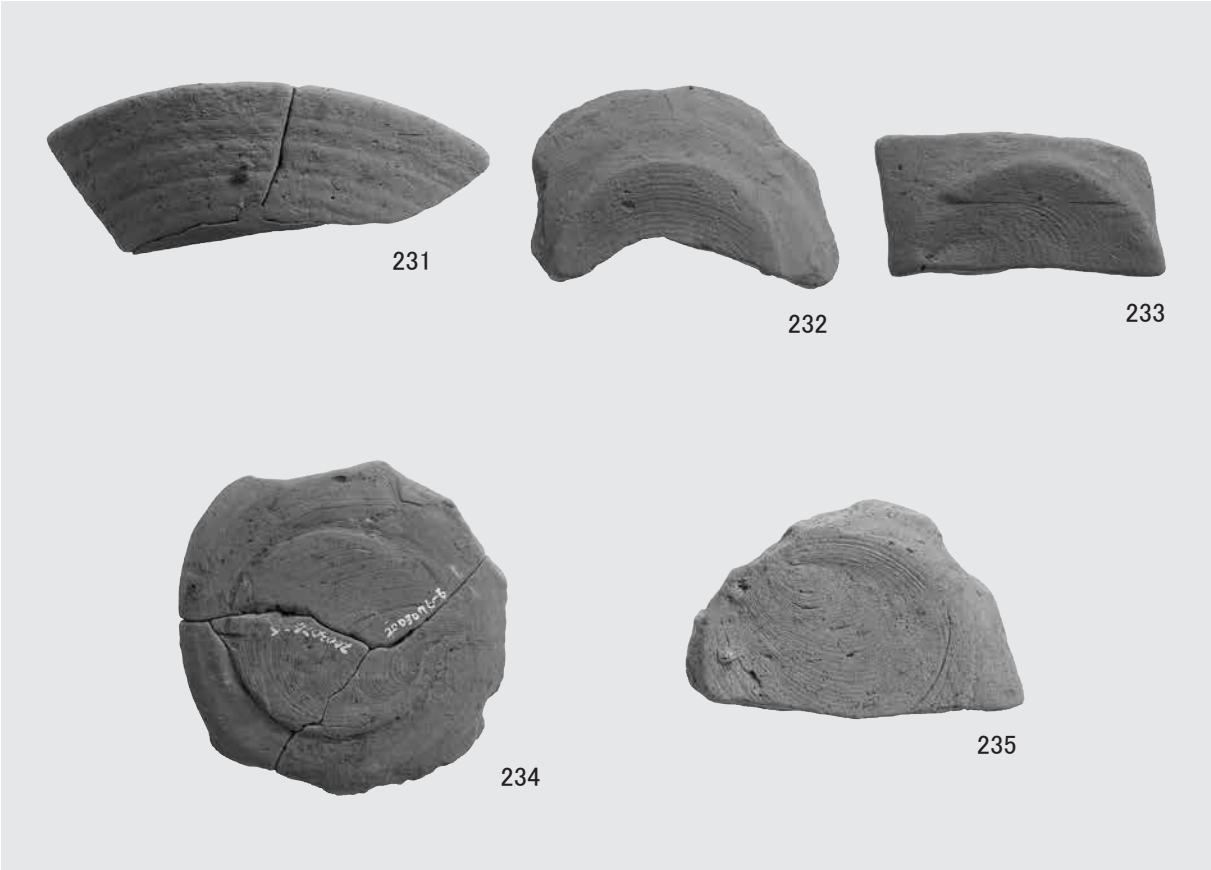
図版 36　寺地遺跡遺物（19）

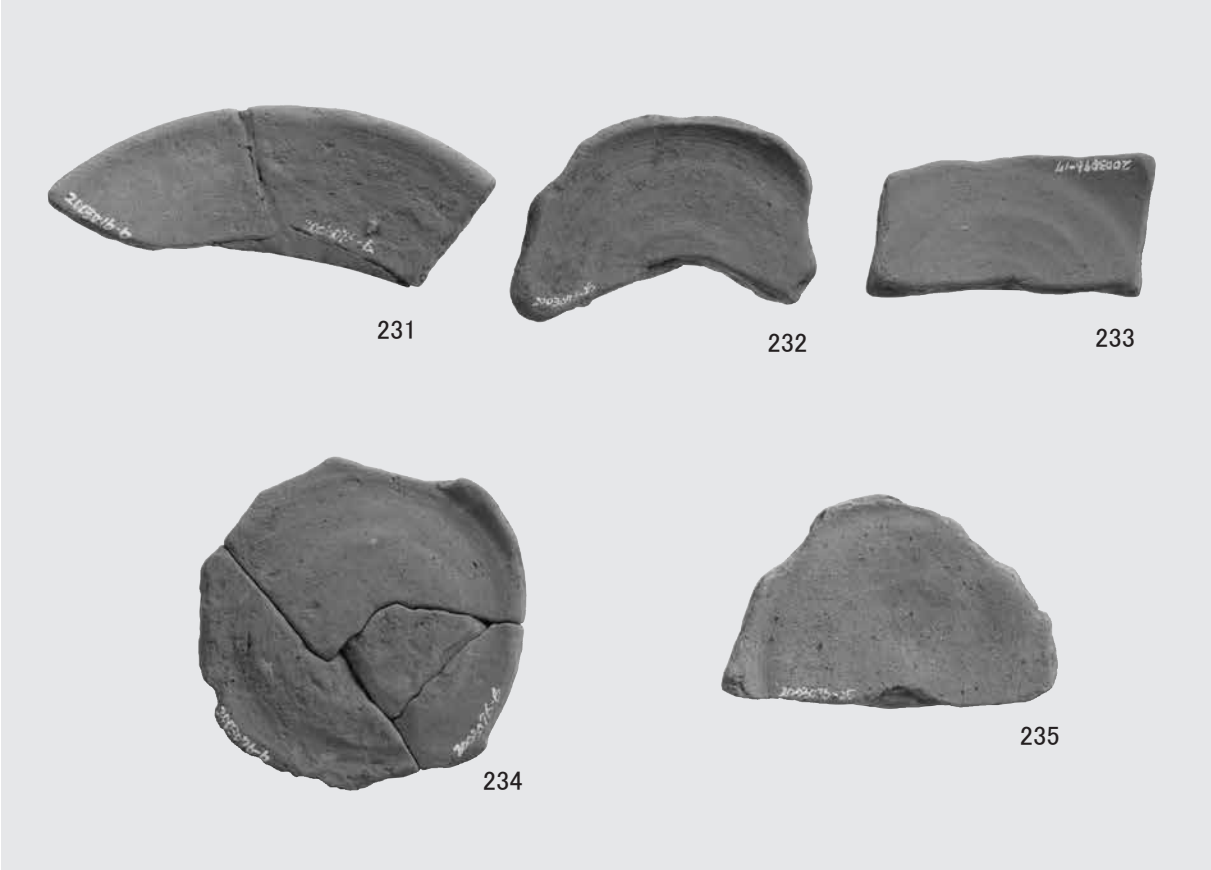


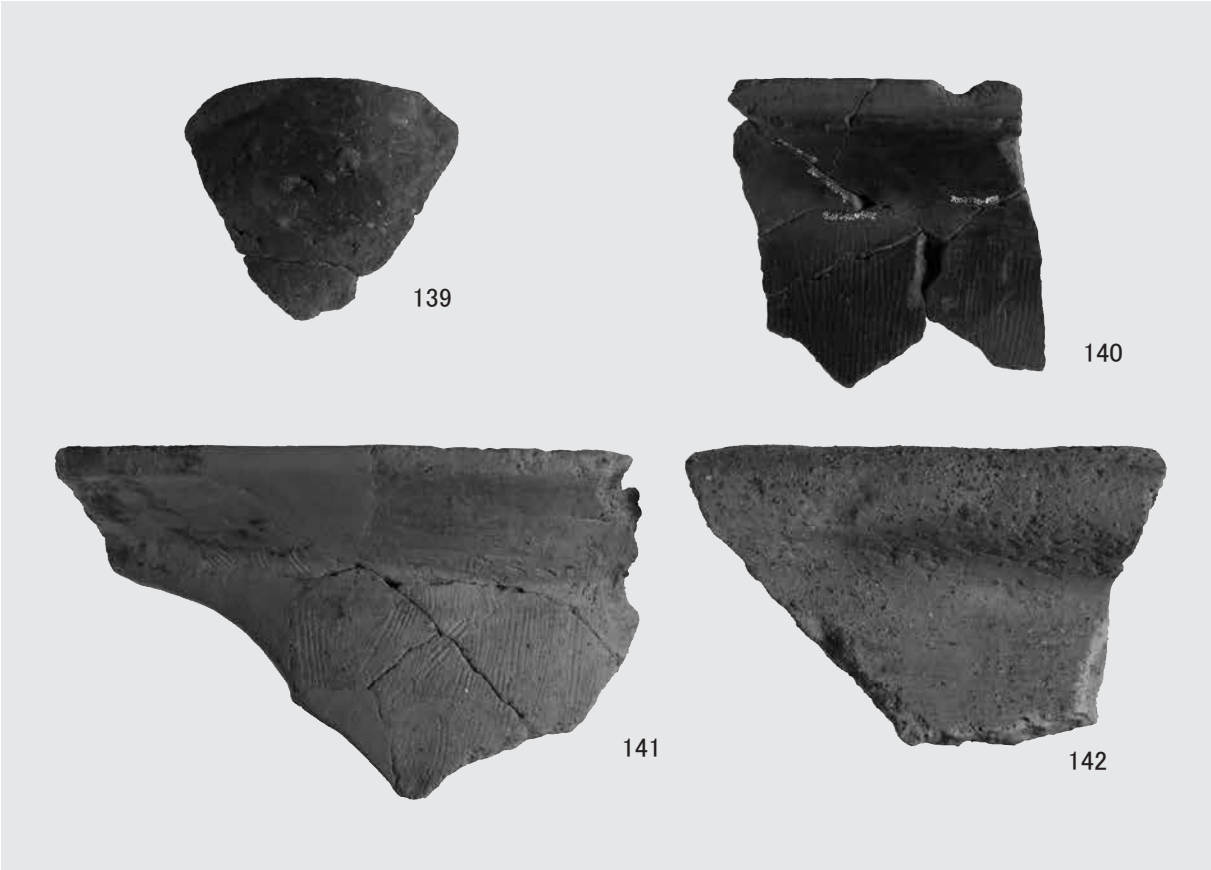

131
133
137
134

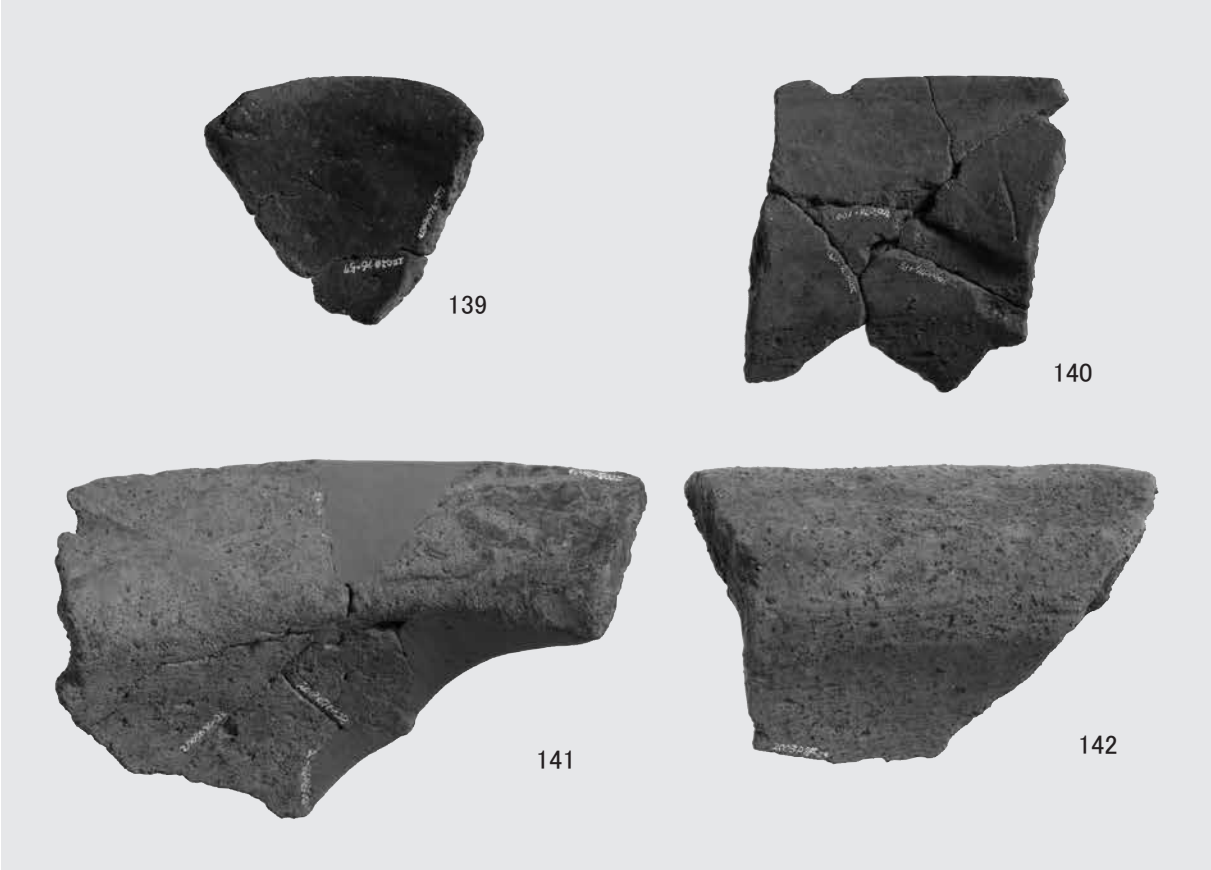

131
133
137
134

図版 38　寺地遺跡遺物（21）



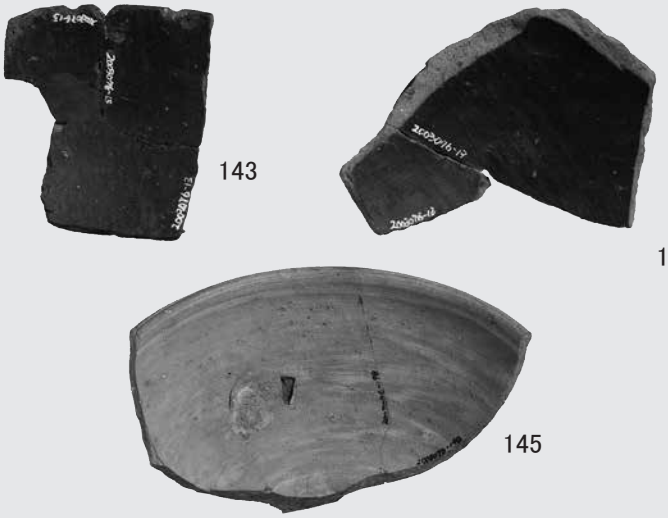



139
140
141
142


139
140
141
142

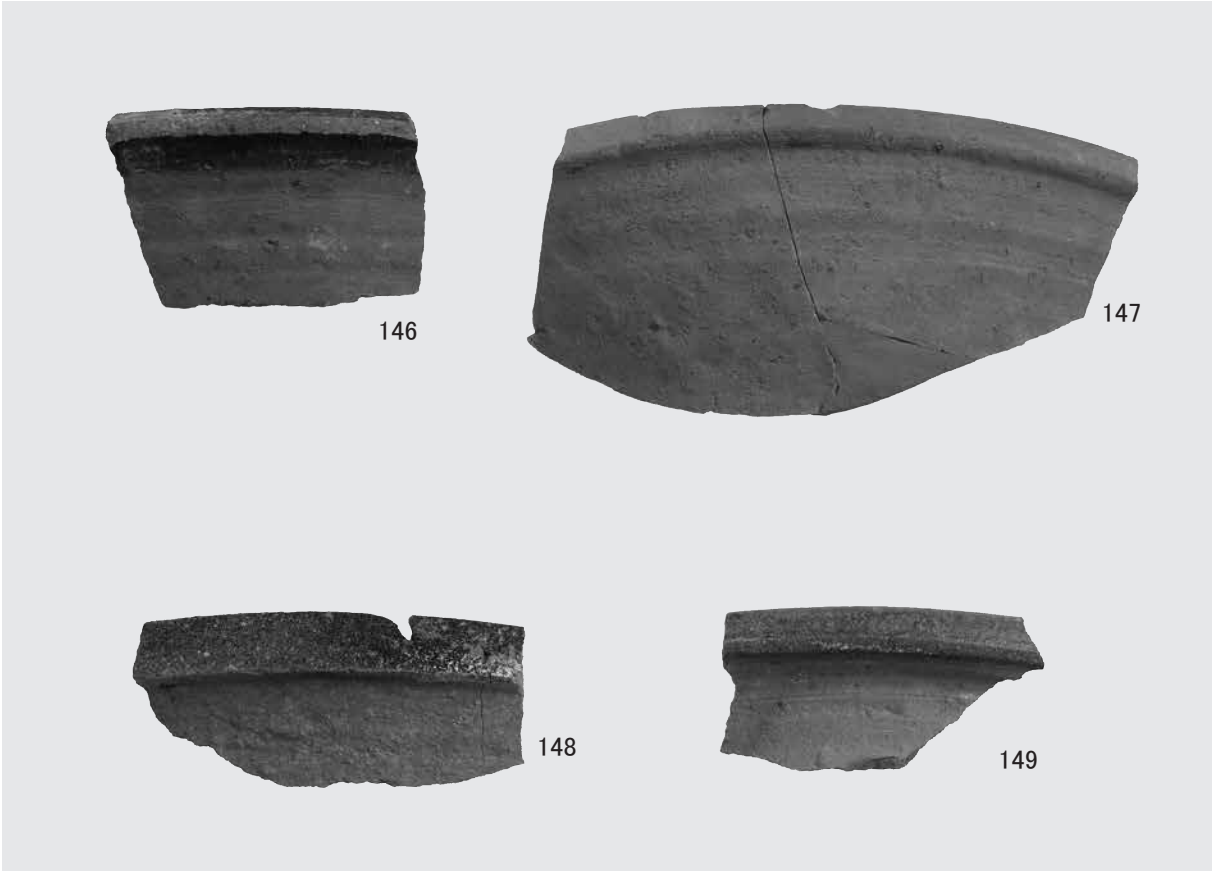
図版 40　寺地遺跡遺物（23）

143
144
145


143
144
145

144

図版 42　寺地遺跡遺物（25）



155

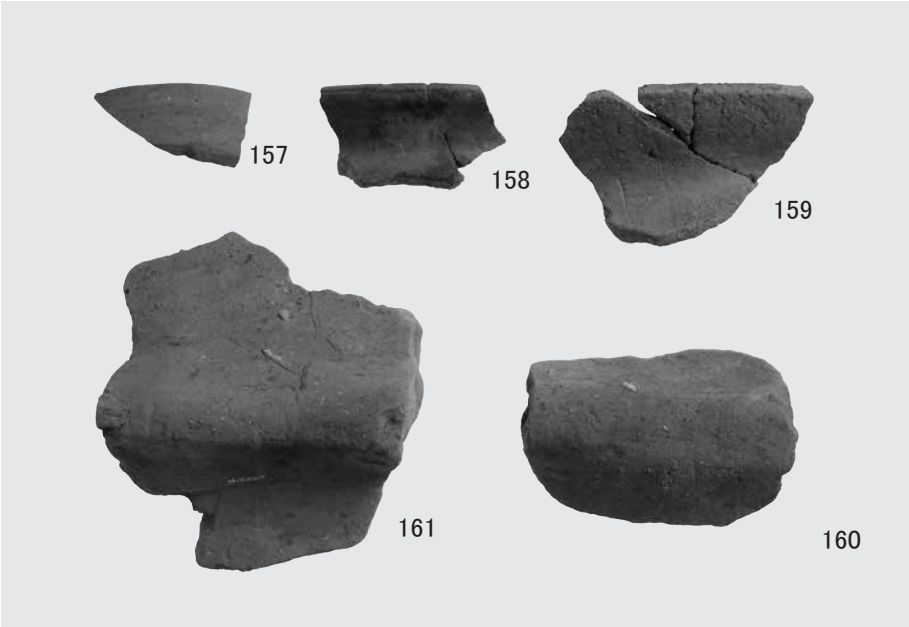
156

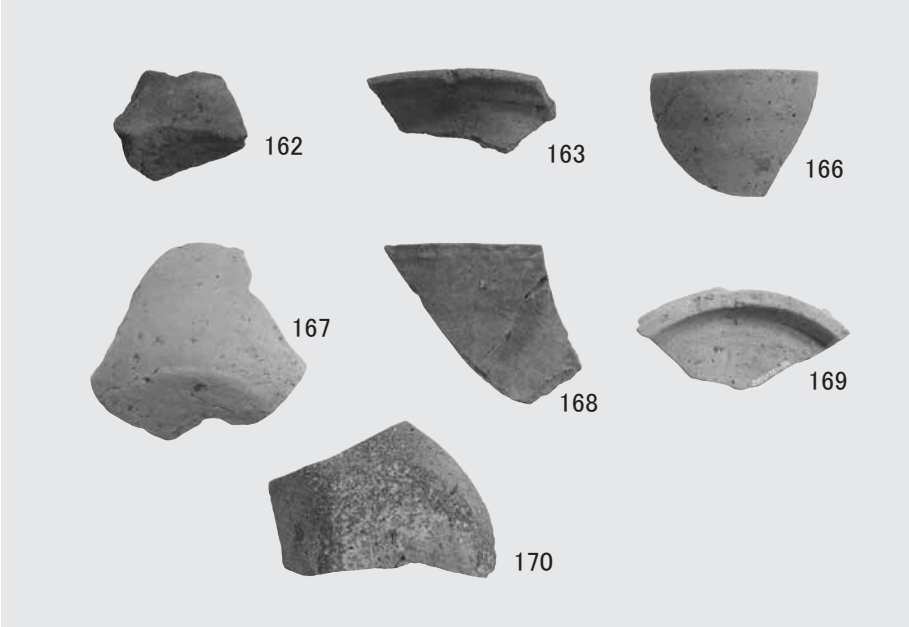
S1

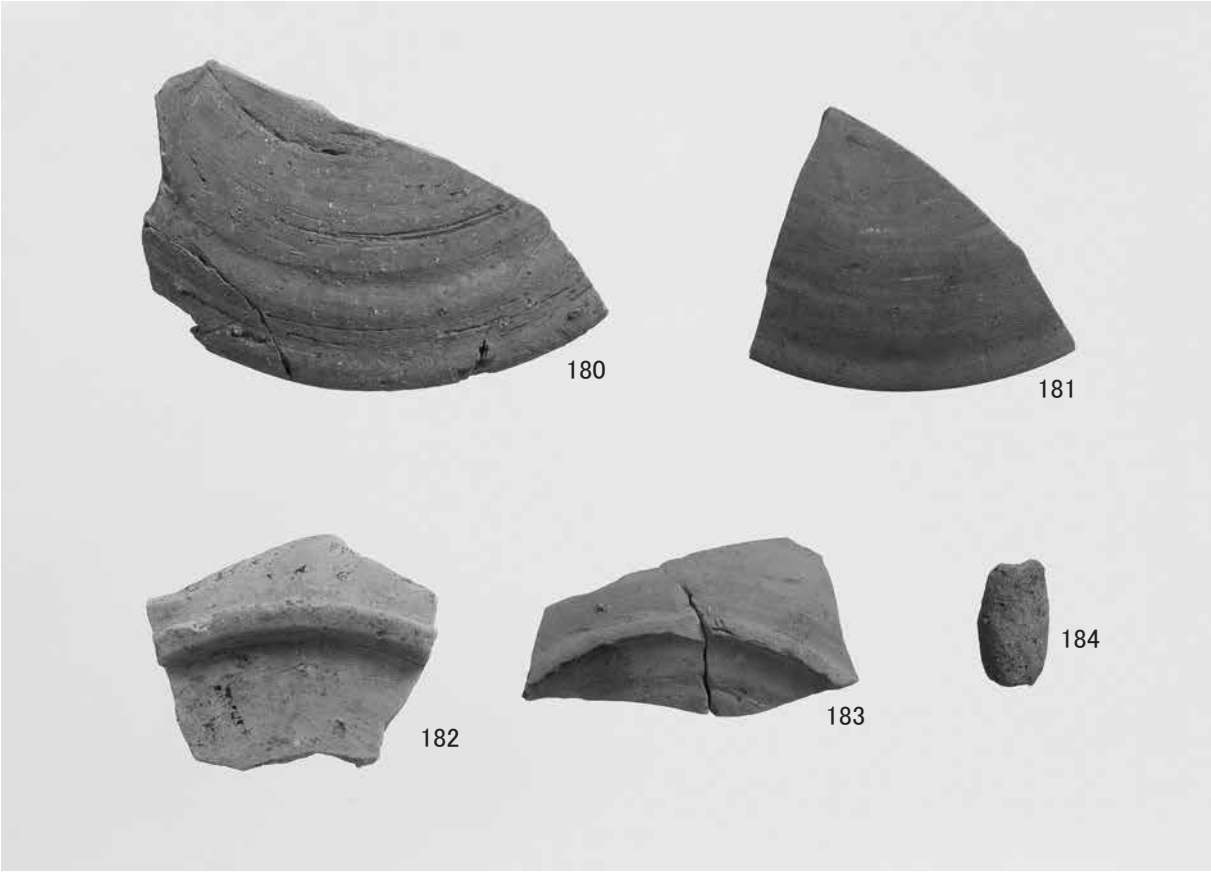
S3

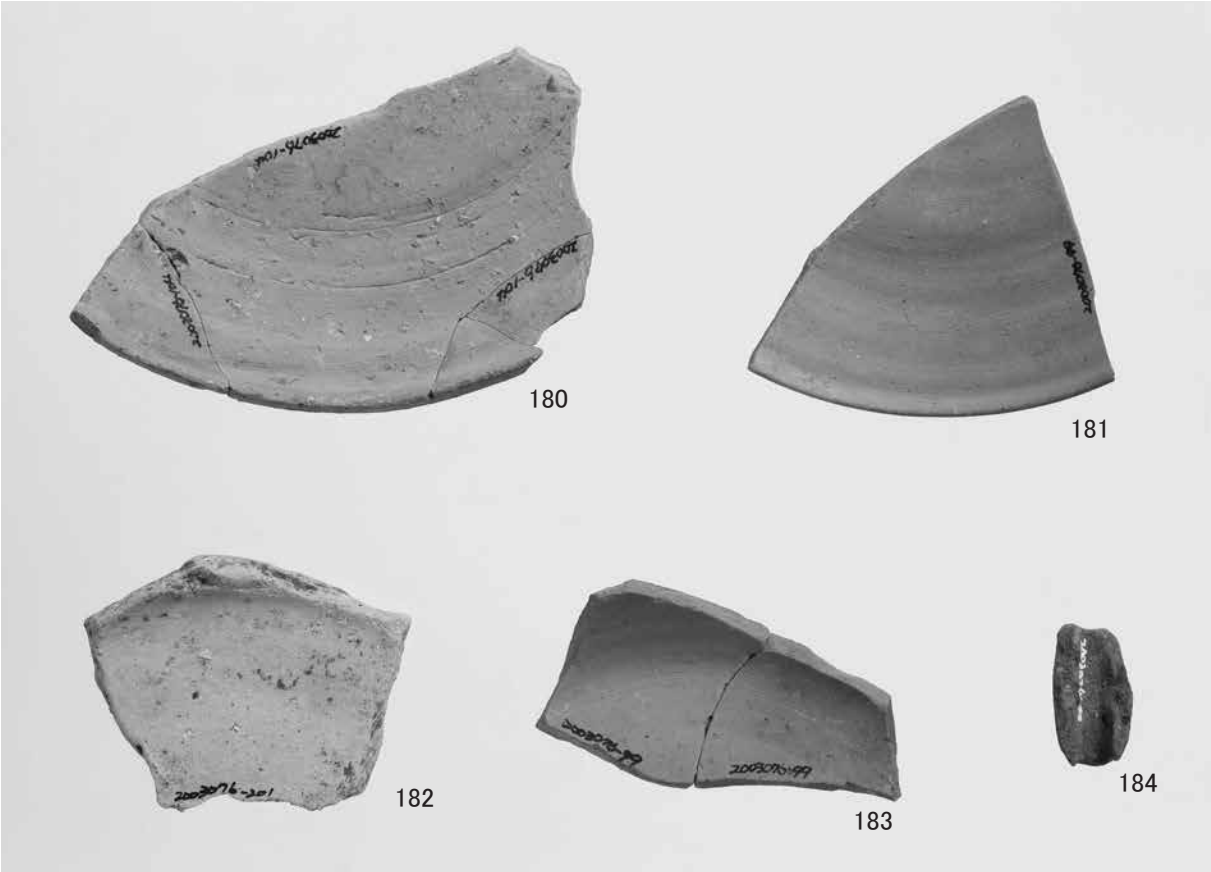
S2

図版 44　寺地遺跡遺物（27）

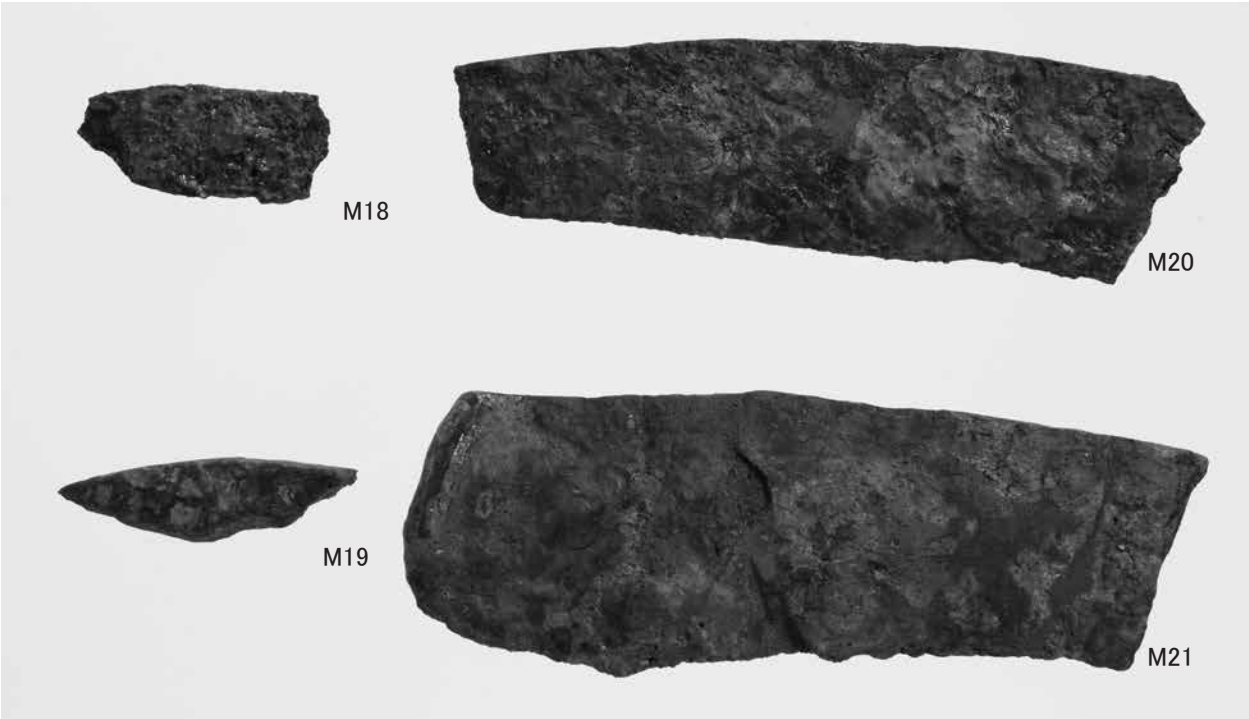


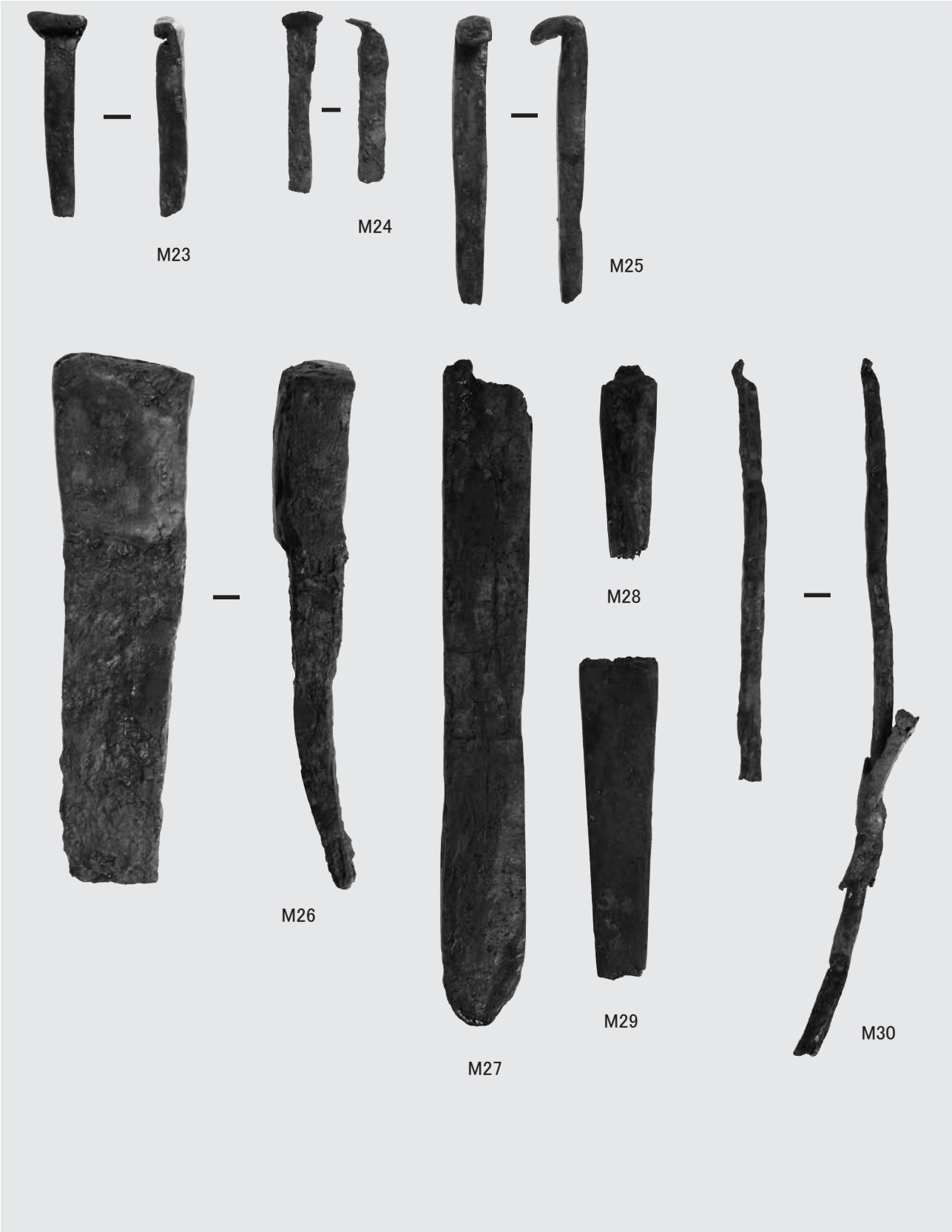



180
181
182
183
184


180
181
182
183
184

図版 46　寺地遺跡遺物（29）




M23
M24
M25
M26
M27
M28
M29
M30

図版 48　寺地窯跡群

寺地窯跡群全景（南東から）

１号窯跡検出状況（南から）

１号窯跡完掘状況（南から）

１号窯跡焼成室内窯壁落下状況
（南から）

１号窯跡焼成室（南から）

１号窯跡焚口部（南から）

図版 50　寺地窯跡群１号窯跡（2）

１号窯跡焼成室内堆積状況
（西から）

１号窯跡前庭部堆積状況
（西から）

１号窯跡焚口部堆積状況
（西から）

２号窯跡検出状況（南東から）

２号窯跡完掘状況（南東から）

図版 52　寺地窯跡群２号窯跡（2）

２号窯跡燃焼室遺物出土状況
（南東から）

２号窯跡遺物出土状況
（南東から）

２号窯跡遺物出土状況（北西から）

２号窯跡全景（北西から）

２号窯跡窯体内堆積状況
（南西から）

２号窯跡前庭部堆積状況
（北西から）

図版 54　寺地窯跡群２号窯跡（4）

２号窯跡前庭部堆積状況
（北西から）

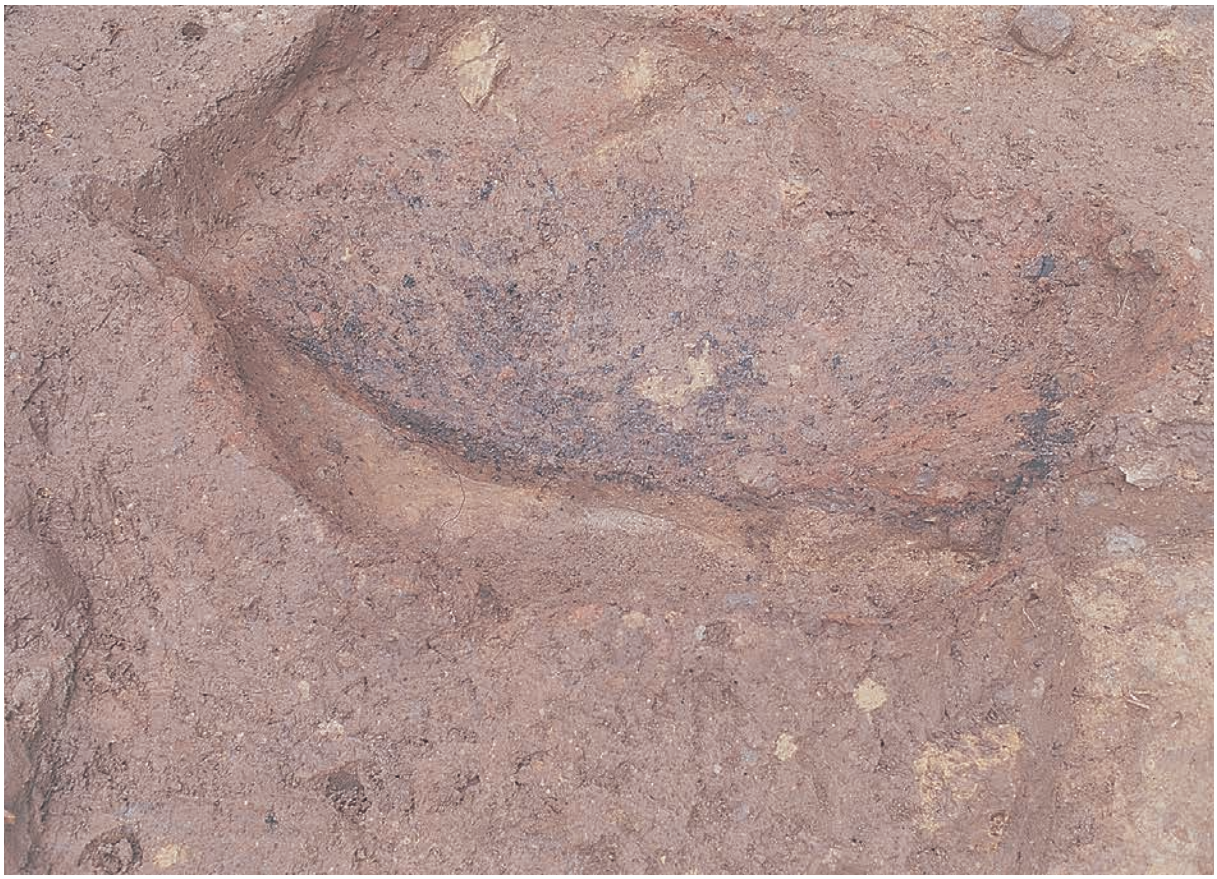
２号窯跡窯体断ち割り断面
（南東から）

２号窯跡窯体断ち割り断面
（南西から）

２号窯跡窯体断ち割り断面
（南東から）

３号窯跡断面（南から）

３号窯跡炭・焼土面検出状況
（南から）



３号窯跡炭層堆積状況（南から）

３号窯跡断ち割り断面（南から）

185

189

198

186

197

209

192

203

205

210

212

213

214

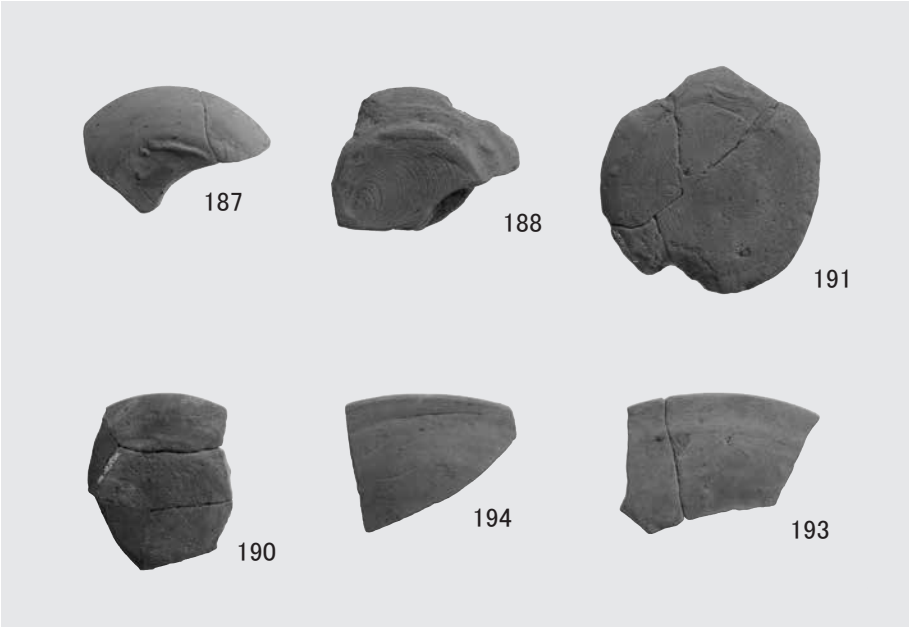
215

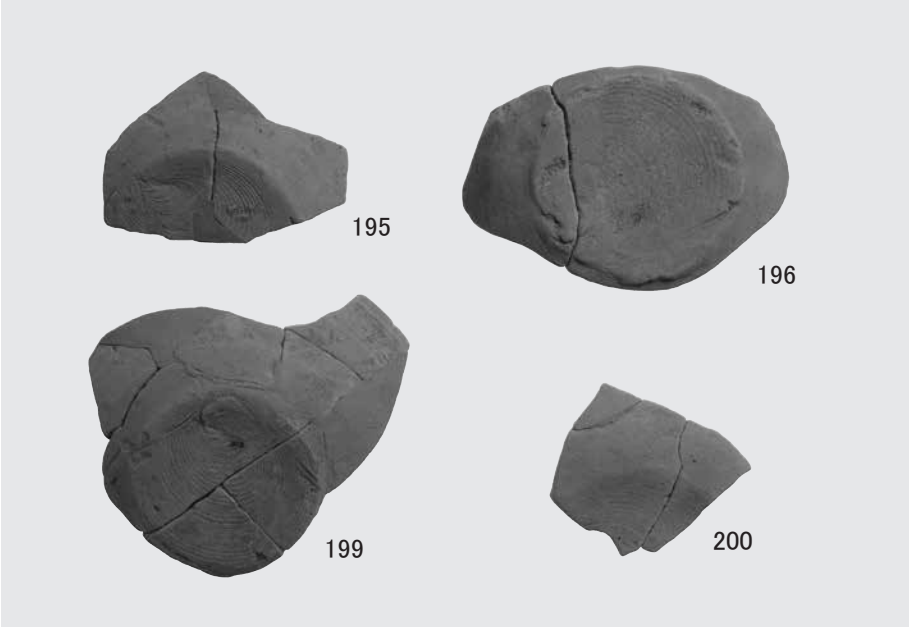
216

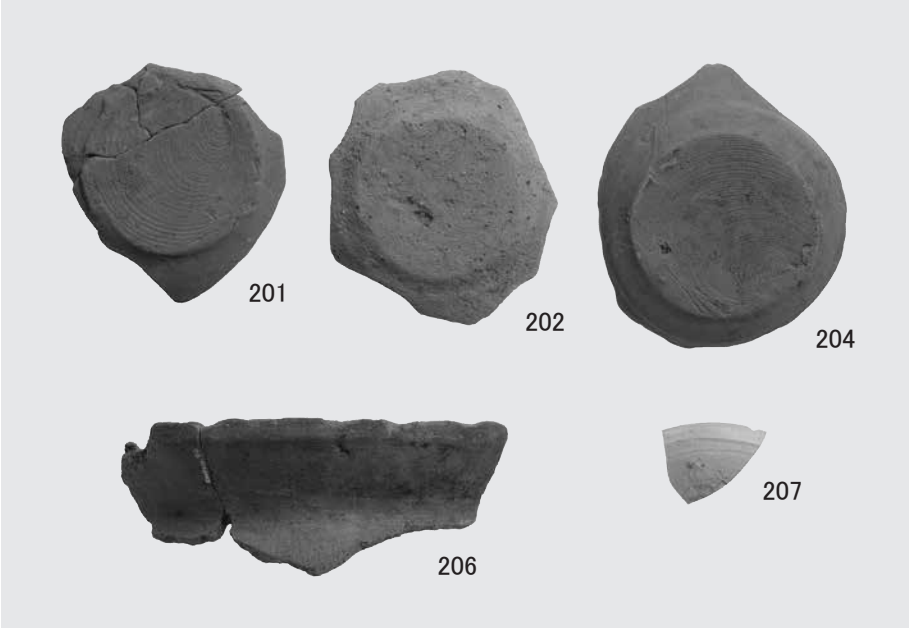
221

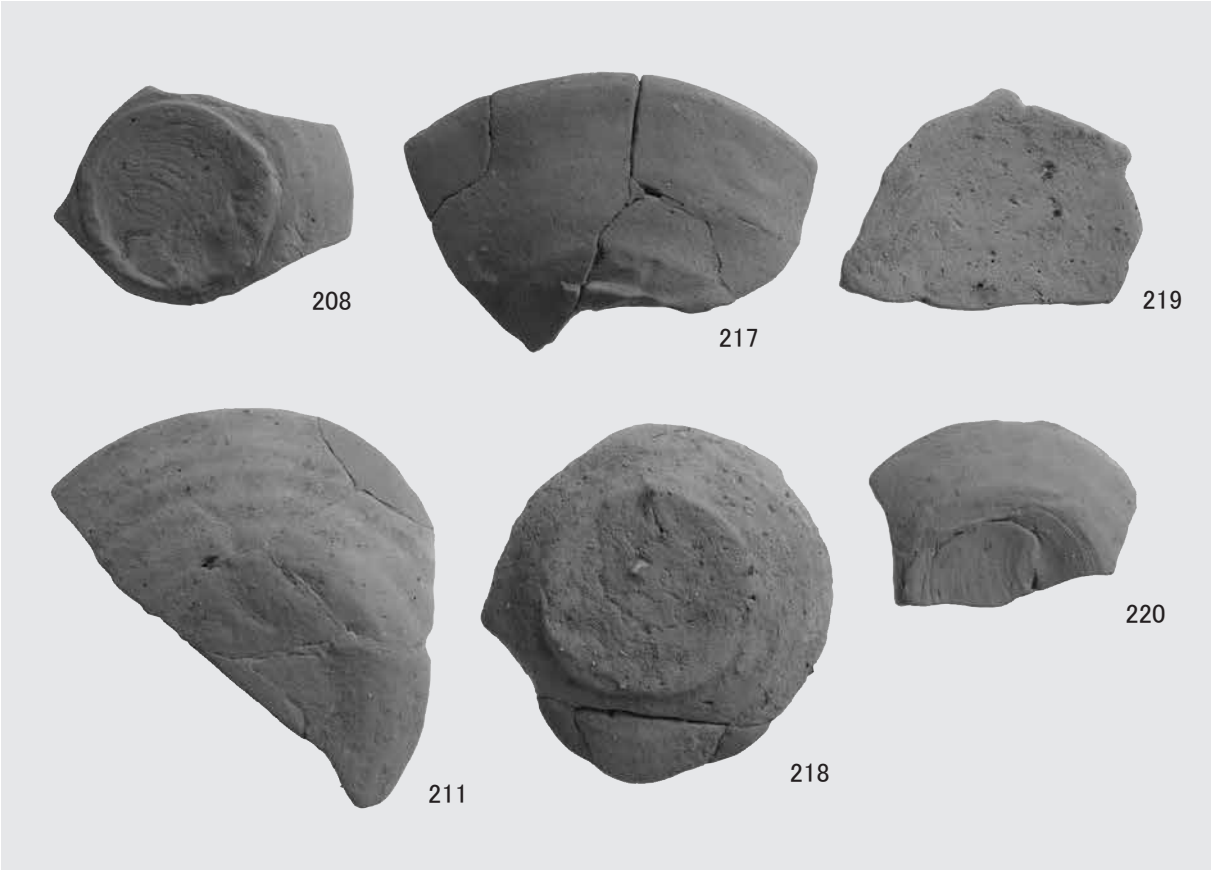
222

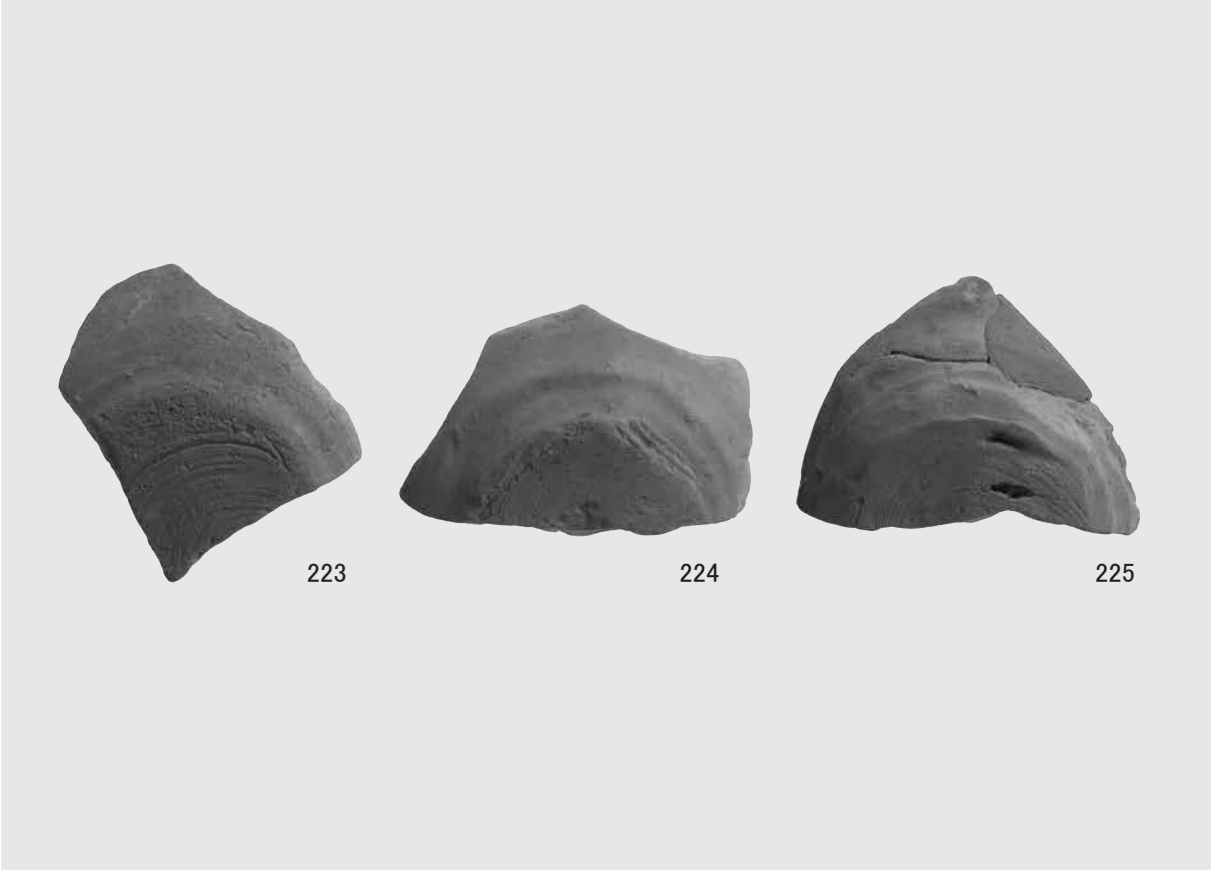
図版 58　寺地窯跡群遺物（2）








208
217
219
211
218
220


223
224
225

報告書抄録（Outline of the Report）

ふりがな	てらちこふん・てらちいせき・てらちかまあとぐん	About the Report
書　名	寺地古墳・寺地遺跡・寺地窯跡群	Excavation report of the Terachi burial mound, Terachi kilns, Terachi archaeological site
副書名	通常砂防事業（砂）尾和田川に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 452
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告	
シリーズ番号	第452冊	The Author/Editor : Hiroyuki Kubo Hideki Kurogane
編著者名	久保弘幸・鐵英記	Hyogo Construction Technology Center Archaeological research department Address : 1-1-1 Onaka, Harima, Hyogo pref. Japan (Hyogo prefectural museum of Archaeology)
編集機関	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部	
所 在 地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号 （兵庫県立考古博物館内）　TEL 079-437-5561	
発行機関	兵庫県教育委員会	Hyogo prefectural board of education
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078－362－3784	5-10-1 Shimoyamate, Cyuou ward, Kobe, Hyogo, Japan
発行年月日	平成25（2013）年 3月28日	Publication : March 28, 2013
資料保管機関	兵庫県立考古博物館	Hyogo prefectural museum of Archaeology
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号 TEL 079-437-5589	1-1-1 Onaka, Harima, Hyogo pref. Japan

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude			
寺地古墳 寺地遺跡 寺地窯跡群	養父市大谷	28222	710203 710262	35° 23′ 16″	134° 41′ 29	20030514 ～20030826 （2003076/ 2003112）	635㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺地古墳	古墳		古墳	須恵器・土師器・鉄器	
寺地遺跡	集落		柱穴・土坑・溝	須恵器・土師器・鉄器	
寺地窯跡群	窯		土師器窯跡・土坑	土師器	

要　　約	寺地古墳：6世紀末の横穴式石室を調査した。墳丘は破壊されていたが、石室床面は比較的良好に遺存しており、須恵器杯・高杯・鉄刀・刀子・耳環等が出土した。 寺地遺跡：奈良時代を中心とした柱穴・溝等を調査した。調査範囲が狭いため、建物跡などの状況は不明であるが、多数の土器類が出土したほか、移動式の竈も多数出土した。 寺地窯跡群：平安時代末～鎌倉時代の、土師器窯跡３基を調査した。うち１・２号窯は、煙管式窯の窯体が遺存していた。生産されたのは主に小皿・杯である。
Abstract	Terachi Burial mound : We excavated horizontal stone chamber which belongs the end of sixth century. The burial mound had been already destroyed, but the burial section where a coffin was buried remained well. An iron sword, knife, arrowheads, gilt earrings, and sue ware, haji ware were excavated. Terachi Site : Pillar holes, ditches of the Nara era was discovered. Because the excavation range was small, the structure of remains was unidentified. But a large number of Sue ware and Haji ware were excavated. Terachi Kilns : We excavated three kilns that belongs the end of the Heian period - the early Kamakura era. The kiln No.1 and No.2 are the long pipe-head type kiln. In those kilns, small dishes and bowls were produced.

Address of the site	Otani, Yabu Hyogo pref. Japan	Time of the Excavation	14, May ～26, Aug. 2003
Category	Burial, Kiln,Settlement	Archaeological Features	Burial mound, Kilns, Pits, Gutters,
Period	Late Kofun Period, Nara Period, Late Heian－Kamakura Period	Main Relics	Sue wares, Haji wares, Iron wares

養父市　　兵庫県文化財調査報告　第 452 冊

寺地古墳・寺地遺跡・寺地窯跡群

―通常砂防事業（砂）尾和田川に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 25（2013）年 3 月 28 日発行

編　集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　富士高速印刷株式会社
〒679-4232 兵庫県姫路市林田町上伊勢962-3